春日川河川激甚災害対策特別緊急工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

大灘遺跡

２００８．１２

香川県教育委員会

序　文

香川県高松市由良町に所在する大灘遺跡は、中世前半期を中心とする集落遺跡であり、春日川の河川激甚災害対策特別緊急工事に伴い、平成19年度に発掘調査を実施しました。

発掘調査の結果、中世前半期の木組みの井戸跡を始めとする土坑、柱穴跡等の遺構や、古代から近世にかけての多数の遺物を検出しました。特に井戸跡は、保存状態が良好であったため構造を細かく知ることができたことから、奈良時代からの保守的な構築技術の伝統がうかがうことができ、多くの成果をあげることができました。

本報告書が、春日川流域の地域史及び香川県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告に至るまでの間、関係機関並びに地元関係者各位には多大なご援助とご協力をいただきました。ここに深く感謝申し上げますとともに、今後ともご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成20年12月

香川県埋蔵文化財センター
所長　大山　眞充

例　言

1．本報告書は、春日川河川激甚災害対策特別緊急工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告で、香川県高松市由良町に所在する大灘遺跡（おおなだいせき）の報告を収録した。

2．発掘調査は、香川県教育委員会が調査主体となり、香川県埋蔵文化財センターが調査担当者として実施した。

3．発掘調査は、下記の期間及び担当で実施した。
期間：平成19年11月1日～平成20年1月31日
担当：文化財専門員　木下　晴一、文化財専門員　山元　素子、調査技術員　木野戸　直

4．調査に当って、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）
香川県高松土木事務所、地元自治会、地元水利組合

5．報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。執筆は木下晴一が担当した。

6．報告書で用いる座標系は国土座標第Ⅳ系（世界測地系）で、方位の北は国土座標第Ⅳ系による。また、標高は東京湾平均海水面を基準としている。

7．遺構は下記の略号により表示している。
ＳＡ 柵列跡　ＳＫ 土坑　ＳＤ 溝状遺構　ＳＥ 井戸跡　ＳＰ 柱穴跡　ＳＲ 自然河川跡

8．遺構断面図の水平線上の数値は、水平線の標高値（単位ｍ）を示している。

本文目次

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯 ……1
第２節　調査体制・整理体制 ……4

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境 ……5
第２節　歴史的環境 ……5

第３章　調査の成果

第１節　調査区の概要と層序 ……9
第２節　Ⅰ区の調査 ……11
第３節　Ⅱ区の調査 ……14
第４節　Ⅲ区の調査 ……18
第５節　Ⅳ区の調査 ……44

第４章　自然科学的分析

第１節　香川県大灘遺跡における樹種同定 ……49

第５章　まとめ ……52

挿図目次

第 1 図　遺跡位置図（1）…… 1
第 2 図　遺跡位置図（2）…… 2
第 3 図　遺跡位置図（3）…… 3
第 4 図　微形地分類予察図 …… 6
第 5 図　周辺の主要遺跡 …… 7
第 6 図　断面図作成位置 …… 9
第 7 図　調査区割図 …… 10
第 8 図　Ⅰ区　平面図 …… 11
第 9 図　Ⅰ区　土層断面図 …… 12
第 10 図　Ⅰ区　出土遺物実測図 …… 13
第 11 図　Ⅱ区　遺構配置図 …… 14
第 12 図　Ⅱ区　土層断面図 …… 15
第 13 図　Ⅱ区　遺構等断面図 …… 16
第 14 図　Ⅱ区　出土遺物実測図 …… 17
第 15 図　Ⅲ区　遺構配置図（上層）…… 18
第 16 図　Ⅲ区　遺構配置図（下層）…… 19
第 17 図　Ⅲ区　土層断面図 …… 20
第 18 図　Ⅲ区　SA01 平・断面図 …… 21
第 19 図　Ⅲ区　SP 出土遺物実測図 …… 21
第 20 図　Ⅲ区　SP 埋土 …… 21
第 21 図　SK04 平・断面図 …… 22
第 22 図　SK05 平・断面図，出土遺物実測図 …… 22
第 23 図　SK06・07 平・断面図，出土遺物実測図 …… 23
第 24 図　SK08 出土遺物実測図 …… 23
第 25 図　SK11 平・断面図，出土遺物実測図 …… 24
第 26 図　SD01 断面図，出土遺物実測図 …… 25
第 27 図　SD02 ～ 04 断面図，出土遺物実測図 …… 25
第 28 図　SE01 平・断面図 …… 26
第 29 図　SE01 出土遺物実測図 …… 27
第 30 図　SE02 平・断面図 …… 28
第 31 図　SE02 平・断面見通図 …… 29
第 32 図　SE02 出土遺物実測図 …… 30
第 33 図　SE02 出土遺物実測図 …… 31
第 34 図　SE02 木組み模式図 …… 31
第 35 図　SE02 井戸部材実測図（1）…… 32
第 36 図　SE02 井戸部材実測図（2）…… 33
第 37 図　SE02 井戸部材実測図（3）…… 34
第 38 図　SE02 井戸部材実測図（4）…… 35
第 39 図　SE02 井戸部材実測図（5）…… 36
第 40 図　SE02 井戸部材実測図（6）…… 37
第 41 図　SE02 井戸部材実測図（7）…… 38
第 42 図　SE02 井戸部材実測図（8）…… 39
第 43 図　SE02 井戸部材実測図（9）…… 40
第 44 図　SE02 井戸部材実測図（10）…… 41
第 45 図　SR01 断面図 …… 42
第 46 図　SR01 上層　出土遺物実測図 …… 42
第 47 図　SR01 下層　出土遺物実測図 …… 42
第 48 図　Ⅲ区　拡張区断面図，出土遺物実測図 …… 43
第 49 図　Ⅲ区　その他の出土遺物実測図 …… 43
第 50 図　Ⅳ区　遺構配置図 …… 44
第 51 図　Ⅳ区　土層断面図 …… 45
第 52 図　Ⅳ区　SD01、02 断面図 …… 46
第 53 図　Ⅳ区　造成土断面図 …… 46
第 54 図　Ⅳ区　出土遺物実測図 …… 47
第 55 図　大灘遺跡の木材 …… 51
第 56 図　遺構変遷図（1）…… 53
第 57 図　遺構変遷図（2）…… 54

表目次

第１表　大灘遺跡における樹種同定結果…… 50
第２表　大灘遺跡出土土器観察表…… 56
第３表　大灘遺跡出土瓦観察表…… 62
第４表　大灘遺跡出土木器観察表…… 63
第５表　大灘遺跡出土石器観察表…… 63
第６表　大灘遺跡出土金属器観察表…… 63
第７表　大灘遺跡柱穴観察表…… 64

図版目次

図版１
　遺跡付近空中写真（１）
（1948 年アメリカ空軍撮影　M746　50 部分）
図版２
　遺跡付近空中写真（２）
（1962 年国土地理院撮影　S1-62-4　C8-31 部分）
図版３
　調査前遠景（北から）
　Ⅰ（N）区　完掘状況（西南から）
図版４
　Ⅰ（S）区　完掘状況（南から）
　Ⅰ（S）区　調査区北壁（南東から）
図版５
　Ⅱ（N）区　完掘状況（南から）
　Ⅱ（N）区　調査区東壁（西から）
図版６
　Ⅱ（S）区　完掘状況（東から）
　Ⅱ（S）区　SD01・02 掘削状況（北から）
図版７
　Ⅲ区　掘削状況（南から）
　Ⅲ区　完掘状況（西から）
図版８
　Ⅲ区　SE02 掘削状況（東から）
　Ⅲ区　SE02 掘削状況（東から）
図版９
　Ⅲ区　SE02 掘削状況（東から）
　Ⅲ区　SR01 断面（西南から）
図版 10
　Ⅳ区　造成土　南断面（東南から）
　Ⅳ区　調査区南壁（北から）
図版 11
　Ⅲ区　上層遺構掘削状況（南から）
　Ⅲ区　遠景（南から）
図版 12
　Ⅲ区　SK06・07 断面（西から）
　Ⅲ区　SK11 掘削状況（西から）
図版 13
　Ⅲ区　SD01 断面（東から）
　Ⅲ区　SE01 断面（西から）
図版 14
　Ⅲ区　SE01 掘削状況（西から）
　Ⅲ区　SE01 掘削状況（南から）
図版 15
　Ⅲ区　SR01 遺物出土状況（西南から）
　Ⅳ区　掘削状況（北から）
図版 16
　Ⅳ区　SD02 断面（北東から）
　Ⅳ区　造成土　北断面（南から）
図版 17
　出土遺物 30,52,56,57,59,65,66,75,76,68,69
図版 18
　出土遺物 85,109,112,119,155,162,164,165,178,197
図版 19
　出土遺物 124,125
図版 20
　出土遺物 129,140
図版 21
　出土遺物 131,141
図版 22
　出土遺物 132,133,135
図版 23
　出土遺物 135,143
図版 24
　出土遺物 130,134

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

2004（平成16）年、香川県は台風15、16、21、23号の４つの台風により大きな被害を受けた。このうち台風23号は、10月19～21日に大雨を降らせ、高松地方気象台において累計雨量285mm、最大時間雨量42.5mmを記録した。

この台風23号によって、香川県各地で斜面崩壊、土石流、河川の氾濫、内水被害が発生し、記録的な災害となった。高松市東部を流れる春日川においては、20日朝から急激に水位が上昇し、各所で越流による氾濫が発生した。この結果、春日川の六条橋上流地域では床上浸水1235戸、床下浸水909戸の被害が発生した。

香川県は、このような災害の再発を防ぐため、川幅拡幅を主体に築堤、掘削等を行い、2004年23号台風と同じ流量を計画高水位以下で安全に流下させるための事業を行っている。このうち六条橋上流地点から坂元橋地点までの2500ｍの区間は、激甚災害の指定を受け、平成16年度から21年度までの予定で事業を実施している。

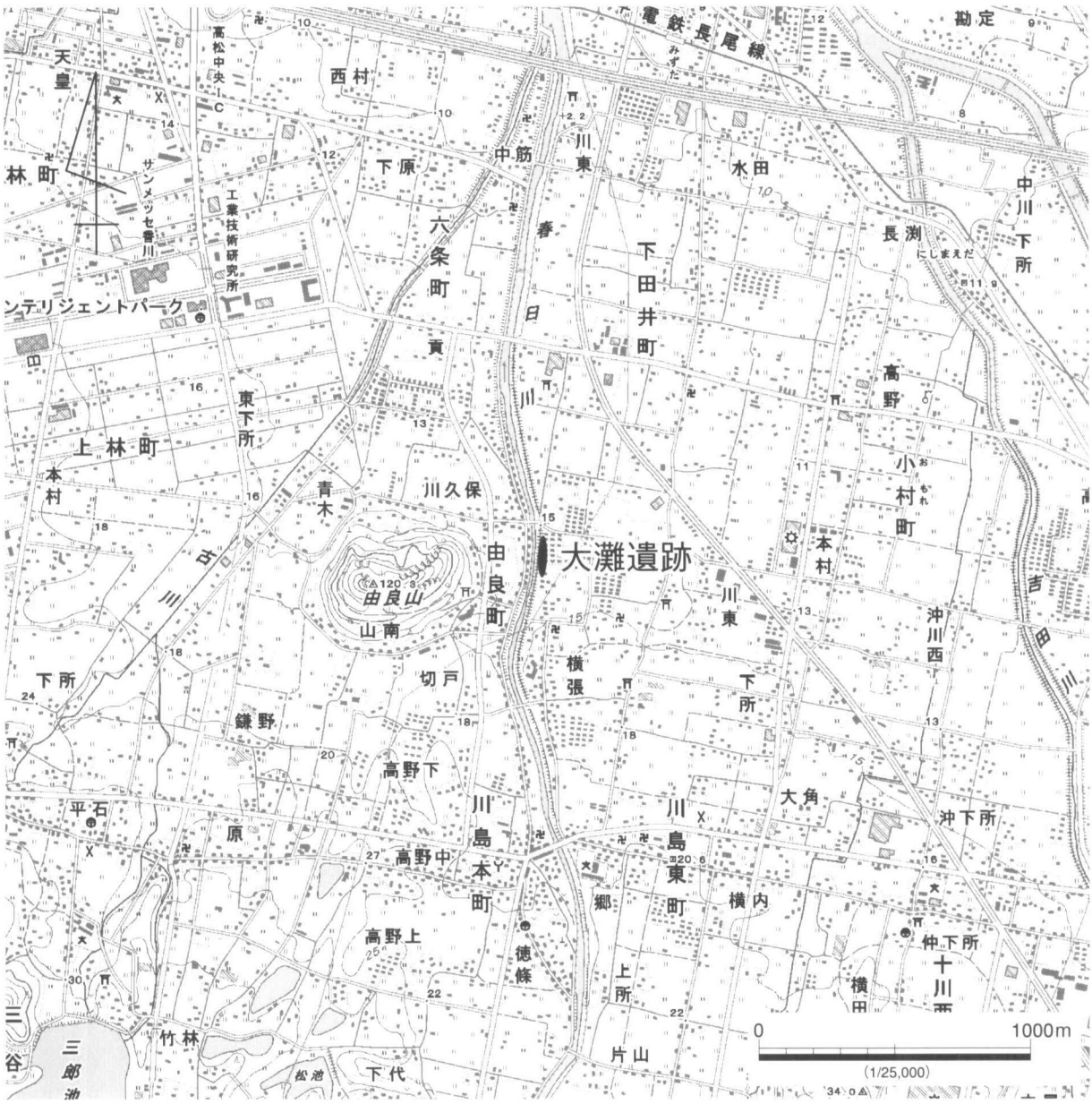
大灘遺跡は、上記の事業実施予定地域で発見された遺跡である。平成19年６月28日に県教育委員会による試掘調査によって、中世の柱穴跡、土坑や、中世から近世の溝状遺構、旧河道跡が検出され、1,171㎡について文化財保護法による保護措置が必要と判断された。大灘遺跡の発掘調査は、激甚災害特別緊急事業地内であることから早急に着手する必要があり、土木部と県教育委員会との協議の結果、香川県埋蔵文化財センターの年度調査計画を変更して、平成19年11月１日より平成20年１月31日までの３ヶ

第１図　遺跡位置図（１）

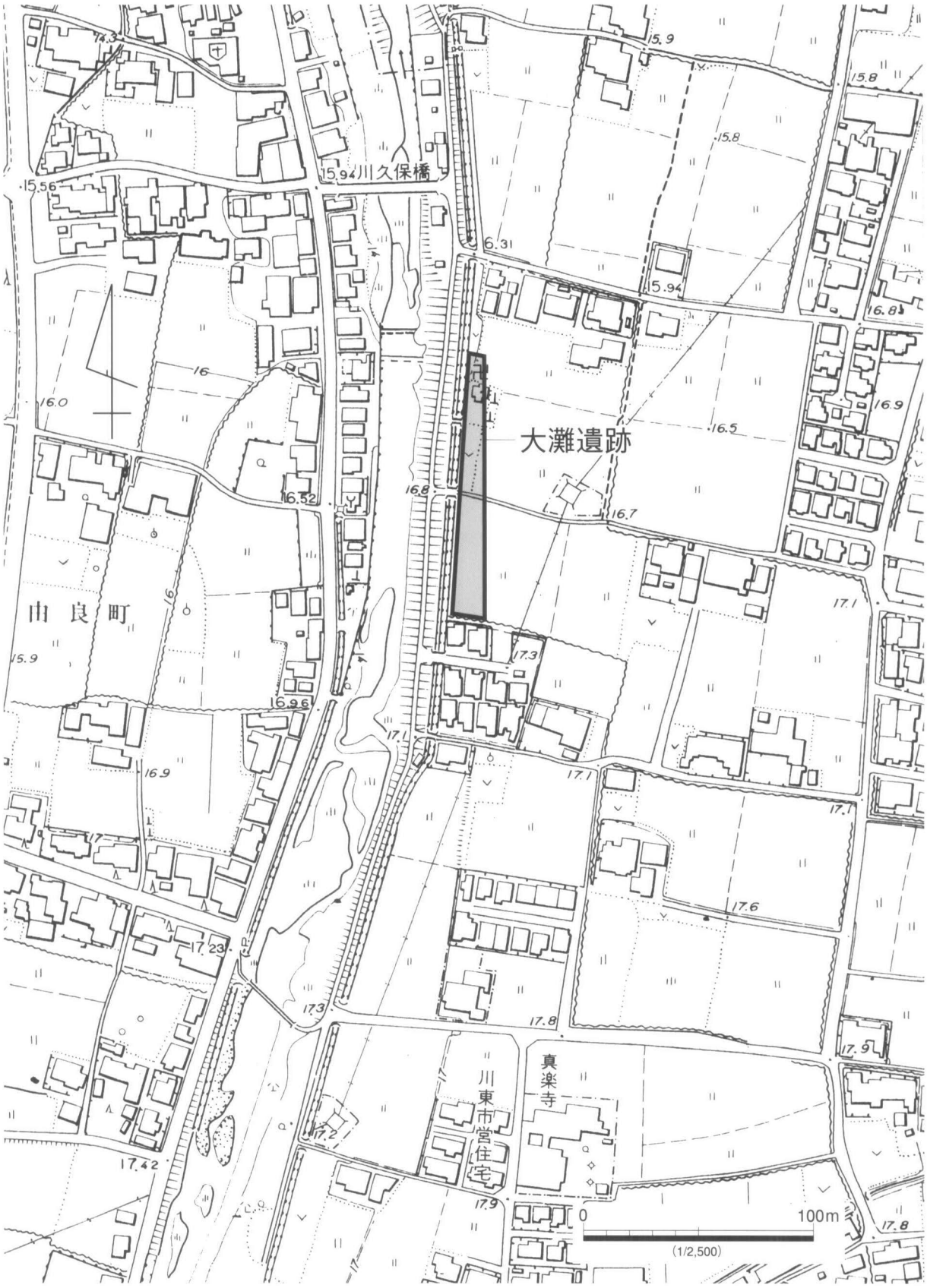
月間で調査を行うこととなった。

発掘調査は、周辺での複数の本体工事と並行して行うこととなったが、高松土木事務所の調整により、相互の協力が図られ、順調に進めることができた。

整理作業は、平成20年4月1日から6月30日の3ヶ月の期間で行った。遺物の洗浄や注記作業については終了していたことから、遺物の接合・図化・写真撮影と遺構図の浄書、遺構写真の整理等を行い、本書にまとめた。出土遺物量は、28㌻入りコンテナ約30箱である。



第2図　遺跡位置図（2）（国土地理院1/25,000地形図を使用）



第３図　遺跡位置図（３）（高松市都市計画図 1/2,500「三谷 1」を使用）

第２節　調査体制・整理体制

発掘調査の体制は、以下のとおりである。

平成 19 年度

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課

課　　長　　鈴木　健司

総括・生涯学習推進グループ

課長補佐　　武井　壽紀

副主幹　　古田　泉

主　　任　　林　照代

文化財グループ

課長補佐　　藤好　史郎

文化財専門員　森　格也

文化財専門員　信里　芳紀

香川県埋蔵文化財センター

総括　所　長　　渡部　明夫

次　長　　廣瀬　常雄

総務課　課　長　　野口　孝一

主　任　　宮田　久美子

主　任　　嶋田　和司

主　任　　古市　和子

調査課　課　長　　廣瀬　常雄（兼務）

文化財専門員　木下　晴一

文化財専門員　山元　素子

嘱託（土木）　高嶋　勝英

嘱託（調査技術員）木野戸　直

なお、発掘作業に携わった方は、以下のとおりである。

整理作業員　市川　孝子　　調査補助員　木下　美千代

発掘作業員　新池谷　昭雄、宮地　恵美子、中川　恒夫、百歩　静子、糸目　八重子、稲垣　啓子、和田　悦子、佐野　清志、金本　勝行、矢木　和子、小川　浩司、東原　輝明、嶋宮　千恵、奥田　武

整理作業の体制は、以下のとおりである。

平成 20 年度

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課

課　　長　　春山　浩康

総括・生涯学習推進グループ

課長補佐　　武井　壽紀

副主幹　　香西　としみ

主　　任　　林　照代

文化財グループ

主幹（兼）課長補佐　　藤好　史郎

主任文化財専門員　森　格也

文化財専門員　乗松　真也

香川県埋蔵文化財センター

総括　所　長　　大山　眞充

次　長　　廣瀬　常雄

総務課　課　長　　廣瀬　常雄（兼務）

主　任　　宮田　久美子

主　任　　嶋田　和司

主　任　　古市　和子

資料普及課　課　長　　西岡　達哉

文化財専門員　木下　晴一

なお、整理作業に携わった方は、以下のとおりである。

嘱託整理作業員　山地　真理子・市川　孝子・加藤　恵子・柴垣　智美・朝田　加奈子・廣瀬　杏子

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

香川県の地形は、徳島県との県境付近の標高 700 ～ 1000 ｍの讃岐山脈、その北側の花崗岩よりなる丘陵地帯や頂部に安山岩等の溶岩をのせたメサやビュートと呼ばれる山塊、丘陵地帯の前縁やメサ、ビュート間に発達する標高 60 ～ 200 ｍの洪積段丘、その前縁の扇状地や三角州からなる沖積平野が南から北に配列している。

大灘遺跡の地理的環境について、第４図をもとに説明する。第４図は、昭和 37 年国土地理院撮影の１万分の１白黒空中写真の実体判読を中心に、現地調査によって作成した微地形分類予察図である。

大灘遺跡は、先述の丘陵地帯・洪積段丘から沖積平野に移行する付近の春日川右岸に接している。遺跡西側には、標高 120 ｍのビュート（由良山）があり、景観を特色付けている。春日川は、高松市西植田町の山中に水源をもつ流路延長約 15km、流域面積約 63 平方kmの河川で、西植田町稗田で朝倉川を合わせ、幅 200 ～ 300 ｍの谷を北上して川島南町で沖積平野に流入する。土地条件図等の１～ 2.5 ｍ間隔の詳細な等高線図を観察すると、川島本町以北の春日川左岸側は香東川が形成した緩傾斜の扇状地の扇端付近の様相を示しており、春日川右岸はいわゆる中間地帯（自然堤防帯）の様相を示している。つまり、遺跡付近の春日川は、香東川扇状地の扇端付近に沿って北上して流れ、瀬戸内海へ注ぐ河口付近で新川に合流している。また、六条町以北の春日川は、東側を流れる新川（東山崎町以北）とともに直線に流路を固定されているが、固定の時期については明確でない。

遺跡付近では春日川の両岸に沿って比高 0.5 ～ 1 ｍの小崖が見られ、幅 100 ～ 200 ｍの一段低い地形面が認められる。ここに流入する旧河道Ａは、後述する条里型地割の坪界線に沿ったものであり、本来適当な深さに掘られていた水路が、河床低下によって開析されたものと考えられる。つまり、小崖は条里型地割の施工以後に春日川の河床低下が起こったために形成された完新世段丘崖と考えられる。発掘調査でもこの崖が検出されている。なお、図中Ｂは削り残しの段丘面であるのか氾濫原中の微高地であるのか不明である。なお、完新世段丘崖は遺跡の北の下田井町以北は不明瞭になっている。

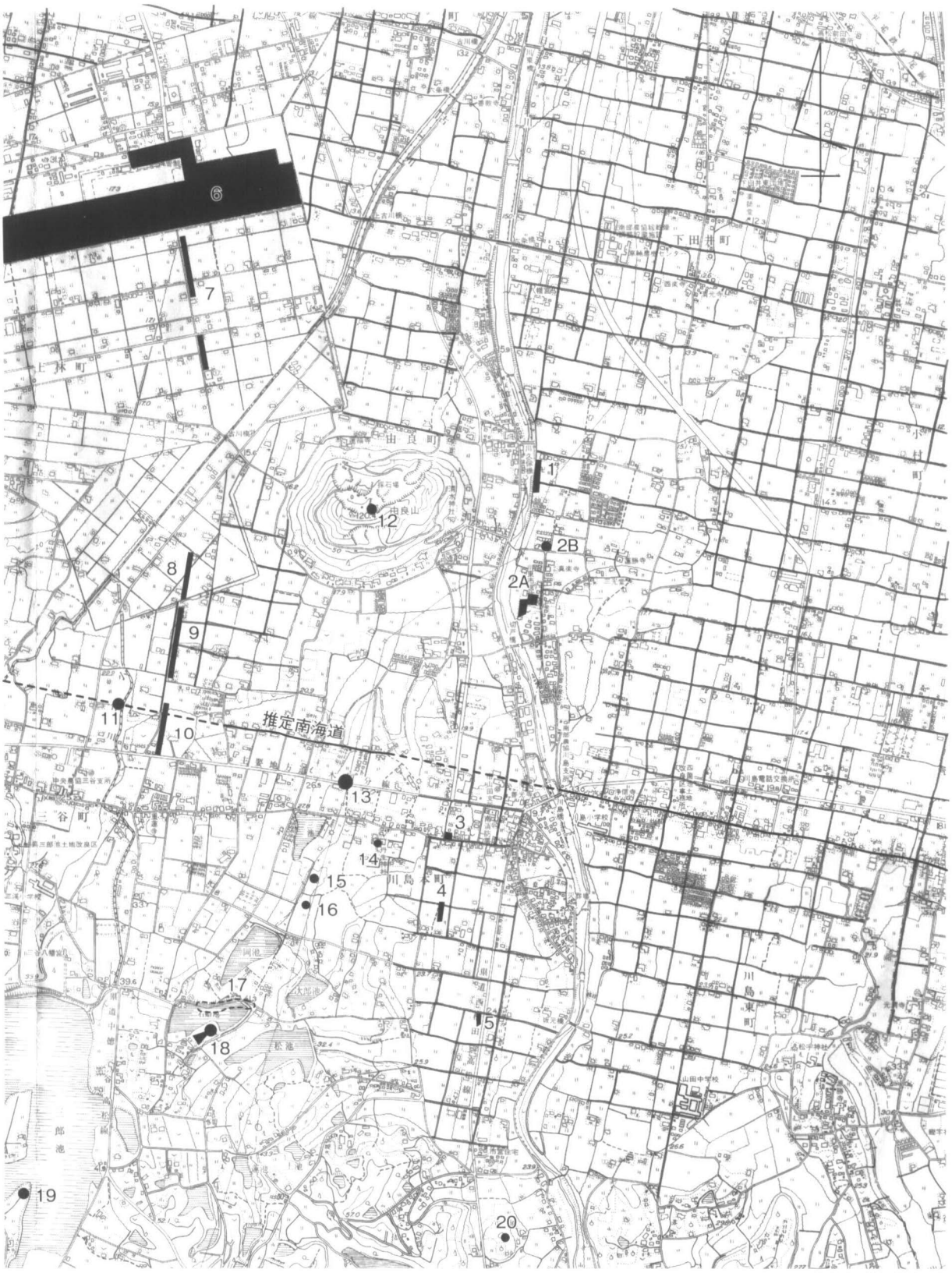
第２節　歴史的環境

大灘遺跡付近の春日川流域は、これまで発掘調査事例が少なく、不明な点が多かったが、近年調査事例が増加している。由良南原遺跡では、市営団地建替えに伴う平成 12 年度の調査で、掘立柱建物跡５、土坑８、溝状遺構 25、ピット 240、旧河道跡１が検出されている。年代は 13 世紀代を中心とし、一部 14 世紀に下るものである。この調査地は大灘遺跡の南約 400 ｍの場所に当る。また、児童福祉施設の建設に伴い平成 15 年度に行われた調査では、中世から近世の溝状遺構、土坑等を検出している。この調査区は、大灘遺跡の南約 160 ｍの地点であるが、大灘遺跡と堆積層序が類似するようである。

第５図の範囲外になるが、十河小学校内の西下遺跡では、７世紀前半期以降と考えられる大型の掘立柱建物跡の他、14 世紀を中心とする集落関連の遺構が検出されている。

春日川左岸では、川島本町・池田町で川島本町山田遺跡、川島本町遺跡、川島本町南遺跡が調査されている。なかでも川島本町遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落関連遺構の他、縄

第４図　微形地分類予察図



1　大灘遺跡
2A 由良南原遺跡（平成 12 年度調査）
2B 由良南原遺跡（平成 15 年度調査）
3　川島本町山田遺跡
4　川島本町遺跡
5　川島本町南遺跡
6　空港跡地遺跡
7　上林遺跡
8　北野遺跡
9　鎌野西遺跡
10　三谷中原遺跡
11　弘福寺領讃岐国山田郡田図関係遺跡　南海道調査区
12　由良城跡
13　高野丸山古墳
14　高野廃寺
15　高野南 1 号墳
16　高野南 2 号墳
17　石舟池古墳群
18　三谷石舟古墳
19　三郎池西岸窯跡
20　光専寺山遺跡　光専寺山東・西古墳

── 条里地割

第５図　周辺の主要遺跡（基図は高松市 1/1 万都市計画図を使用）

文時代後期の遺物包含層が検出されている。

このほか、西南方向の洪積段丘上には高野丸山古墳や三谷石舟古墳を始め、多数の古墳が築かれている。また、付近には由良城を始め、いくつかの中世城館の存在が伝承されているが、地表面に明確な痕跡を残すものは少ない。

香東川扇状地上や、春日川や新川が形成した自然堤防帯上には、条里型地割が明瞭に認められる。春日川と新川間では東西方向の坪界線は明瞭であるが、南北方向は不明瞭なところが多い。また、大灘遺跡付近では条里坪界線が乱れている。いずれも河川の氾濫が多発したことが原因ではないかとされている。なお、遺跡の南には、条里型地割の余剰帯が見られ、これが通る段丘には切り通し状の遺構が残ることから、古代官道（南海道）の経路が復原されている。

このほか、空中写真を観察すると由良山の南と、川島東町の洪積段丘を開析する谷の出口にため池の痕跡が認められる（第４図Ｃ～Ｅ)。由良山の南にあった由良南池は存在の知られているもので、寛文11年（1671）に廃絶されたことが伝えられている（木田郡史)。Ｄ、Ｅのため池痕跡については、築造・廃絶の時期は今のところわからない。池敷きのわりには貯水量が少ないことや集水域が狭いことなどの悪条件と、上流域の四箇池が整備されたこと等が理由で廃止されたものと思われる。なお、春日川右岸の灌漑は、四箇池土地改良区が管理するが、春日川に高さの低い堰を設けて取水し、河岸に沿って１km以上用水路を伸すことによって、数メートル高い段丘Ⅲ面上に用水をのせている。大灘遺跡の西側では約200ｍ下流で段丘Ⅲ面上にのる用水と、さらに下流に伸る用水が上下２段に並走している。三面コンクリート張りの水路が導入される以前は、維持管理がきわめて難しかったと思われる。

このほか、由良山東麓の清水神社には、付近にある上・中・下御盥と呼ばれる湧水から取った神水で３個体の甕を洗うと雨が降るという雨乞い神事が伝えられている。また、遺跡北には「川久保」、南には「切戸」という地名があり、いずれも河川災害の多発を暗示する地名と考えられる。

主な参考文献
『由良南原遺跡　高松市川東団地住宅建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高松市教育委員会　2002
「由良南原遺跡」『高松市内遺跡発掘調査概報　平成15年度国庫補助事業』高松市教育委員会　2004
「由良南原遺跡」『高松市内遺跡発掘調査概報　平成16年度国庫補助事業』高松市教育委員会　2005
『西下遺跡　高松市十河小学校校舎建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高松市教育委員会　2008
『高松平野南東部における埋蔵文化財調査報告書　光専寺山遺跡　竹元遺跡　高野廃寺　本村遺跡』高松市教育委員会　2008
『平石上２号墳　石舟池古墳群』高松市教育委員会　2007
『讃岐国弘福寺領の調査Ⅰ』高松市教育委員会　1992
『讃岐国弘福寺領の調査Ⅱ』高松市教育委員会　1999
『県道高松善通寺線道路改修事業及び県道西植田高松線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　田村遺跡Ⅱ　川島本町遺跡　川島本町南遺跡』香川県教育委員会　2007
『県道大浜仁尾線道路改良事業及び県道西植田高松線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　家の浦遺跡・川島本町山田遺跡』香川県教育委員会　2007
『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報　平成13年度』香川県教育委員会　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　2002
『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』香川県教育委員会　2003
『日本歴史地名大系　香川県の地名』平凡社　1989

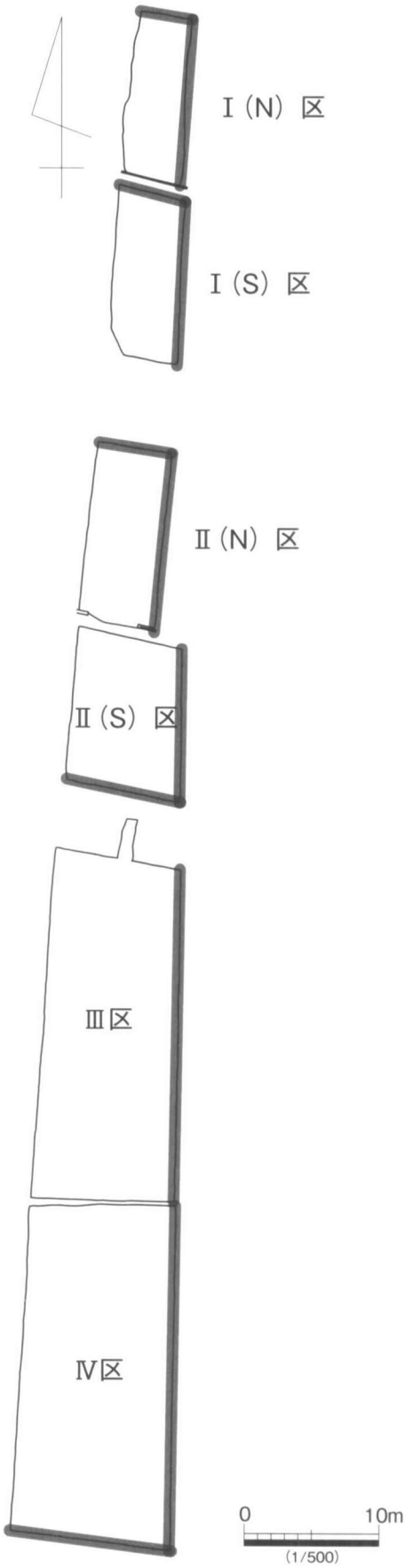
第３章　調査の成果

第１節　調査区の概要と層序

調査対象地は、春日川右岸に沿った延長約 115 m、面積 1,171㎡の範囲である。当初は、調査対象地を北からⅠ～Ⅳ区に四分割したが、北側のⅠ区とⅡ区については、住宅に隣接しているために、掘削土の移動をできるだけ少なくすることを目的として、それぞれの調査区をさらに二分割して調査を行うこととした。

高松法務局高松南出張所が保管する明治 23 年調整の地籍図（地押調査更正図）によると、調査対象地は、Ⅱ（N）区が原野（官有地）とされる以外は田であった。昭和 50 年代以降、宅地化が進み、調査着手時には、Ⅰ区、Ⅱ（S）区は宅地跡、Ⅲ、Ⅳ区は田であった。なお、Ⅱ（N）区には薬師堂と呼ばれる小祠が祀られていた。

調査対象地の層序は、地表から水田耕土（宅地跡では造成土）・遺物包含層が堆積し、その下に砂層が堆積していた。砂層は、細砂、中砂を主体とするもので、厚さが約 0.6 mあり、淘汰されていることから、洪水による堆積層と推定される。今回の調査で検出された遺構は、すべて砂層上面で検出したものである。なお、砂層中にも微量であるが弥生時代後期から古墳時代後期の遺物が包含されている。これらが元来砂層中に包含されていた遺物なのか、遺構に伴うもので、砂層であるために遺構が識別できなかったものなのか判別できなかった。砂層の下には、約 0.2 mの厚さで黒褐色粘質土（草本質泥炭）層が堆積している。この層については、Ⅱ～Ⅳ区の東壁際で掘削した排水溝や、井戸跡等の深く掘り下げた箇所の観察の結果からは、遺構・遺物は認められなかった。なお、調査対象地では、後世に削られた部分以外はこの層序を基本とするが、この層序が春日川流域に沿って帯状に見られるのか、あるいは、もう少し広域の標準的な堆積状況を示しているのか、さらに周辺の情報を集めて判断する必要がある。



第６図　断面図作成位置

Y=54000
Y=54050
Y=54100
X=142850
X=142800
X=142750
X=142700
計画河道
春日川
Ⅰ(N)区
Ⅰ(S)区
Ⅱ(N)区
Ⅱ(S)区
Ⅲ区
Ⅳ区
0
50m
(1/2,000)

第７図　調査区割図

第２節　Ⅰ区の調査

１．概要

Ⅰ区は調査対象地の北端の調査区で、面積約230㎡である。先述のように二分割して調査を行った。遺構は無く、28㍑入りコンテナ１箱分の土器細片を採集した。

第９図は、Ⅰ（N）区とⅠ（S）区の北壁と東壁の断面図である。

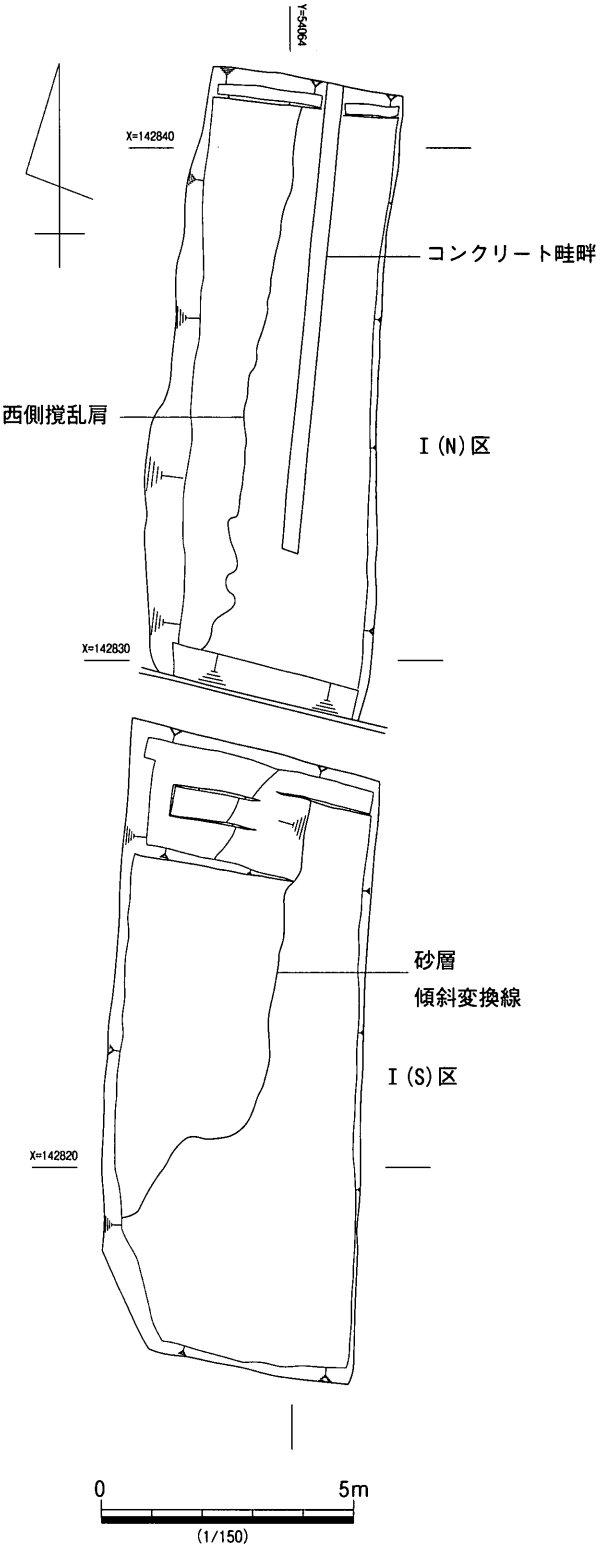
東壁の断面図を見ると、Ⅰ（N）区、Ⅰ（S）区とも、細砂～小礫からなる砂層が調査区東端から西に向かって急激に落ち込んでいる。この砂層の上面がⅡ～Ⅳ区の遺構面であるが、Ⅰ（N）区では、砂層の斜面がわずかに検出されたのみであった。この砂層と水田耕土の間に堆積する層から中世を中心とし、染付片等の土器細片が出土している。また、１～６層は、きわめて新しい時代の造成土で、昭和36年と43年の５円玉やビニール片が含まれていた。遺構は検出されなかった。

Ⅰ（S）区は、木の根の生育と小祠移動時の木の根の除去によってひどく攪乱されていた。Ⅰ（S）区もⅠ（N）区と同様に、遺構面と考える砂層が西に向かって急激に落ち込んでいる。この落ち込みのラインは、調査区の東北端から西南方向に対角線状に伸ていた。砂層の上面は支持力が無く、歩くと足がめり込むような状況である。落ち込んだ部分を埋める堆積土は、淘汰されており、自然堆積層と考えられる（北壁８，９層）。なお、砂層上面では遺構は検出されなかった。

Ⅰ（N）区、Ⅰ（S）区での砂層が春日川に向って落ち込んでいる様相は、Ⅳ区でも観察される。Ⅳ区の落ち込みは、調査区南に現在も見られる小崖に連続することから、完新世段丘Ⅱ面と氾濫原面を画する崖に相当するものと考えられる。

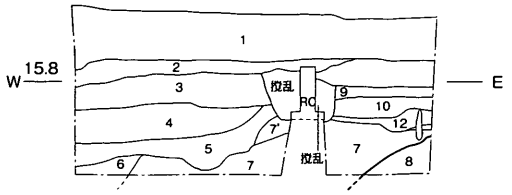
また、Ⅰ（N）区、Ⅰ（S）区では、調査区西よりに新しい時代の攪乱が見られるが、これは四箇池用水の修築の際の掘り方に当ると考えられる。

Ⅰ（S）区は、明治地籍図に官有地と記載され



第８図　Ⅰ区　平面図

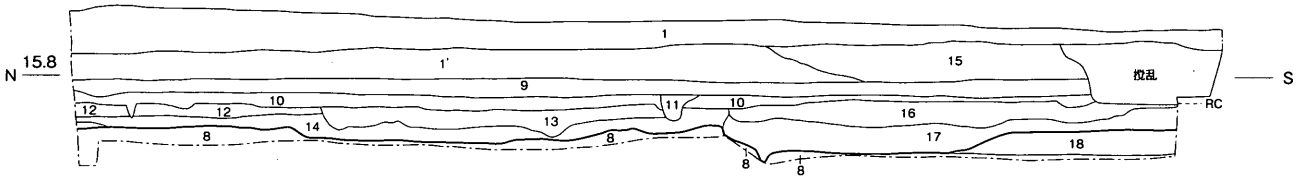
Ⅰ(N) 区　北壁



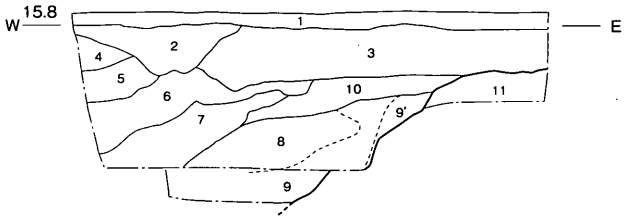
Ⅰ(N) 区　北壁・東壁

1　花崗土
1'　花崗土（1.1'層の境界に5cm厚の造成土（15層）あり）
2　10YR4/3　にぶい黄褐色小礫混じり砂質土（Fe多含～中砂主　造成土）
3　2.5Y4/2　暗灰黄色砂混じりシルト質土（Fe多含1cmほどの礫まばら含む、細砂～小礫主造成土）
4　2.5Y4/1　黄灰色礫混じりシルト質土（15cm以下の礫（3cmほどが主）含　人為的に埋められた状況、コンクリート塊含まれる）造成土
5　5Y4/1　灰色小礫混じり極細砂質土　（Fe多含　10cm以下の礫まばら含　造成土）
6　10YR5/3　にぶい黄褐色極細砂質土（小礫まばら含　粒径揃う、2.5Y3/1　黒褐色砂質土のブロックが含まれる）
7　10YR5/3　にぶい黄褐色極細砂質土（小礫まばら含　粒径揃う）
7'　7層より色調やや暗い
8　5Y5/4　黄褐色砂（細砂～小礫よりなる　インブリケーションあり）
9　2.5Y4/2　暗灰黄色シルト質土　（小礫まばら含む　Fe含）旧水田耕土
10　2.5Y5/2　暗灰黄色小礫混じりシルト質土　（Fe含）
11　2.5Y5/2　暗灰黄色小礫混じりシルト質土　（下方でFe含）
12　2.5Y5/2　暗灰黄色極細砂質土　（Fe含小礫含）
13　2.5Y5/3　黄褐色シルトまじり砂質土（極細～小礫含）
14　10YR4/3　にぶい黄褐色砂まじりシルト質土（Fe・Mn含）
15　2.5Y4/3　オリーブ褐色砂質土　造成土
16　2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土　（小礫含　Fe含　細～中砂主）
17　2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土　（小礫含　Fe含　16より粒径大きい　中～粗砂主）
18　2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土　（小礫含　Fe含　16より粒小さい　細～中砂主）

Ⅰ(N) 区　東壁



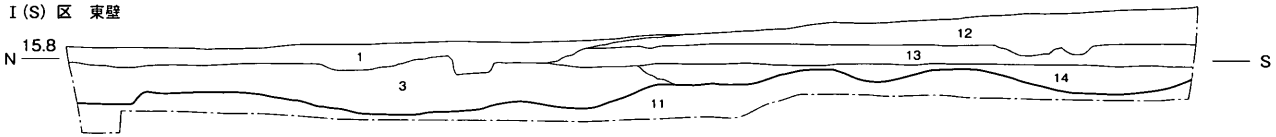
Ⅰ(S) 区　北壁

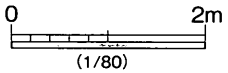


Ⅰ(S) 区　北壁・東壁

1　表土　2.5Y4/3オリーブ褐色小礫混じり細砂質土（樹根　瓦片含）
2　10YR4/3　にぶい黄褐色小礫混じり粗砂質土（樹根多含）　撹乱
3　2.5Y5/3　黄褐色小礫混じり粗砂質土（まれに1cm径の礫含　樹根含）
4　2層に径5cm程の黒褐色粘土のブロックが混入（2.5Y3/1）
5　3層と4層の漸移層
6　3層に類似（3層より小礫包含少ない）
7　2.5Y5/2　暗灰黄色小礫混じり細砂質土（上方で小礫多くリバースグレィディングあり　Fe含）
8　2.5Y5/2　暗灰黄色細砂（粗砂のラミナあり　淘汰される　Fe含）
9　2.5Y5/2　暗灰黄色シルト混じり細砂（淘汰される、Fe含）
10　2.5Y5/3　黄褐色砂質土（小礫わずか含　Fe多含　極細砂主）
11　10YR6/4　にぶい黄橙色砂　（5mm程の礫多含　細～粗砂　支持力なし）　地山
12　花崗土
13　10YR4/3　にぶい黄褐色小礫混じり砂質土（3cmほどの黒褐色粘土のブロック含）　造成土
14　2.5Y3/2　黒褐色小礫混じり砂質土（クロスナ状になる）

Ⅰ(S) 区　東壁





第9図　Ⅰ区　土層断面図

る地筆に相当する。昭和37年国土地理院撮影の空中写真には、比較的大きな木が茂っているのが観察されるが、調査で検出した樹根は、この木に該当すると思われる。この調査区付近から、明治10年の洪水の際に畳一畳程度の大石が露出し、その下から備前焼壺と土師皿5枚が発見されたと伝えられている（地元には異なる地点とする伝えもある）。備前焼壺は付近の寺（慈照寺）に保管されており、13世紀後半期のものと考えられている(注)。しかし、今回の調査ではこのことに関連する痕跡は見出せなかった。

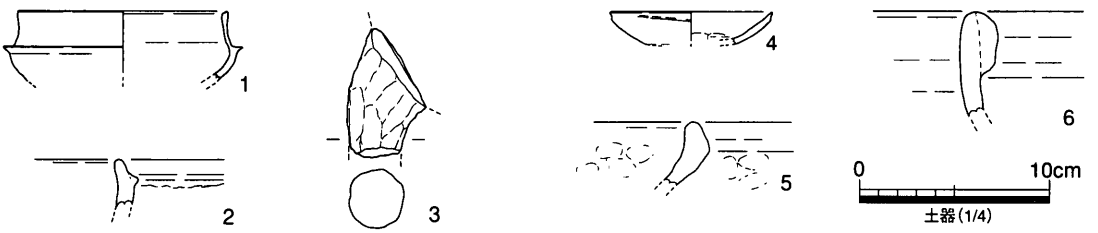
（注）「由良南原遺跡」『高松市内遺跡発掘調査概報　平成16年度国庫補助事業』高松市教育委員会　2005

2．出土遺物

1～3はⅠ（N）区、4～6はⅠ（S）区から出土したもので、いずれも砂層と水田耕土の間に堆積する包含層から出土した。包含層からは、このほかに布目瓦片・染付片等が出土しているが、いずれも細片である。

1は、須恵器杯身、たち上りの端面は内傾している。2～5は土師質土器で、2は形骸化した鍔を付す土釜口縁部の破片である。3は足釜、4は小皿、口縁部外面にヘラ状工具による沈線が認められる。5は口縁端部を上方に摘み出す鉢の口縁部である。6は備前焼甕の口縁部片である。口縁端部が丸く折り曲げられ、玉縁状を呈する特徴的な形である。

Ⅰ区では、包含層中に散在する状態で古墳時代後期から近世に至る時期幅のある遺物が混在して含まれている。



第10図　Ⅰ区　出土遺物実測図

第３節　Ⅱ区の調査

１．概要

約230㎡の調査区で、南北に２分割して調査を行った。北側のⅡ（N）区では遺構は検出できなかったが、南側（Ⅱ（S）区）では、溝状遺構２、土坑１を検出した。出土遺物は、土器細片で、28㌔入りコンテナ３箱分が出土している。

また、Ⅱ（N）区には、西壁際に四箇池用水路修築の掘り方と考えられる撹乱と、それを壊す土坑状の撹乱１、及び撹乱２があり、Ⅱ（S）区では長辺8.5、短辺2.9、深さ0.6ｍの不整形の撹乱３があった。いずれも現代のものである。

第12図は、Ⅱ（N）区北壁・東壁とⅡ（S）区の東壁・南壁の断面図である。本調査区では、Ⅰ区で見られた完新世段丘崖は見られず、遺構面と考えた砂層が調査区全面に拡がっている。Ⅱ（N）区東壁断面図に見られる水田耕土（５層）が途切れる８層付近が、かつての地筆境界であったようで、北壁は、Ⅱ（N）区全体の堆積状況を示すのではなく、境界以北の堆積状況を示している。このためⅡ（N）区に広く見られた包含層の堆積状況については、第13図の包含層断面に示した。

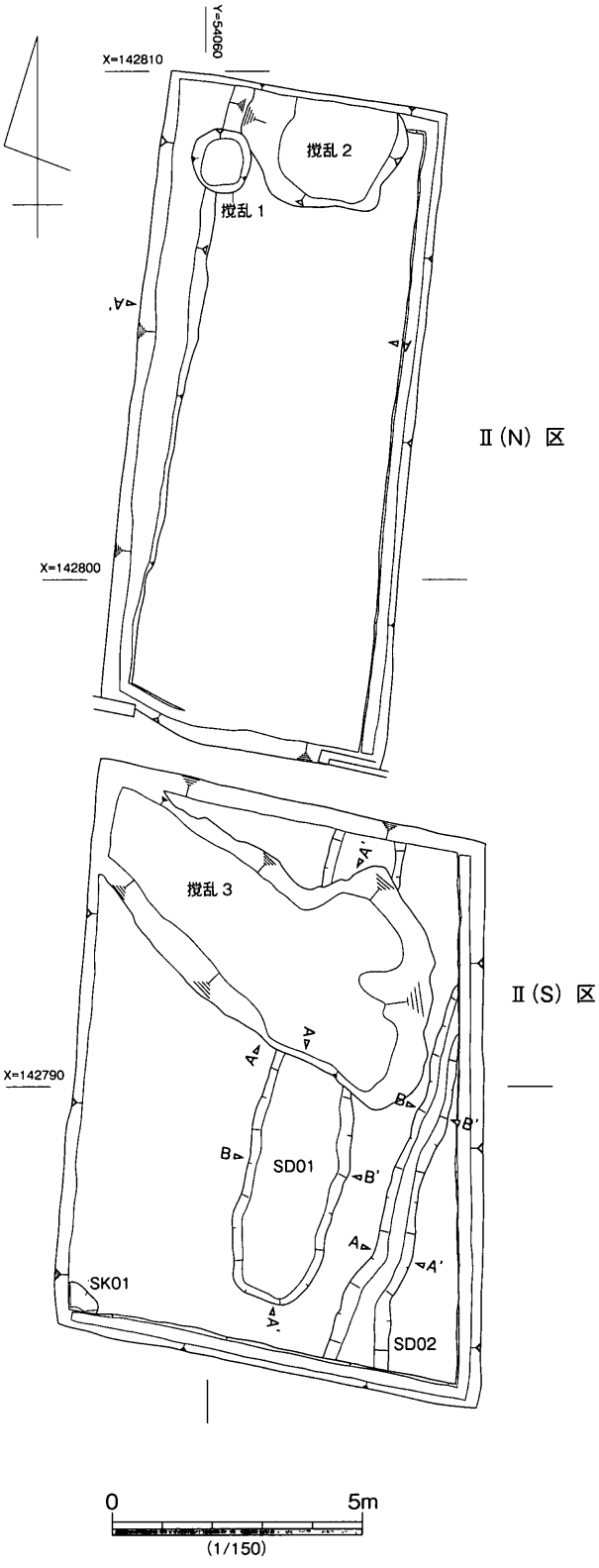
２．遺構・遺物

ＳＤ01

Ⅱ（S）区で検出した溝状遺構である。幅180cm、深さ13cmを測り、座標北より12.5度東に振った方向で直線に流れる。北側は調査区外に延びるが、南側は途切れている。出土遺物は僅少で、時期を特定できる遺物は見当たらないが、東にほぼ平行して流れるＳＤ02と埋土が類似していることから、中世後半のものと考えられる。

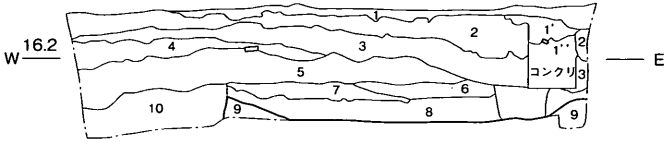
ＳＤ02

Ⅱ（S）区で検出した溝状遺構である。幅約60cm、深さ18cmを測り、座標北より17度東



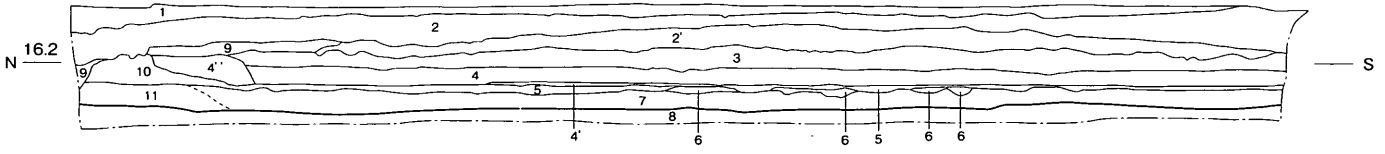
第11図　Ⅱ区　遺構配置図

Ⅱ(N) 区　北壁



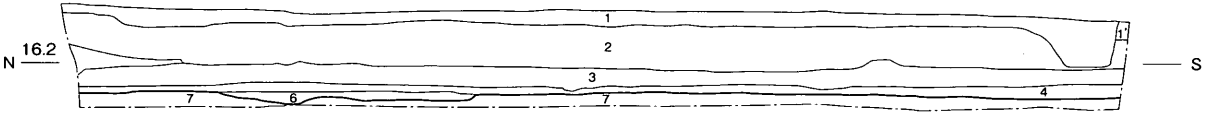
1　表土
2　花崗土
3　撹乱（2.5Y3/2 黒褐色粘質土　2.5Y4/2 暗灰黄色小礫混じり中砂質土　2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質土が未分解に混合　ビニール片含）　造成土
4　10Y R4/3　にぶい黄褐色礫混じりシルト質土（10cm 以下の礫まばら含　小礫多含）　造成土
5　2.5Y 4/3　オリーブ褐色小礫混じり細砂質土（小礫多含　6 層土の 2cm 程のブロックまばら含）　造成土
6　2.5Y 7/3　浅黄色シルト質土　（Fe 含　黒褐色粘質土のブロックわずか含）　造成土
7　撹乱　（2.5Y 7/3　浅黄色シルト質土　2.5Y2/1　黒色粘質土　2.5Y4/3 オリーブ褐色小礫まじり砂質土がブロック状に混合）　造成土
8　10Y R5/4　にぶい黄褐色砂　（粗砂～小礫　1cm ほどの浅黄色シルト粘土のブロックわずか含、淘汰わるい）　撹乱 2
9　10Y R4/6　褐色砂　（小礫含　細．中砂主　淘汰される）
10 2.5Y 4/3　オリーブ褐色小礫混じり極細砂質土（小礫多含　植物根含）
1'.1"撹乱

Ⅱ(N) 区　東壁

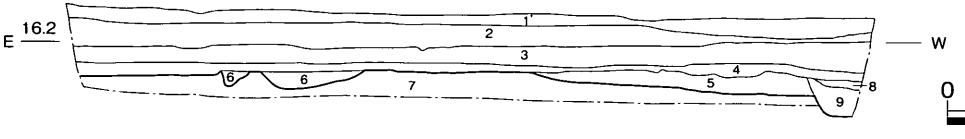


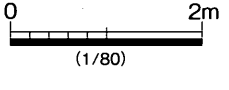
1　表土（2cm 以下の礫を含む花崗土）
2　花崗土
2'　花崗土
3　撹乱（2.5Y3/2 黒褐色粘質土　2.5Y4/2 暗灰黄色小礫混じり中砂質土　2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質土が未分解に混合　ビニール片含）
4　2.5Y4/1　黄灰色シルト質土（小礫わずか含　Fe 含）水田耕土
4'　2.5Y5/2　暗灰黄色シルト質土（小礫わずか含）水田耕土
4''　2.5Y4/1　黄灰色小礫混じりシルト質土
5　10YR5/2　灰黄褐色砂混じりシルト質土（上面に Fe・Mn 含　小礫から中砂混じる）
6　2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土（小礫 .Fe 含）
7　10RY5/3　にぶい黄褐色砂質土（上面に Fe・Mn 含　小礫含）
8　10YR5/4　にぶい黄褐色砂（1cm 以下の礫含　中．細砂主体　淘汰よい）
9　撹乱　（花崗土と 4 層の未分解土）
10 2.5Y4/1　黄灰色小礫混じりシルト質土（小礫多含）
11 10YR4/3　にぶい黄褐色小礫混じり細砂質土（小礫多含　上面に Fe・Mn 含）（7 層が漸移）

Ⅱ(S) 区　東壁



Ⅱ(S) 区　南壁

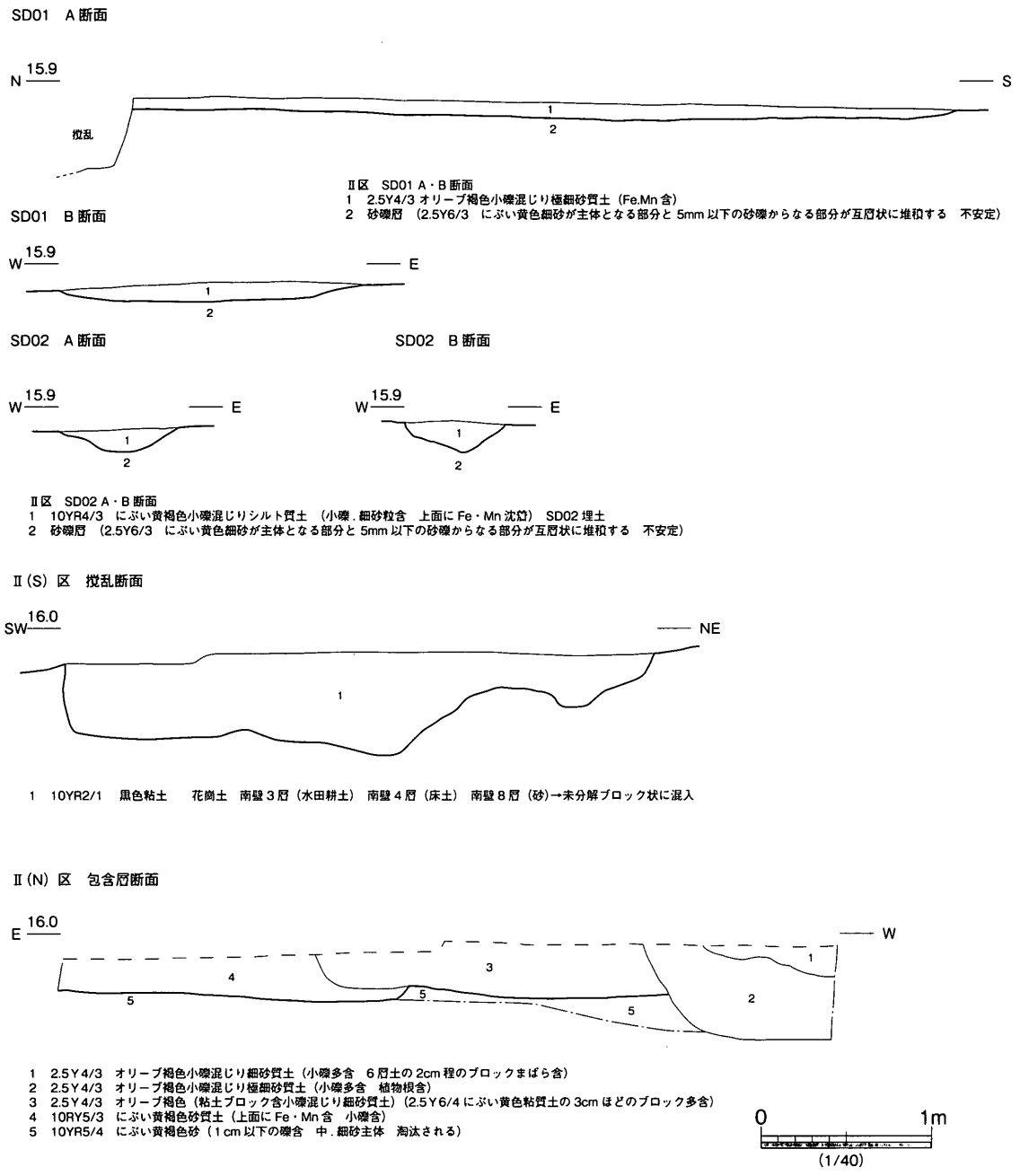




Ⅱ(S) 区　東壁・南壁

1　造成土（アパート造成の際の砕石　花崗土よりなる）
1'　2.5Y5/3　黄褐色極細砂質土（植物根含）　表土
2　花崗土
3　2.5Y5/2 暗灰黄色小礫混じりシルト質土　　水田耕作土
4　2.5Y6/2　灰黄色小礫混じり極細砂質土（Fe 含）　床土
5　2.5Y4/4　オリーブ褐色小礫混じり細砂質土（上面に Fe・Mn 沈殿）　包含層
6　10YR4/3　にぶい黄褐色小礫まじりシルト質土　（小礫．細砂粒含　上面に Fe・Mn 沈殿）　SD02 埋土
7　砂礫層　（2.5Y6/3　にぶい黄色細砂が主体となる部分と 5mm 以下の砂礫からなる部分が互層状に堆積する　不安定）
8　2.5Y7/3　浅黄色砂礫（小礫　粗砂卓越）　SK01 埋土
9　10YR4/3　にぶい黄褐色小礫混じりシルト質土　　SK01 埋土

第 12 図　Ⅱ区　土層断面図

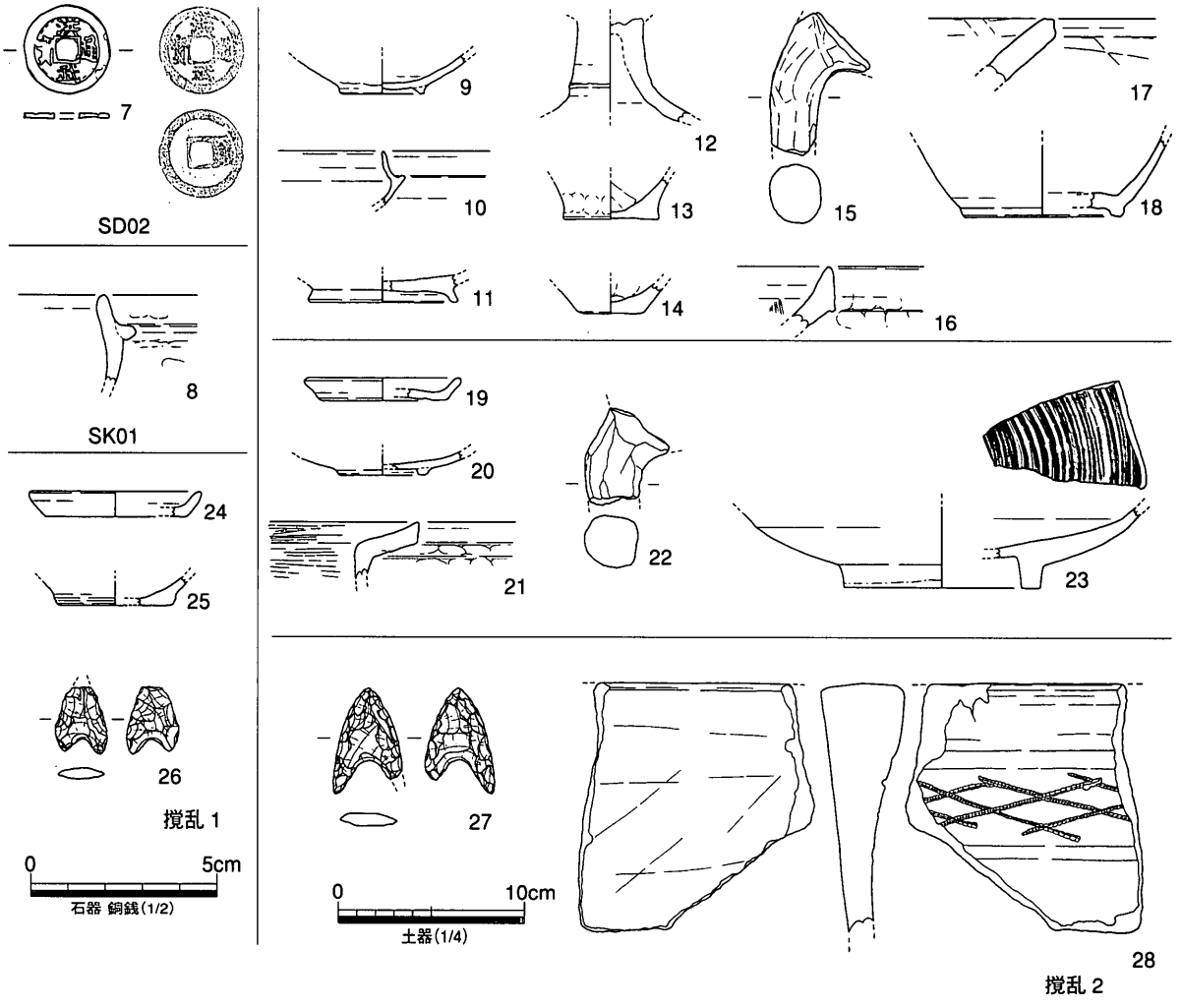


第13図 Ⅱ区 遺構等断面図

に振った方向で直線に流れる。出土遺物は僅少であるが、埋土中から、背面の方孔の右側に「五（もしくは三）銭」と刻まれた明銭「洪武通宝」が出土している。「洪武通宝」は 1368 年初鋳であることが知られており、出土遺物の全般的な様相から判断して、ＳＤ 02 は中世後半期のものと考えられる。

ＳＫ 01

Ⅱ（S）区の西南隅で検出した土坑である。径 60cm 以上、深さ 40cm を測る。第 14 図８は、ＳＫ 01 出土の土師質土器足釜の口縁部片であるが、この他は摩滅した土器細片が出土したのみで、時期を特定することは難しい。後述するⅡ（N）区で検出した包含層と類似する層の上面から掘り込まれていることから、近世もしくは近世よりも新しい遺構と考えられる。



第 14 図　Ⅱ区　出土遺物実測図

包含層出土の遺物

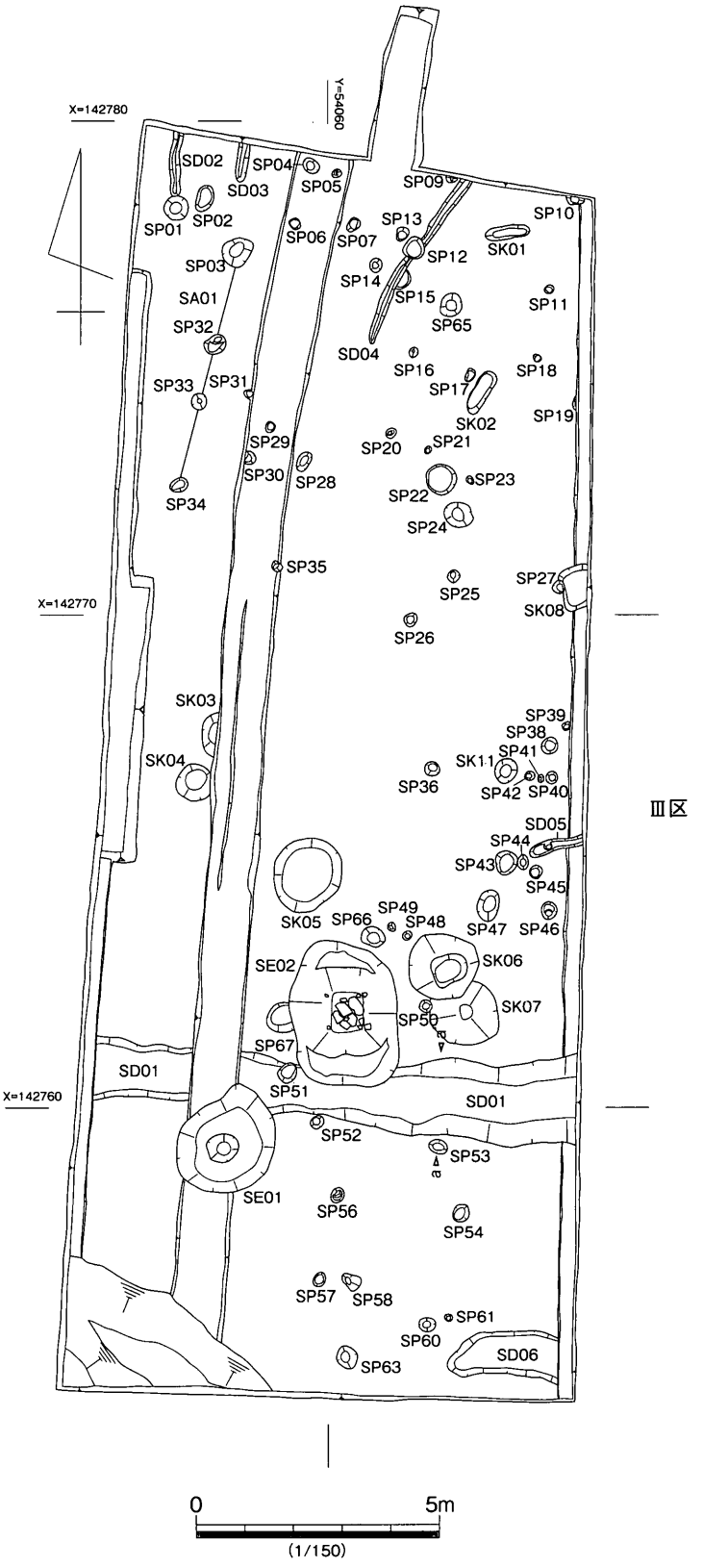
Ⅱ（N）区では、第 13 図の断面図に示すように、二層に細分される厚さ約 30cm の包含層が堆積していた。第 14 図 9 ～ 18 は断面図の 4 層、19 ～ 23 は 3 層から出土した遺物実測図である。いずれも細片である。9 は土師質に焼成された椀の底部である。摩滅しているが、内外面に幅約 4 mm のヘラミガキが認められる。10 は、たち上り端面を丸く収めた須恵器杯身の口縁部、11 は須恵器の供膳具の底部である。12 は高杯の脚部で、軸から脚への屈曲部のやや上位に一条の突帯を付している。13、14 は、弥生土器の壺か甕の底部、15 は土師質土器土釜の脚部、16 は備前焼すり鉢の口縁部、17 は土師質土器甕の口縁部と思われる。18 は須恵器壺の底部片である。

3 層から出土した 19 は土師質土器小皿、20 は瓦器椀の底部、21 は土師質土器土鍋の口縁部、22 は土師質土器足釜の脚部、23 は陶器鉢の底部である。

24 ～ 28 は、撹乱 1 及び 2 から出土した遺物である。24 は土師質土器小皿、25 は土師質土器杯の底部、28 は土師質の井側の破片である。

以上のように 3 層、4 層ともに時期幅のある遺物の細片が含まれている。このほか図化しなかった遺物の中には、染付の破片も含まれており、近世以降に形成された包含層であることがわかる。

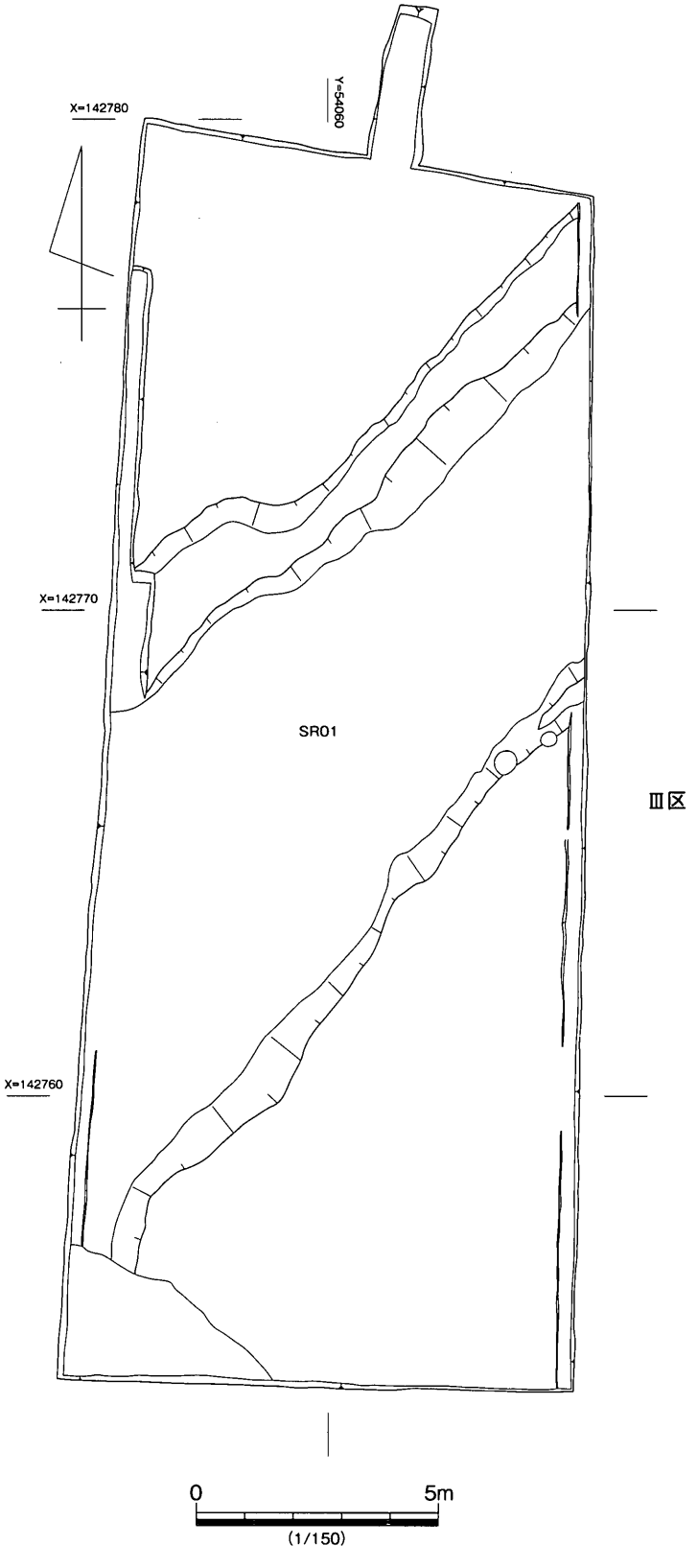
第４節　Ⅲ区の調査



第15図　Ⅲ区　遺構配置図（上層）

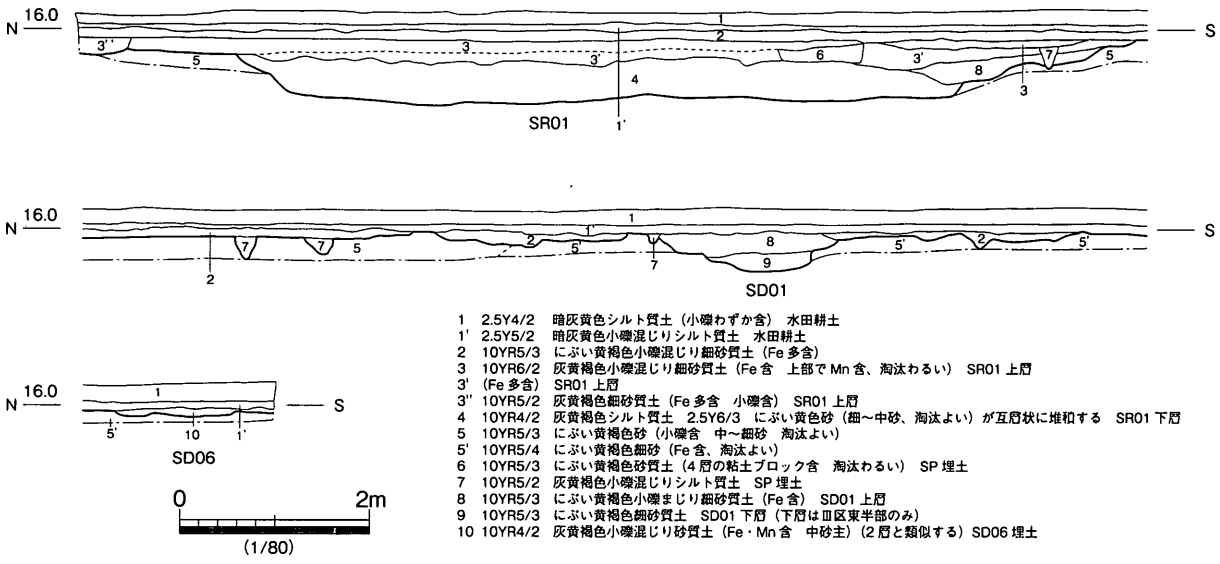
1．概要

約340㎡の調査区である。調査区の中で、もっとも良好に遺構が検出された調査区で、柵列跡１・柱穴跡約60・土坑10・井戸跡２・自然河川跡１等を検出した。遺物は、28㍑入りコンテナ６箱分（ＳＥ



第16図　Ⅲ区　遺構配置図（下層）

Ⅲ区　東壁土層断面



第 17 図　Ⅲ区　土層断面図

02 井戸部材を含まない）が出土している。7 世紀代の流路跡と考えられるＳＲ 01 の埋没後に、中世の遺構が広がっているため、ＳＲ 01 を下層遺構、それ以外を上層遺構と呼称する。

第 17 図は、Ⅲ区の調査区東壁の土層断面である。本章第 1 節で述べたように、遺構面は中砂から細砂を主体とする淘汰の良い砂層である。この砂層が東西方向にも南北方向にも、ほぼ水平に堆積している。

２．遺構・遺物

柵列跡・柱穴跡

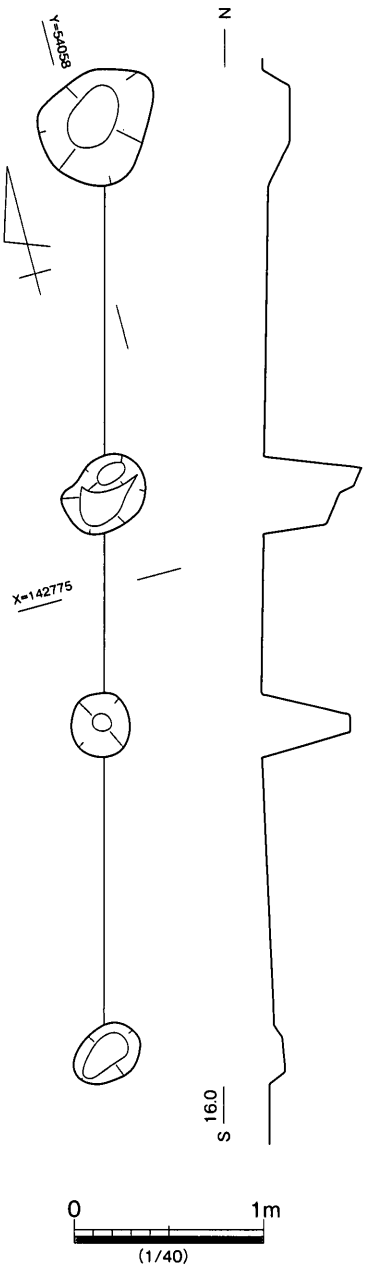
Ⅲ区から約 60 の柱穴跡を検出した。水田耕土が混じる新しい時代のもの（ＳＰ 20、22、24）以外は、３種の埋土に分類されるが、巨視的には同一の埋土と考えられる。半分の柱穴跡から遺物が出土したが、いずれも細片で時期を限定することができない。完形の瓦器椀を出土したＳＫ 11 と埋土が共通することや出土遺物の全般的な様相、Ⅲ区のその他の遺構の年代からみて、これらの柱穴跡は 12 世紀から 13 世紀前半期のものであると考えられる。なお、ＳＡ 01 以外は建物を構成するような柱穴配置は認められない。

ＳＡ 01

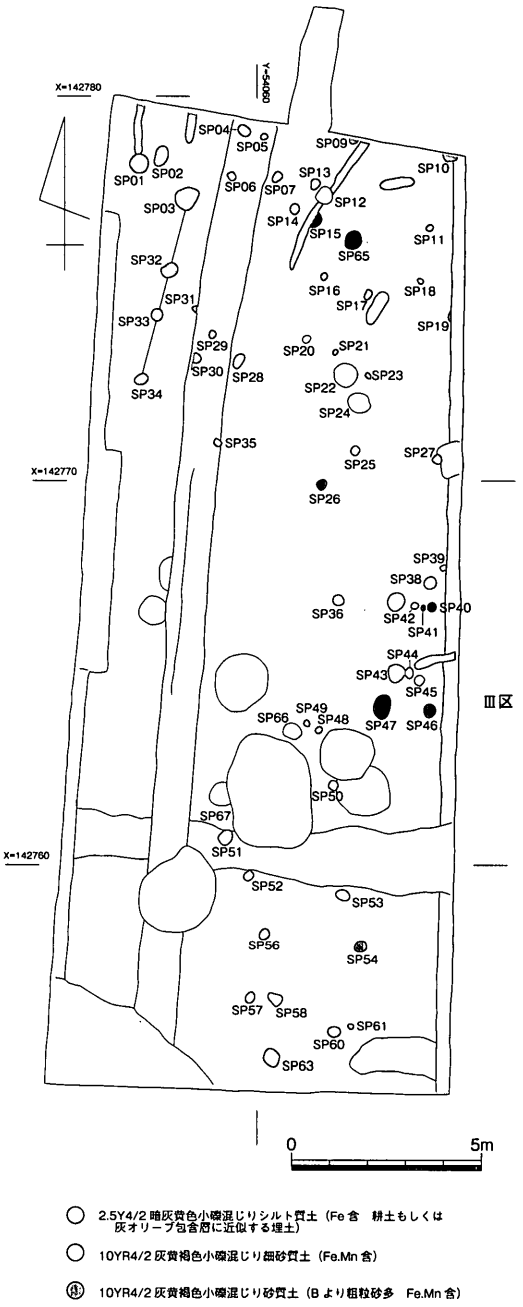
調査区西北で検出した 4 穴からなる柵列跡である。座標北より 14 度東に振った方向である。ＳＡ 01 を構成するピットのひとつであるＳＰ 33 から、土師質土器椀と考えられる細片（35）が出土した他、ＳＰ 32 から瓦器椀の口縁の破片が出土している。

ＳＰ出土の遺物

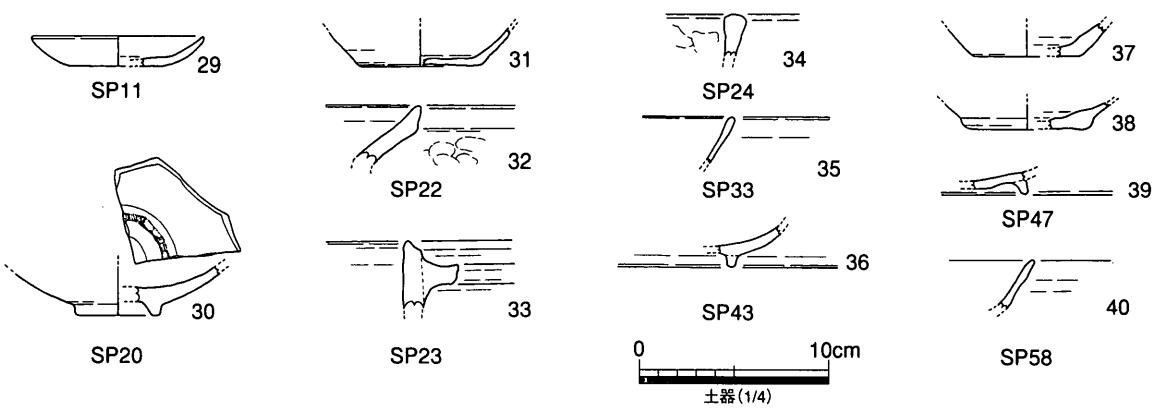
第 19 図は、柱穴跡から出土した遺物の実測図である。29 はＳＰ 11 出土の土師質土器小皿の小片、30 はＳＰ 20 出土の肥前磁器皿である。見込み部を蛇の目釉剥ぎし、砂が付着している。また、高台畳付にも砂が付着している。31、32 はＳＰ 22 出土のもので、31 は土師質土器杯の底部片、32 は土師質土器土鍋の口縁部片、33 はＳＰ 23 出土の土師質土器土釜の口縁部である。34 はＳＰ 24 出土の土師質



第18図　Ⅲ区　SA01 平・断面図



第20図　Ⅲ区　SP 埋土



第19図　Ⅲ区　SP 出土遺物実測図

土器甕もしくは鉢の口縁、33はＳＰ33出土の土師質土器杯か椀、36はＳＰ43出土の内面黒色の黒色土器椀の底部である。37～39はＳＰ47から出土したもので、37、38は土師質土器杯、39は内面黒色の黒色土器椀である。40は、土師質土器杯である。

水田耕土が混じるＳＰ20を別とすると、柱穴跡出土遺物は概ね12世紀代から13世紀前半期に収まるものと思われる。なお、黒色土器は著しく摩滅しており、混入の可能性がある。

土坑

ＳＫ01

調査区北で検出した長軸91cm、短軸27cm、深さ21cmの隅丸長方形の土坑である。時期不明の少量の土器細片が出土している。なお、大きさや形状から見て、ＳＫ01は、不整形な柱穴跡とすべきかも知れないと考えている。

ＳＫ02

調査区北で検出した長軸94cm、短軸32cm、深さ19cmの隅丸長方形の土坑である。図化しなかったが須恵器杯の底部片の他、時期不明の少量の土器細片が出土している。ＳＫ02も、ＳＫ01と同じく不整形な柱穴跡とすべきかも知れないと考えている。

ＳＫ03

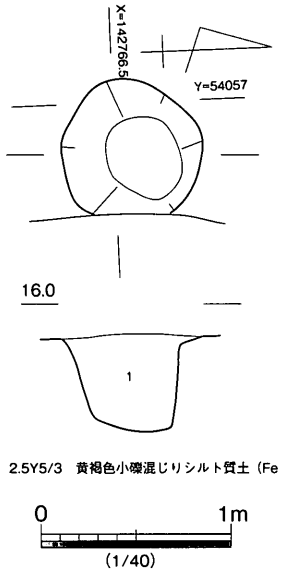
試掘トレンチによって東半分が壊されているが、径92cm以上、深さ29cm以上の土坑である。暗灰黄色（2.5Y5/2）小礫混じり砂質土で埋まる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ04

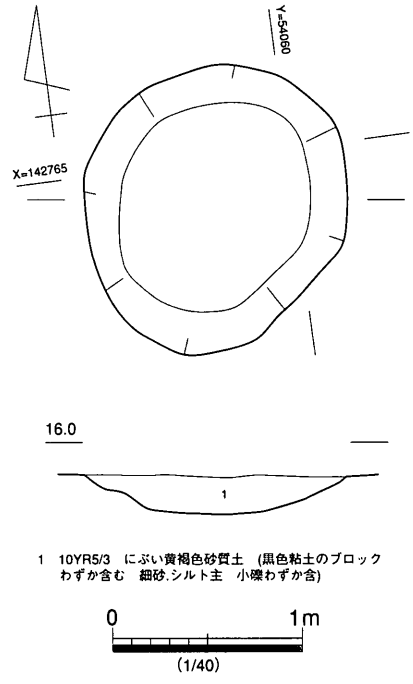
調査区中央の西よりで検出した直径75cm、深さ50cmの土坑である。未図化であるが、青磁小片、底部ヘラ切りの土師質土器杯、土師質土器椀の底部等が出土している。

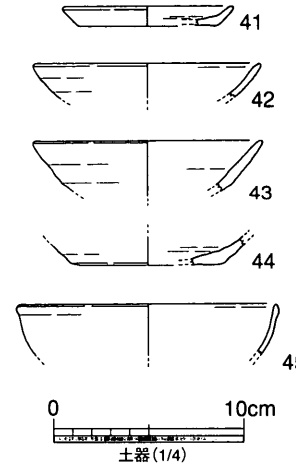
ＳＫ05

調査区中央で検出した径150cm、深さ20cmの不整円形の土坑である。第22図41～44は土師質土器小皿・杯、45は玉縁状の口縁をもつ白磁である。いずれも細片である。



第21図　SK04平・断面図





第22図　SK05平・断面図，出土遺物実測図

ＳＫ06

調査区西南で検出した土坑である。ＳＫ07を切っている。長径150cm、深さ55cmの規模で、断面形は緩やかな斜面が屈曲して垂直に近い掘り込みをもつ。第23図46～52は、ＳＫ06出土の遺物実測図である。46は土師質土器杯である。口径13.4cmで厚手のつくりである。47は土師質土器椀か杯の口縁部、48は輪高台の付く土師器杯の底部、49は内面黒色の黒色土器椀、50は瓦器椀、51は須恵器(瓦質焼成)椀、52は須恵器壺の底部である。大きく外側に開く口頸部をもつ長胴のものと考えられる。このほか図化しなかったが、平瓦の小片等が出土している。

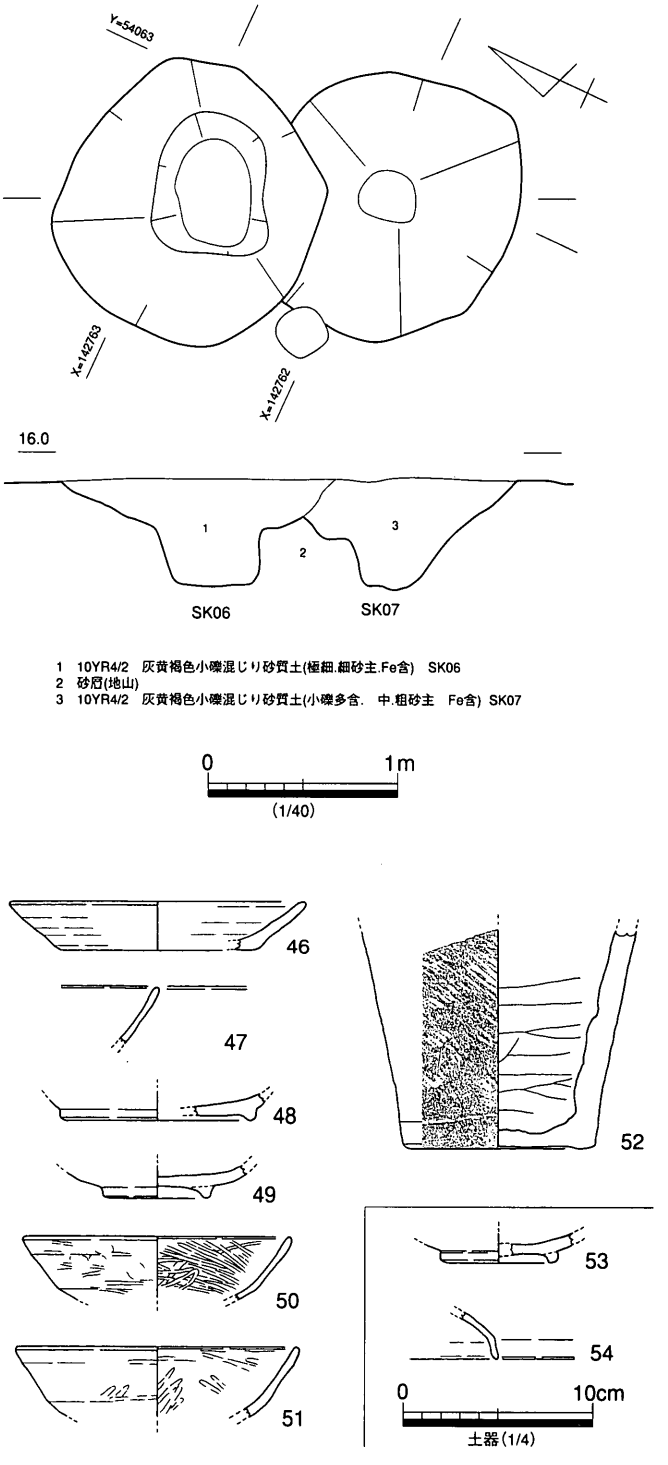
ＳＫ06は、8世紀代と思われる土師器杯（48）から中世にかけての時期幅のある遺物が出土しているが、いずれも細片である。切り合い関係のあるＳＫ07から土師質土器椀の底部が出土していること等から、ＳＫ06は中世の遺構であることがわかる。

ＳＫ07

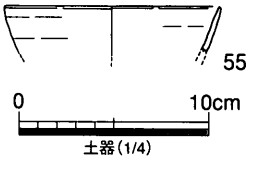
ＳＫ06に切られる長径140cm、深さ57cmの規模の土坑である。ＳＫ06と規模が類似する。53の土師質土器椀の底部、54の須恵器杯蓋（身の可能性もある）の他、時期を特定できない細片が出土している。中世の遺構である。

ＳＫ08

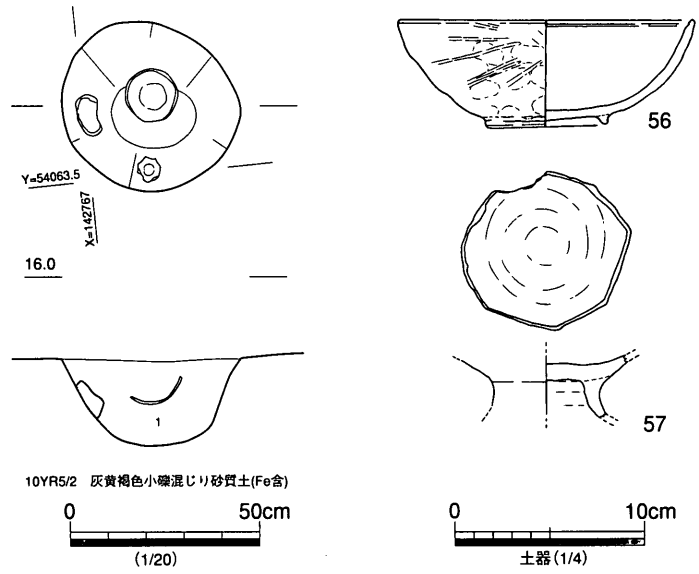
調査区の東壁際で検出したものである。大半が調査区外になるため、形態・規模は不明である。第24図55は、須恵器の供膳具の口縁部片である。ＳＫ08からは、この他に土師質土器の杯か小皿の小片も出土している。



第23図　SK06・07平・断面図，出土遺物実測図



第24図　SK08出土遺物実測図



第25図　SK11 平・断面図，出土遺物実測図

ＳＫ11

調査区中央の東寄りで検出した径45cm、深さ22cmの土坑である。埋土中より完形の瓦器椀と高い高台をもつ土師質土器杯が出土している。瓦器は、口縁部内面の端部付近に一条の沈線が巡っていること等から楠葉型であることがわかる。内外面ともに摩滅しており、細部の調整は不明であるが、橋本久和編年のⅡ期のものと考えられる。57の高い高台の付く土師質土器杯は、口縁部と高台裾が打ち欠かれている。口縁部は八角形状となっており、意図的に打ち欠いた可能性がある。

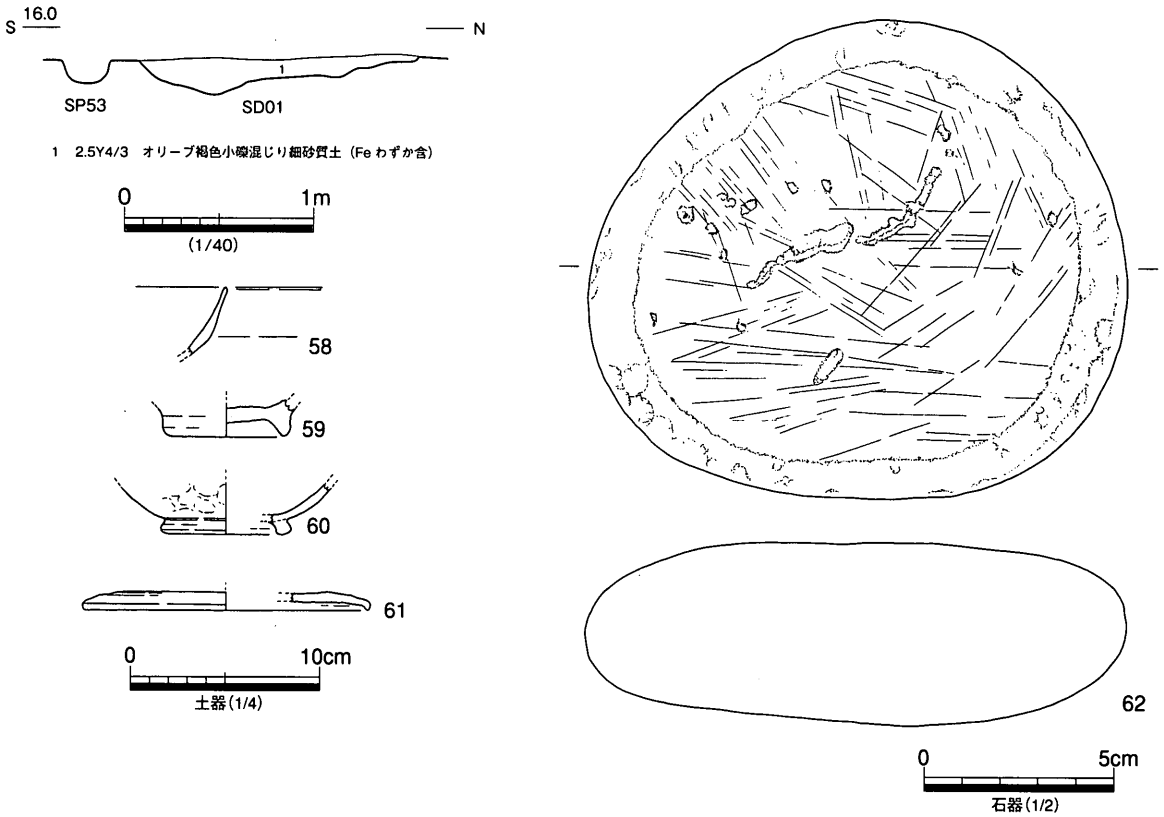
ＳＫ01～08及びＳＫ11の年代については、ＳＫ11の完形の瓦器椀から12世紀代の年代観が得られるものの、ＳＫ01～08は、年代幅のある遺物細片が出土しており、年代の特定は難しい。しかし、その中に含まれる最も新しい遺物の年代観や、前述の柵列跡や柱穴跡の年代観から、12世紀代から13世紀前半に収まるものと考えられる。

溝状遺構

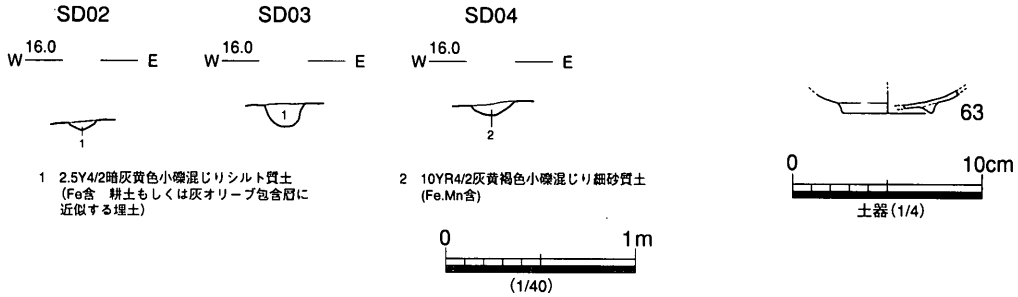
ＳＤ01

調査区の南半部を東西に流れる溝状遺構である。幅150cm、深さ18cmを測り、断面形はやや不整形の浅い皿状を呈する。ＳＥ01、ＳＥ02に切られている。ほぼ直線の流路をもち、方向は座標北より81°程西に振っている。これは周辺の条里型地割の方向と概ね合致するものであるが、推定される坪界線より20ｍ程南に位置している。

第26図58～61はＳＤ01出土の遺物実測図である。58は土師質土器の杯の小片である。59は土師質土器の高台部の破片であるが、胎土は中礫及び粗砂粒を多量に含むもので、椀とするには異質な印象を受ける。60は内面黒色の黒色土器椀の底部、61は須恵器蓋の口縁部の破片である。62は砂岩円礫で片方の平坦部が使用によりわずかに窪んでいる。表面には線状の擦痕が多数認められる。ＳＤ01は、ＳＥ01や02より古いことは疑いないが、図化不能のその他の出土遺物には、中世の土師質土器杯の破片が含まれており、中世のものと考えられる。61（60を含む可能性がある）は混入と考えられる。



第 26 図　SD01 断面図，出土遺物実測図



第 27 図　SD02 ～ 04 断面図，出土遺物実測図

ＳＤ 02 ～ 04

調査区の北部で検出した南北方向の小溝である。いずれも幅 20cm、深さ 10cm 程の規模で、断面形はＵ字状を呈する。柱穴跡と切り合い関係をもつものがあるが、巨視的には柱穴跡と近い時期の遺構と考えられる。ＳＤ 04 から瓦器椀の底部が出土した他は、遺物は出土しなかった。

ＳＤ 05

調査区中央の東壁際で検出した小溝である。東側は調査区外に延びる。幅 24cm、深さ 14cm 程の規模である。時期不明の遺物細片２点が出土したのみである。

ＳＤ 06

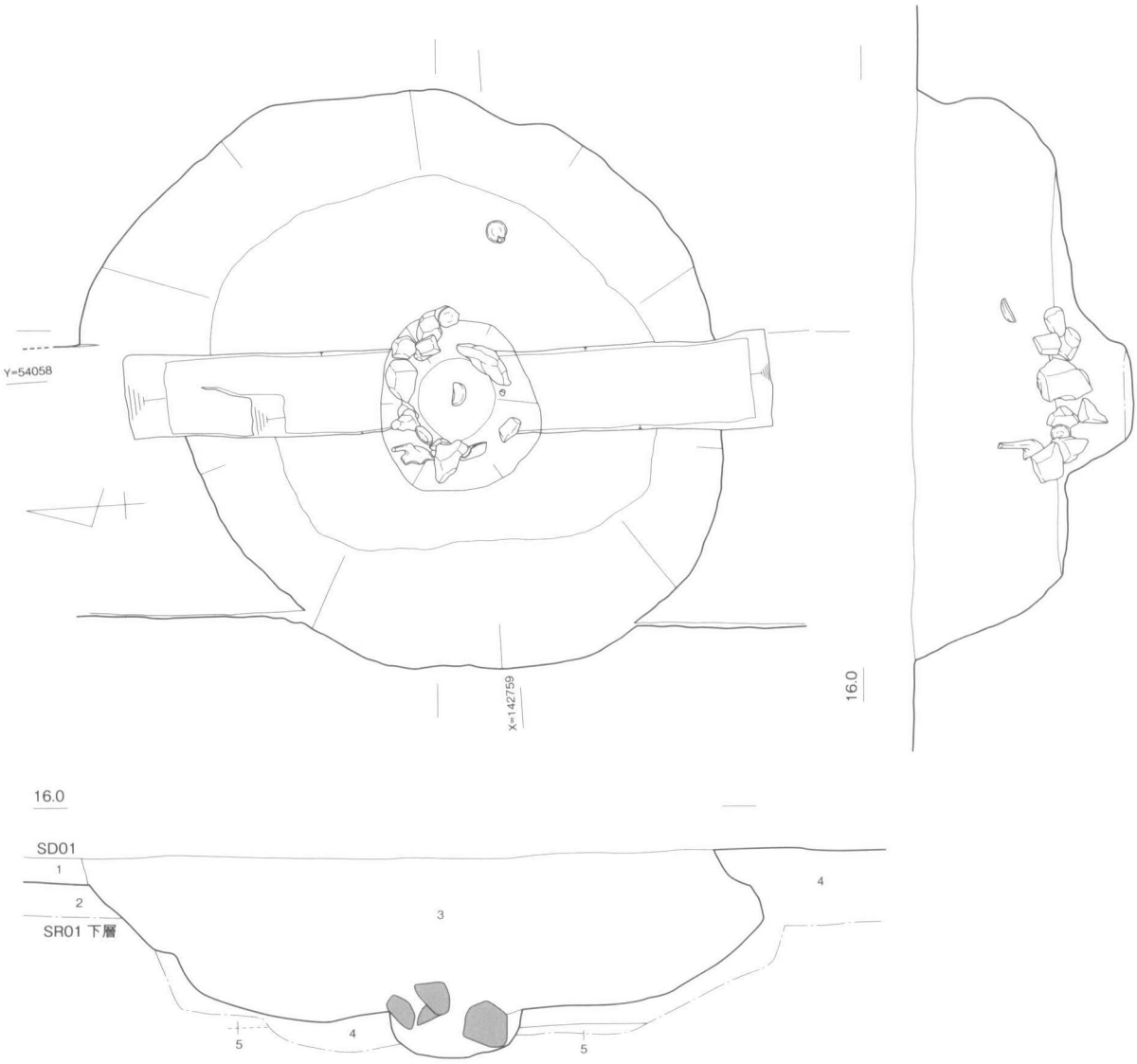
調査区南端の東壁際で検出したもので、幅 86cm、深さ 5cm を測る。断面形は極めて浅い皿状を呈し、溝とするよりも包含層の凹地とすべきかも知れないと考えている。時期不明の細片が出土したのみである。

井戸跡

ＳＥ01

調査区南部で検出した水溜め状の遺構である。ほぼ中央を試掘トレンチが通ったため、断面図はトレンチ東壁で作成し、東西方向に見通しの断面図を作成した。平面形は円形で直径２ｍ、断面形はＵ字状を呈し、深さ55cmの規模である。中央部に径55cm、深さ15cmの規模で周囲に石を並べた落ち込みがある。埋土は、この落ち込みも含めて一層である。

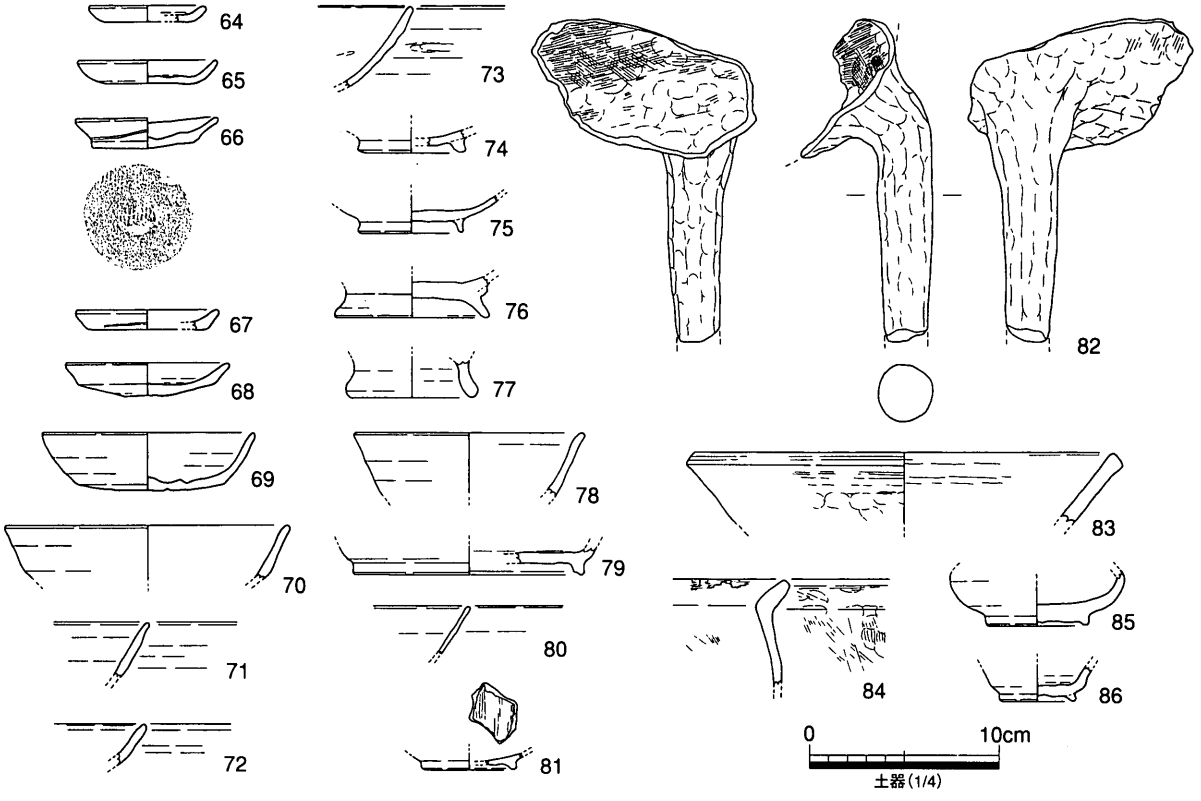
調査時には、径２ｍの掘り方の石組みの井戸跡の最下端が遺存する遺構と考えたが、石を数段積み上げたとするには据え方が脆弱で、当初から径55cmの落ち込み部の側壁に沿って、石を並べた構造物と



1　2.5Y4/3　オリーブ褐色小礫混じり細砂質土（Feわずか含）　SD01埋土
2　10YR6/3　にぶい黄橙色小礫混じり砂（10YR4/2灰黄褐色粘質土のブロック（10cm内外）多く含）　SR01下層
3　10RY4/3　にぶい黄橙色小礫混じりシルト質土（細～粗砂粒多含　Fe含）
4　10YR5/6　黄褐色砂（小礫～細砂　互層状に堆積する　級化層理あり、淘汰よい）
5　10RY3/2　黒褐色粘質土　（Fe多含）

0　1m
（1/25）

第28図　SE01平・断面図



第29図　SE01 出土遺物実測図

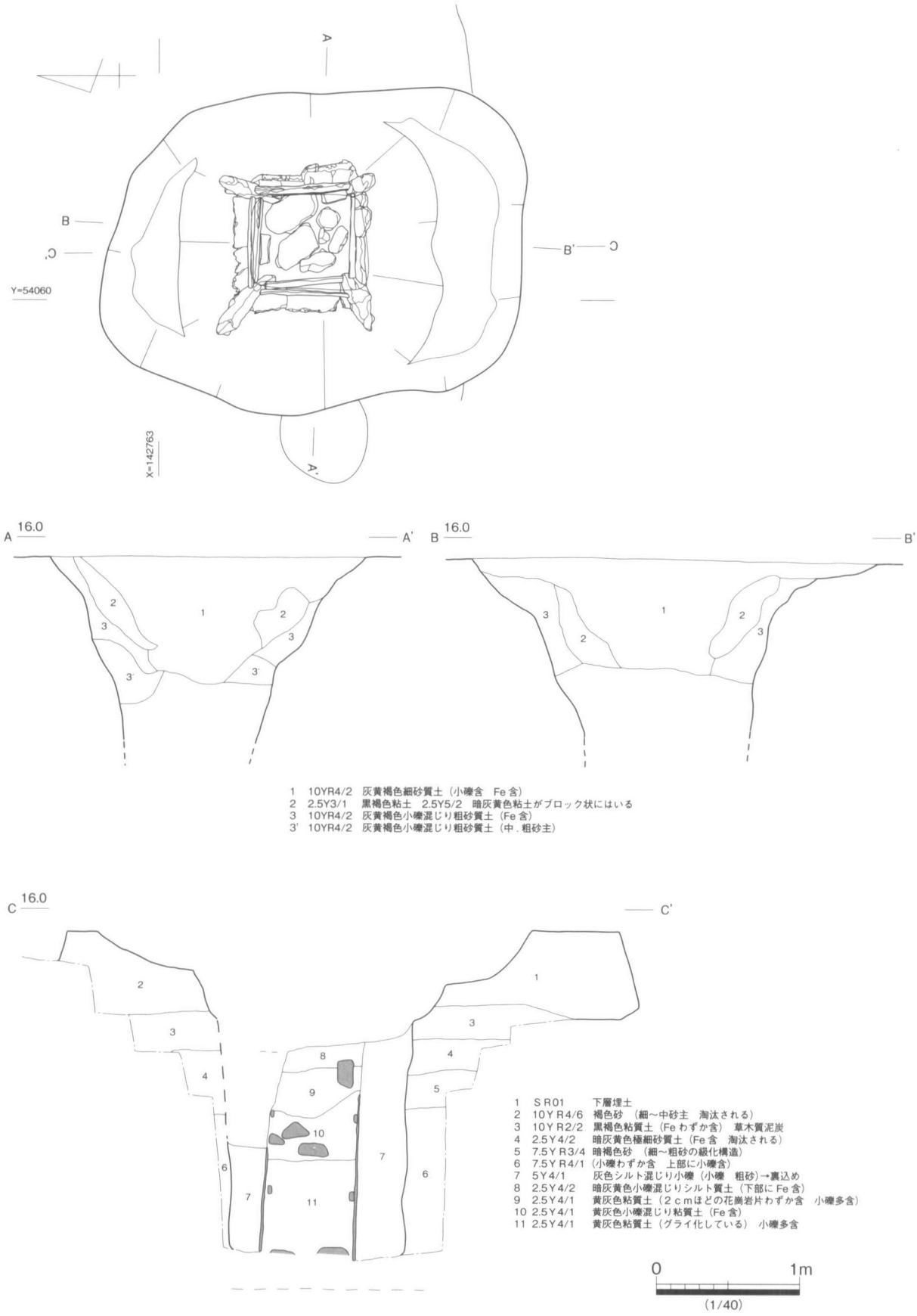
考えられる。石材は人頭大から犬頭大の大きさで、一部２段に積まれ、花崗岩を主に、砂岩、頁岩が使われていた。これらの中には、被熱によって赤変している石材もあった。内部の落ち込みに水を溜めた水溜めの遺構と考えられるが、その場合、どのようにして出入りしていたのか疑問が残る他、類例に乏しく、裏付けを欠く。

石材の周囲を中心に、完形もしくは完形に近い土師質土器小皿、杯が出土しており、石材の裏込めや埋土中からも完形の小皿が出土している。第29図はＳＥ01出土の遺物実測図である。64～68は土師質土器小皿、69～72は土師質土器杯、73は須恵器（瓦質焼成）椀、74～76は土師質土器椀で、75は高台の形態や色調から吉備系土師質土器椀と考えられる。77はやや高い高台部の破片であるが、器種はわからない。78は須恵器の杯の口縁部である。79は須恵器の皿の底部で、混入品と考えられる。80、81は瓦器椀、82は土師質土器土釜の脚部片、83は瓦質土器鉢、84は土師質土器甕の口縁部片である。85は削り出し高台の須恵質の土器で、大きく屈曲する体部の折り曲げ方が直線状である。破片のため断定しかねるが耳皿と考えられる。86は瓦質土器小壺の底部である。

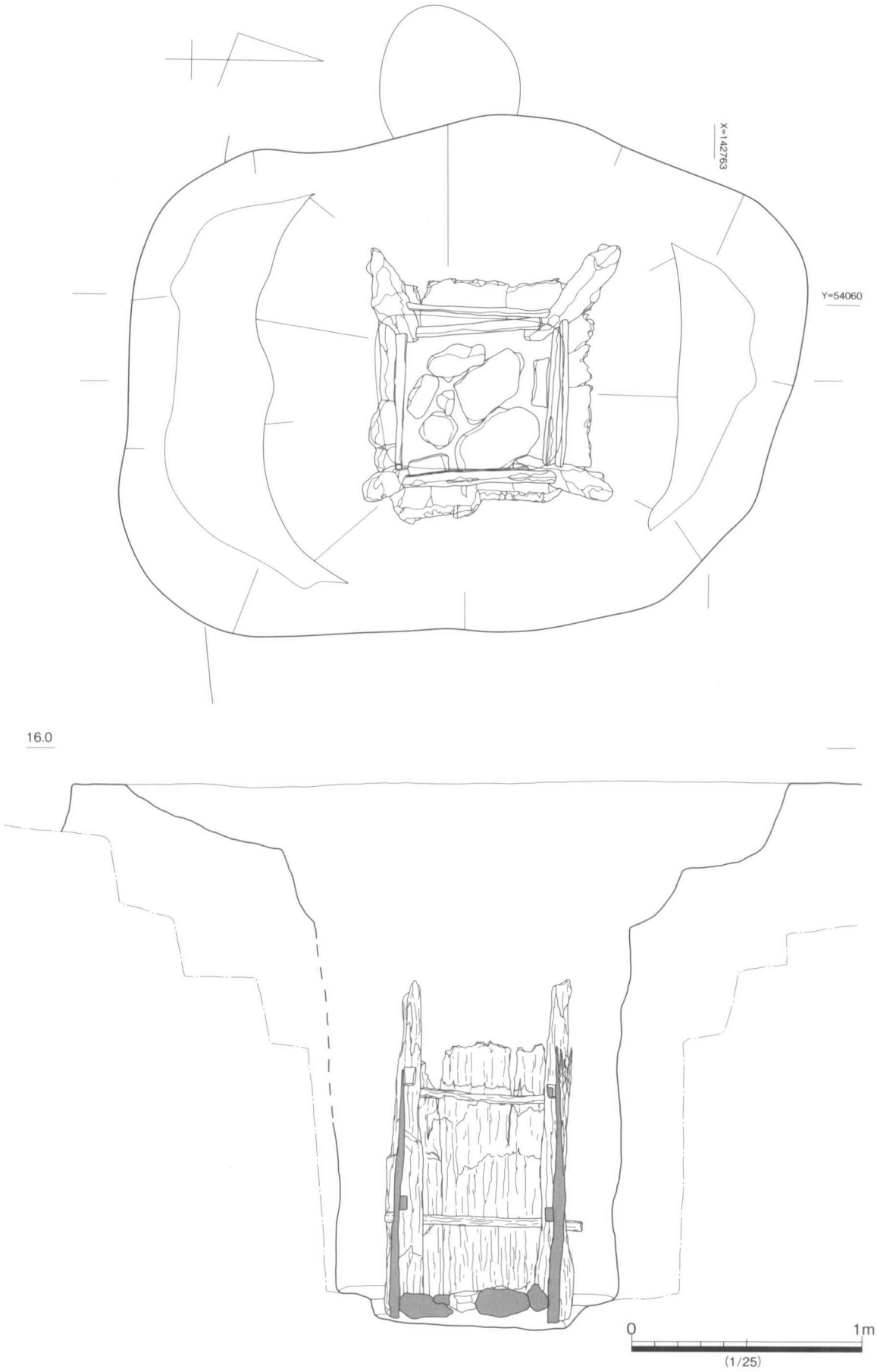
ＳＥ01は、出土遺物から13世紀前半期頃のものと考えられる。

ＳＥ02

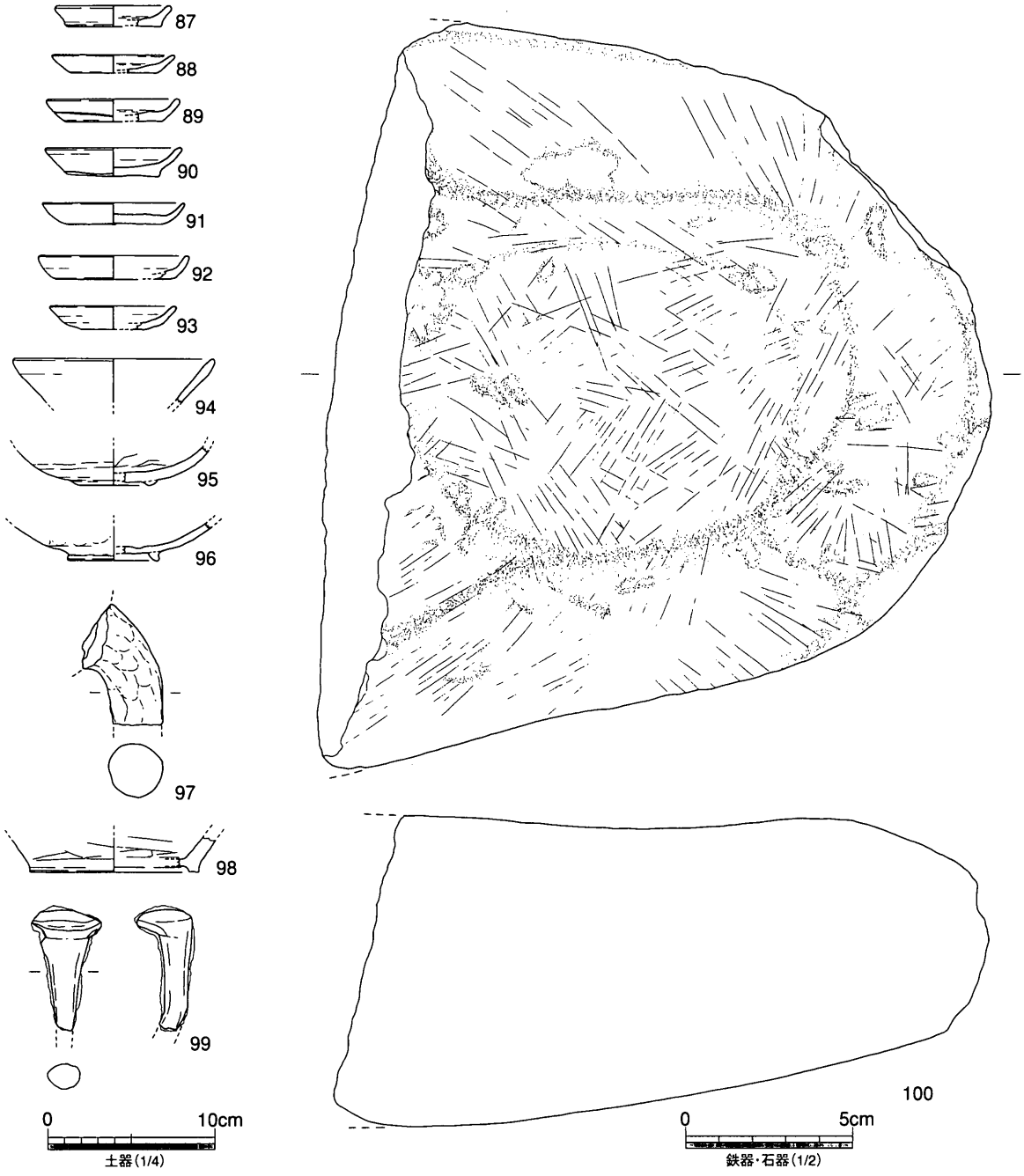
調査区中央やや南で検出した木組みの井戸跡である。南北約2.9ｍ、東西約2.2ｍのやや不整形な隅丸方形の平面形で、深さ2.25ｍ、掘り方の断面は緩やかに下った後、垂直に掘り込まれている。当初、掘り込みの平面形に合せて、十字方向に土層観察用の畦を残して掘削したが、1.2ｍ程下で木組みを確認したため、木組みの方向に合わせて畦を設定し直した。しかし、掘り方裏込めが狭いために、掘り進めることが困難となり、また、壁面崩落の危険を防止するために、東側を大きく掘り広げて調査を行った。第30図の断面図の上段は、木組みを確認するまでの断面図、下段は畦の設定を変更して作成した



第30図 SE02平・断面図



第 31 図　SE02 平・断面見通図

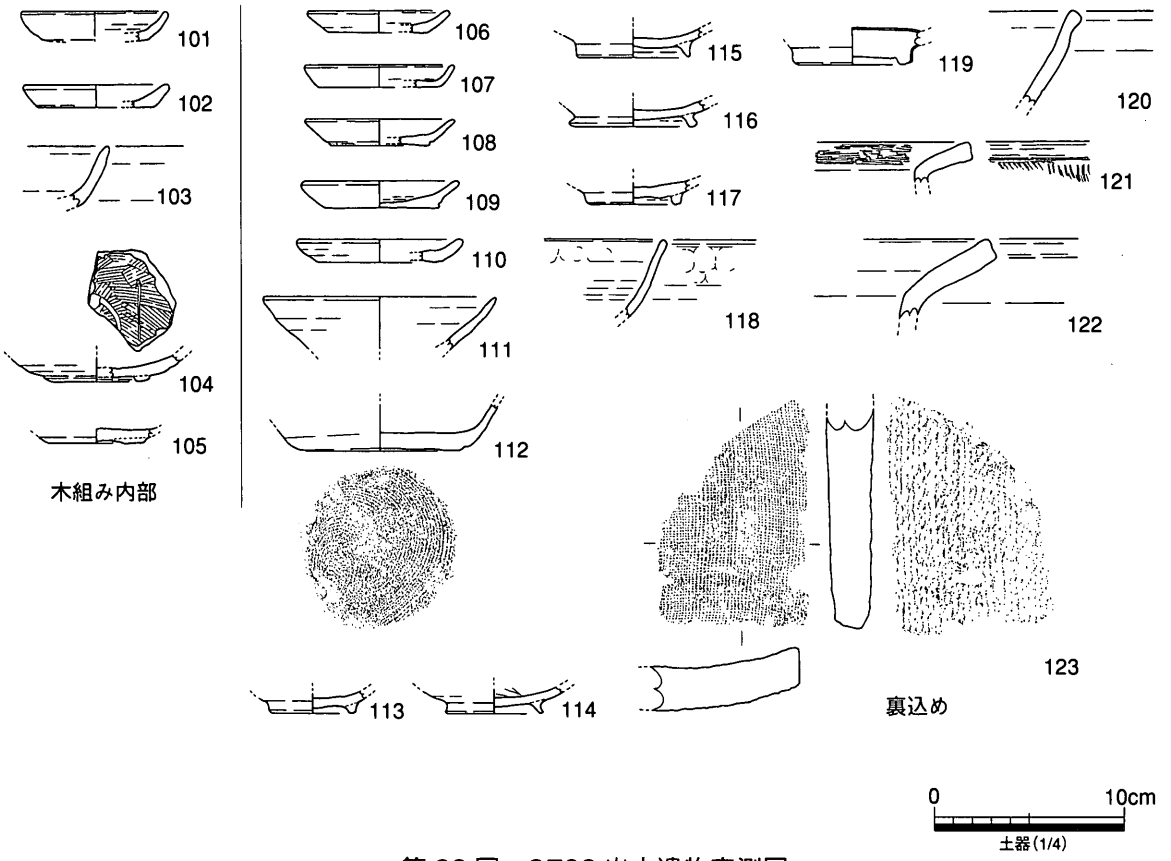


第 32 図　SE02 出土遺物実測図

断面図である。

木組み確認以前の断面図の２層は、黒褐色と暗灰黄色の粘土であるが、斜面に貼り付くように一周している。この下部が井戸跡の支柱に繋っていくことから、１層が井戸の埋土、２，３層が井戸掘り方の裏込めである可能性が高い。第 32 図は、この段階までの出土遺物であるが、87、89、92、93、97、98 が１層出土のもの、96 が３層出土のものである以外は、出土層位が明確でない。87 ～ 93 は、土師質土器小皿、90 以外は細片である。94 は土師質土器杯、95 は土師質土器椀、96 は瓦質土器椀、98 は須恵器壺の底部である。99 は釘と思われる鉄製品、100 は砂岩を利用した凹石である。

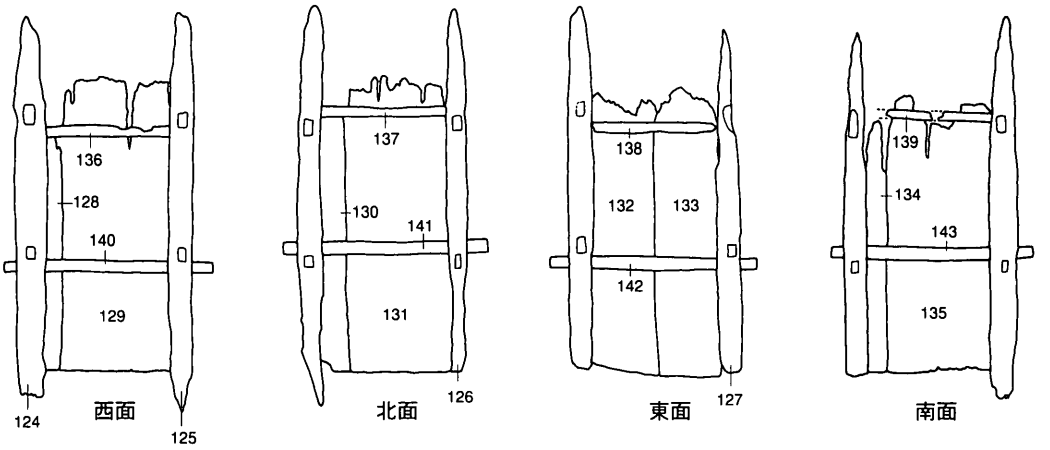
井戸跡の木組みは、一辺約 70cm の正方形の平面形で、四隅に面取りして角柱状に仕上げた支柱を立て、支柱にほぞ穴を穿ち（貫通するものとそうでないものがある）、桟を渡して固定し、その外側に側



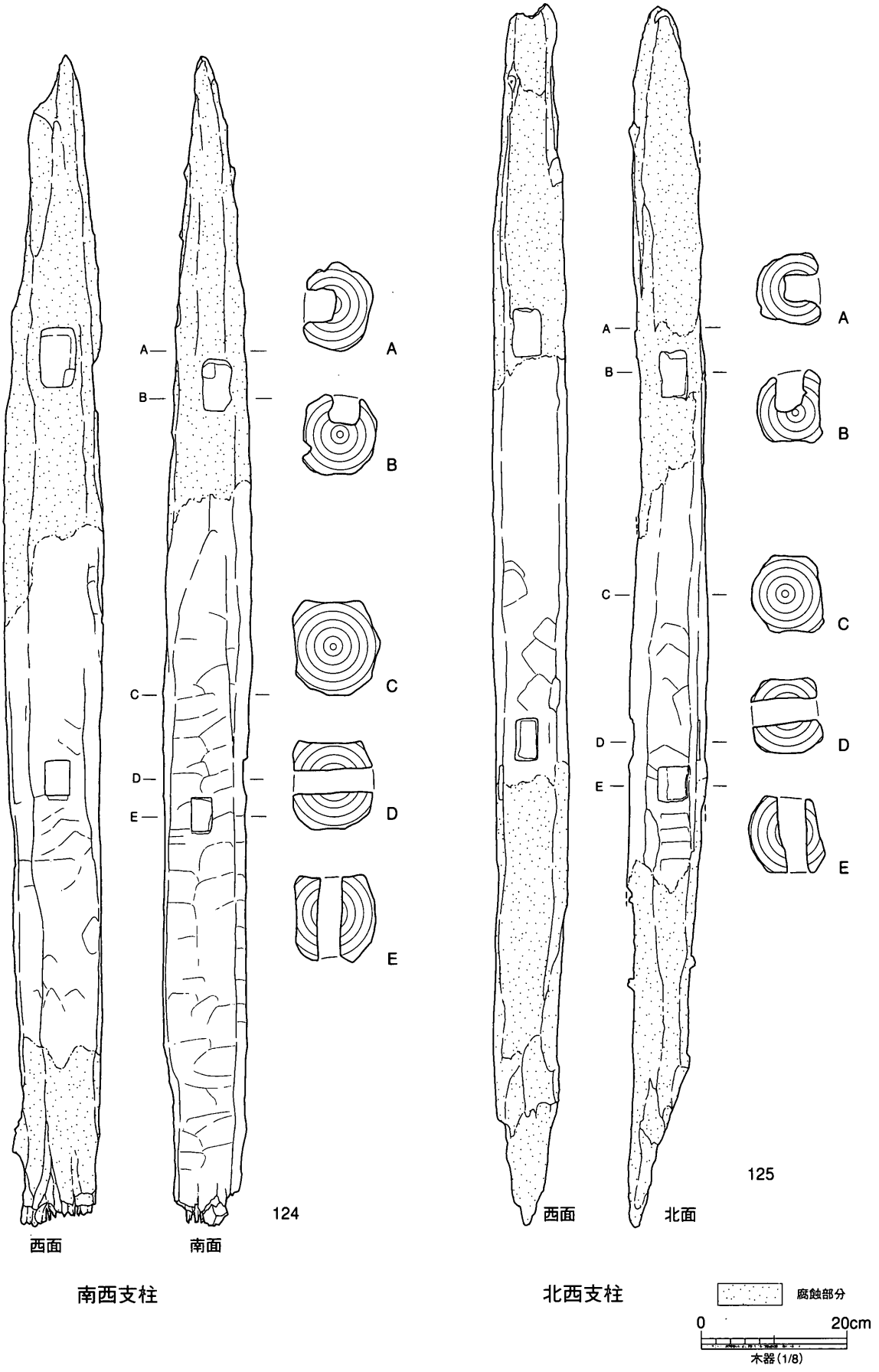
第 33 図　SE02 出土遺物実測図

板を立てる構造である。側板が接続する部分には外側を薄い板で目張りをしている。最も残りのよい支柱が 170cm の長さであるが、本来の長さは不明である。桟は 2 段遺存していたが、配置から考えると最低もう 1 段はあったものと考えられる。井戸底には、40 × 25cm の礫岩を最大のものとして、砂岩や頁岩を一重に敷き詰めており、曲げ物はなかった。なお、井戸底は粘質土層で止まっていた。調査後に行った深掘りにより、さらに 20cm ほど下で湧水層と思われる砂層を確認した（第 30 図断面図の井戸底の下に記す点線）。

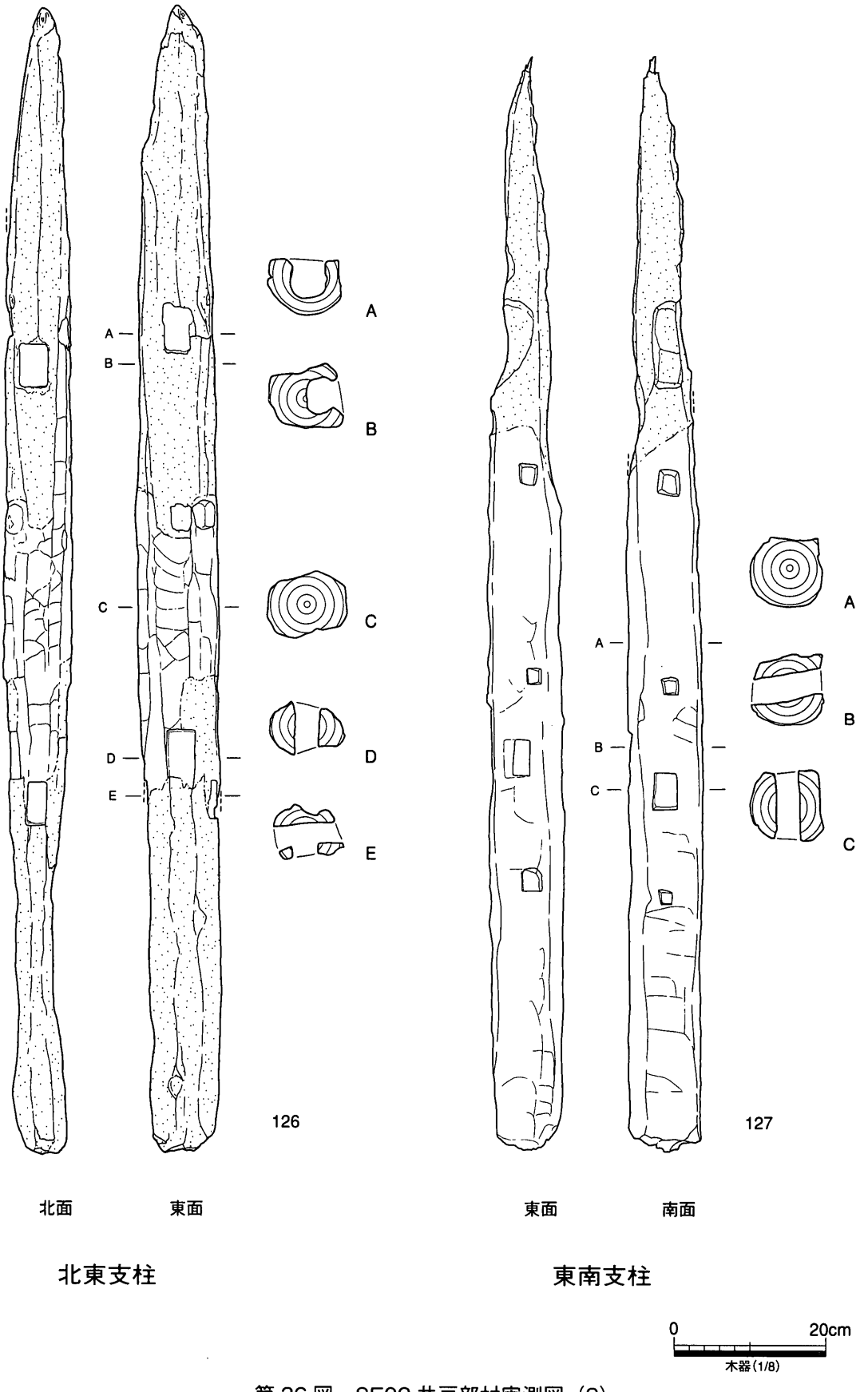
井戸木組みの内部は、しまりの悪い粘質土で埋められていた。埋土は 4 層以上に分層することができるが、一度に埋め戻されたものと観察された。木組み内部からは、土器細片が出土したのみで、使用時期を特定できる遺物に恵まれなかった。また、埋め戻しの際の祭祀の痕跡も認められなかった。



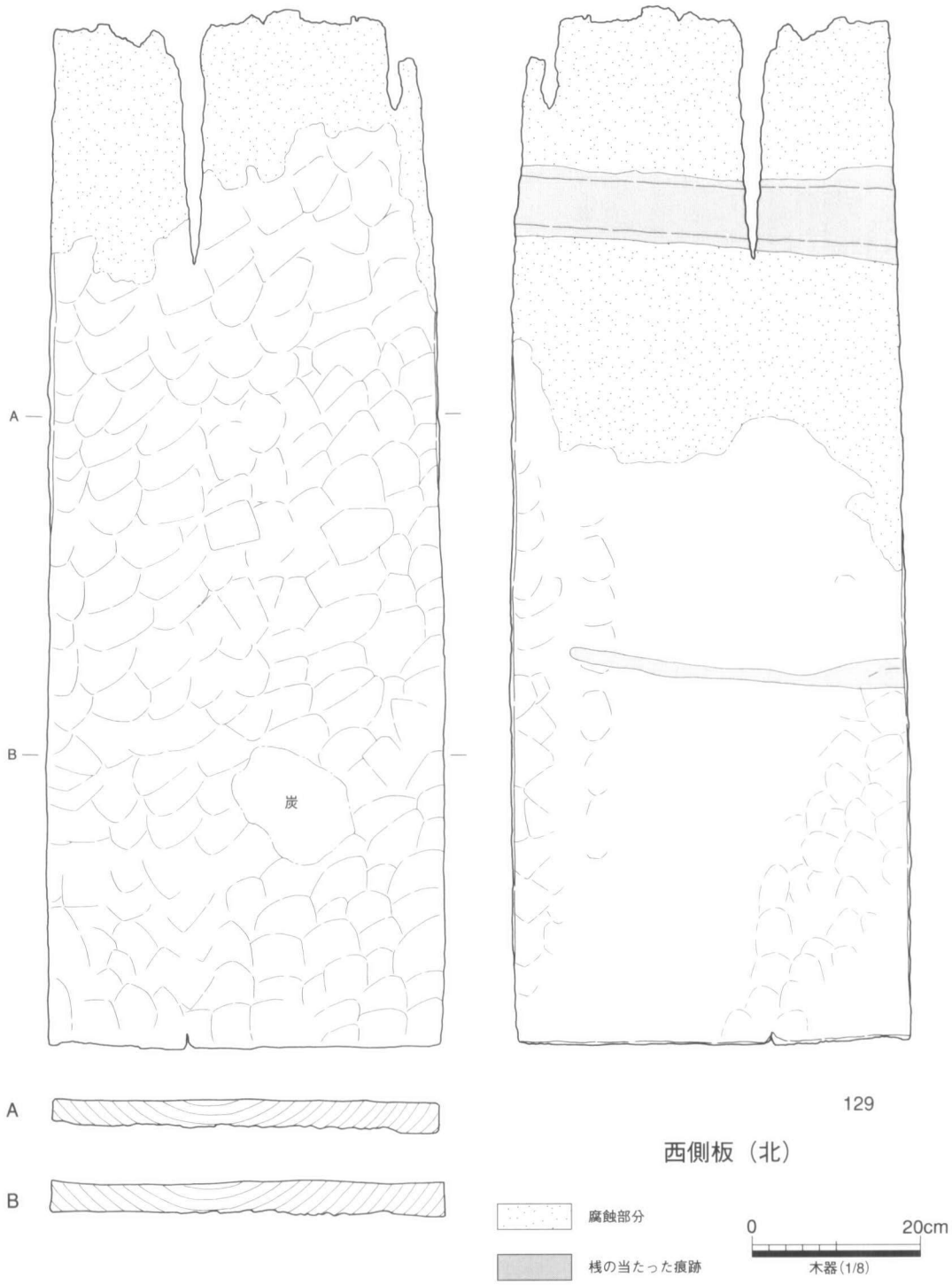
第 34 図　SE02 木組み模式図



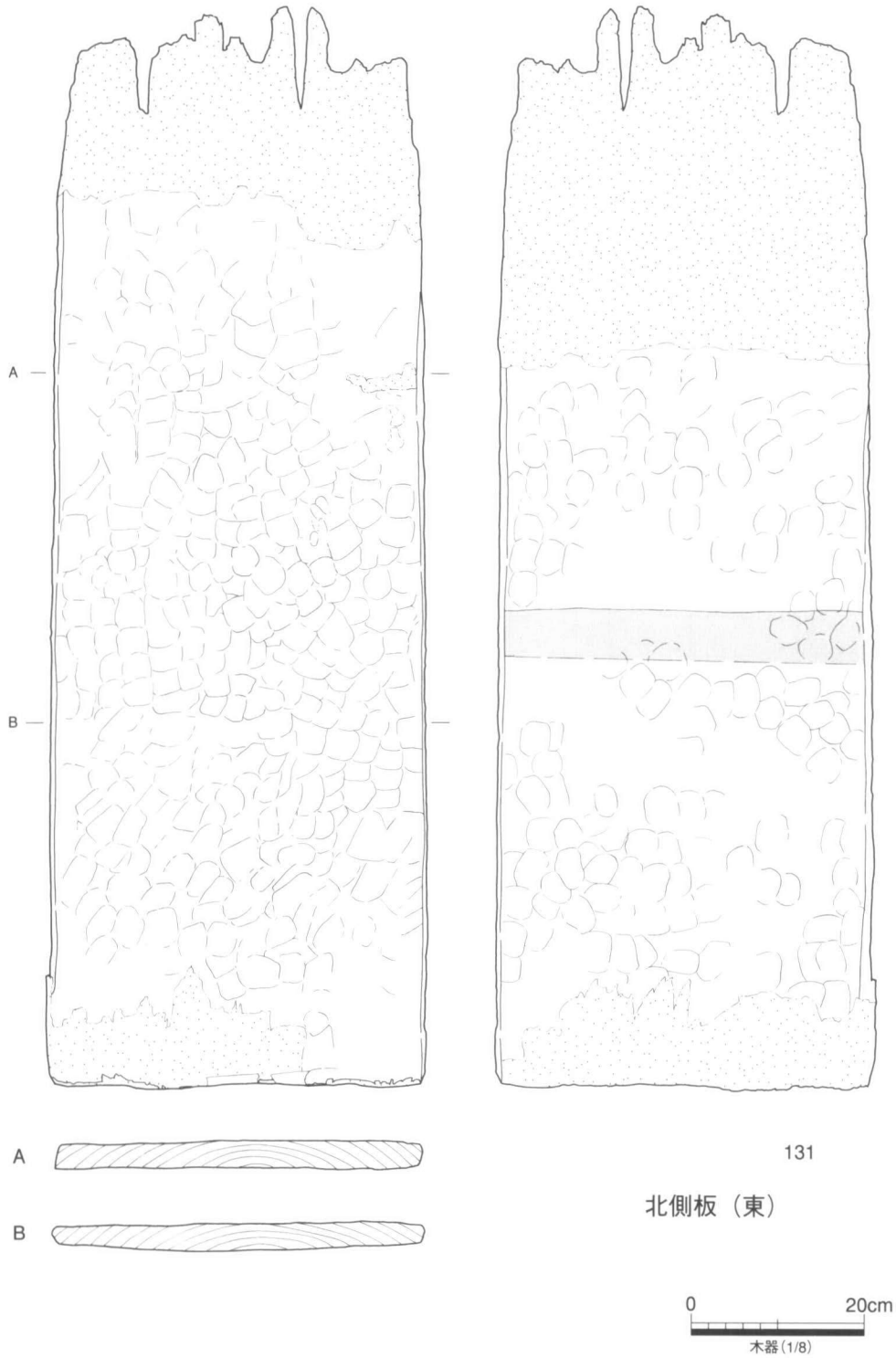
第 35 図　SE02 井戸部材実測図（1）



第 36 図　SE02 井戸部材実測図（2）



第 37 図　SE02 井戸部材実測図（3）



第 38 図　SE02 井戸部材実測図（4）

第33図の101～105が、井戸の木組み内部から出土したもので、106～123が裏込めから出土した遺物の実測図である。101、102は土師質土器小皿、103は杯、104は椀の小片である。104の内面には板ナデが明瞭に認められる。105は須恵器椀の底部、幅広で低い高台を貼り付けている。

106～110は土師質土器小皿、111、112は土師質土器杯である。112は大振りなもので、底部に回転糸切りの痕跡が認められる。113～115は土師質土器椀の底部、114、115は吉備系と思われる。116は内面黒色の黒色土器椀、117は須恵器椀、118は瓦質土器椀である。119の青磁椀は、器肉が厚く、破片のため不明瞭であるが、見込み部分の外周に窪みがあることから龍泉窯系Ⅰ類のものと思われる。120は瓦質土器鉢、121は土師質土器鍋、122は瓦質土器甕の小片、123は平瓦の小片である。

裏込めから出土した遺物は、いずれも破片で時期幅があるが、112の回転糸切りの杯や119の龍泉窯系青磁椀等から、13世紀前半期頃が年代の下限であり、ＳＥ02の構築年代もこの頃に求めることができる。

第39図　SE02井戸部材実測図（5）

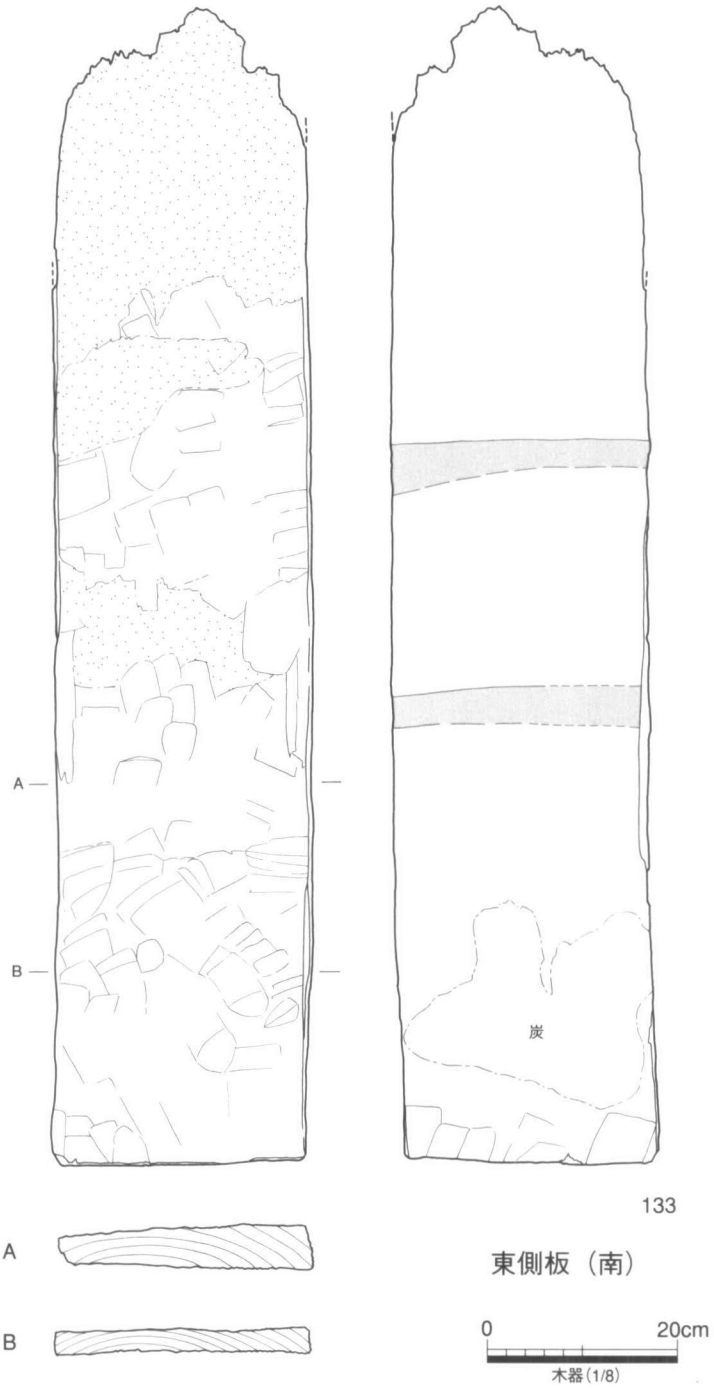
第35～44図は、ＳＥ02の井戸部材の実測図である。124～127は支柱（隅柱）である。いずれも心持材で、四角柱状に加工されており、釿の痕跡が認められる。129～134は側板である。いずれも釿によって丁寧に加工されている。釿痕は側板外側に顕著に残る傾向があるが、これは、井戸側内面で露出していたか、裏込めと接していたかの差であろう。側板を一瞥すると、西・北・南の三方向は、できるだけ幅広に材を木取りし、足らない部分は幅10cm内外の側板を用いている。東側板は28cm内外の２枚の板材を使用している。幅広の側板（129、131～133、135）の木取りは、いずれも板目材Ⅱ（一般にいう板目材と追柾目材の両方の部分を含む材）で、木表を外側にする傾向があるが、木裏が外側になっている例もある。幅狭の側板（128、

130、134）は、本柾目材か板目材である。

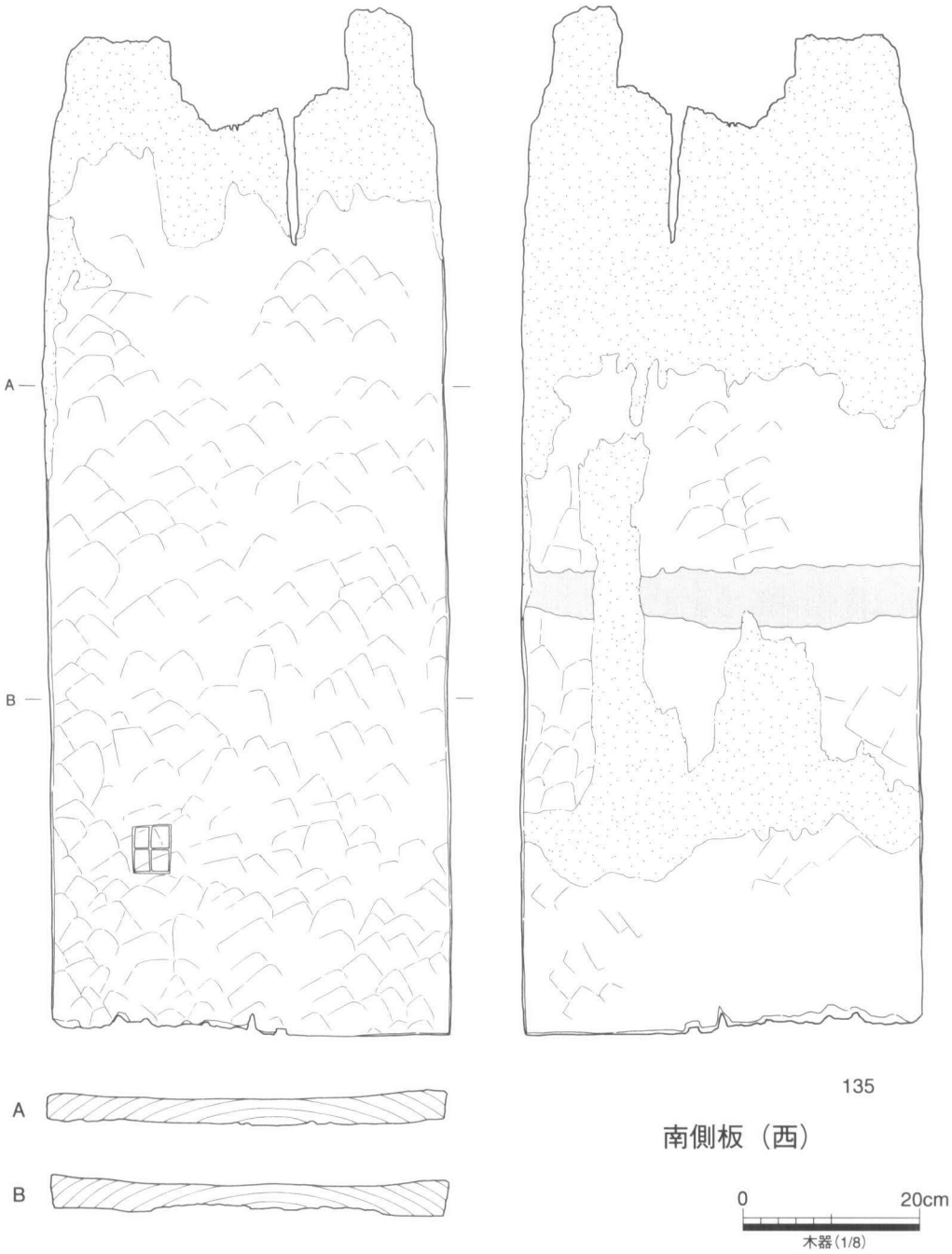
135の南側板の外側の下辺に「田」という線刻が認められる。横方向の一辺が4.2cm、縦方向が5.5cmを測る。魔除けの記号等に類例が認められないから、文字である可能性が高いと考えられるが、意味するところはわからない。綾歌郡綾川町の西末則遺跡ｆ地区の同時期もしくはやや先行する時期の井戸跡に類例がある。

136～139は、遺存した上側の桟である。腐食が進んでおり本来の形状ではない。140～143は、下側の桟である。木取りは本柾目材、追柾目材で、下端を刳り込んでホゾ穴の大きさと調節している。

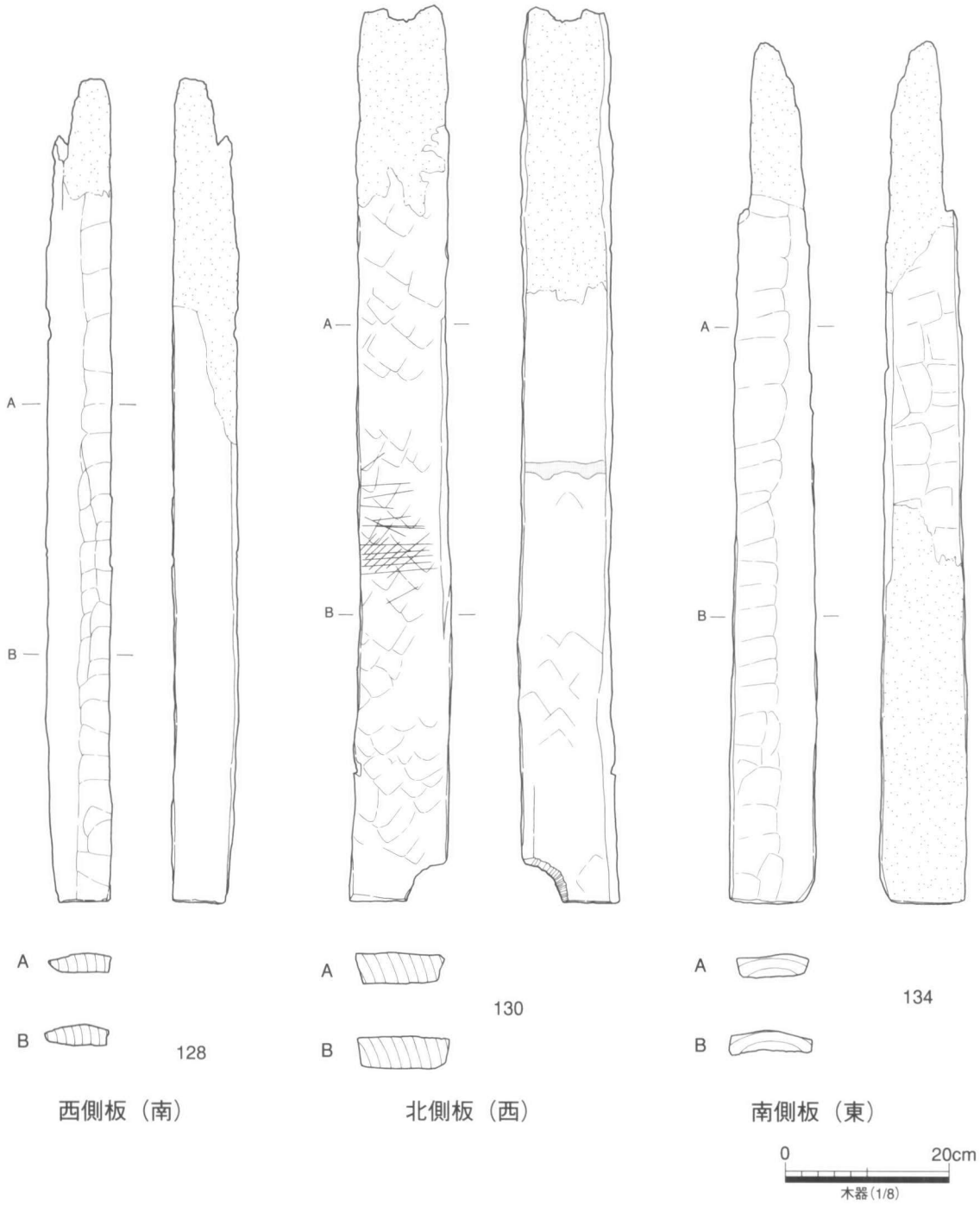
ＳＥ02について、気付いた点を２、３記しておきたい。ひとつは、支柱下端の形状である。４本ある支柱のうちの１本のみ下端を尖らせている。同様の事例は、高松市木太町で見つかった８世紀代の井戸跡（木太本村Ⅱ遺跡）にもあり、井戸構築法に係わるものかも知れないと考えられる。また、側板下端も１枚だけ斜めになっているもの（132）があり、やはり木太本村Ⅱ遺跡の井戸跡に類例がある。単に木取りの際の現象かも知れないが、井戸に係わる何らかの習俗を表している可能性がある。



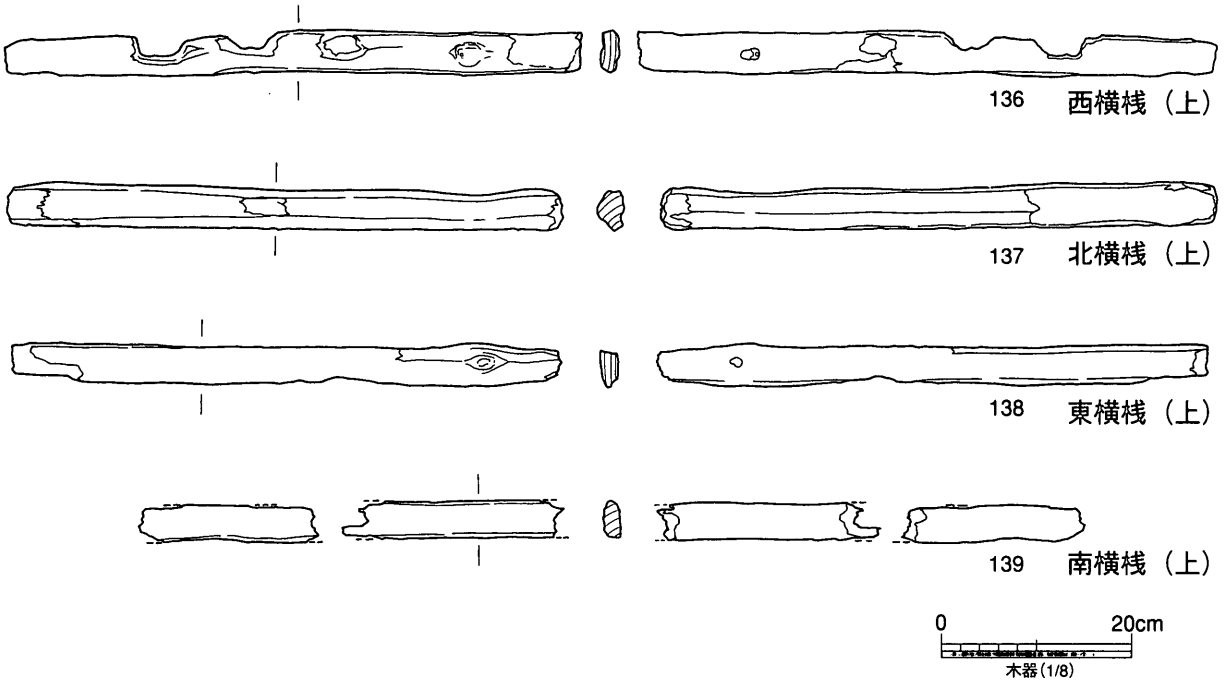
第40図　SE02井戸部材実測図（6）



第 41 図　SE02 井戸部材実測図（7）



第 42 図　SE02 井戸部材実測図（8）



第43図　SE02井戸部材実測図（9）

旧河道跡

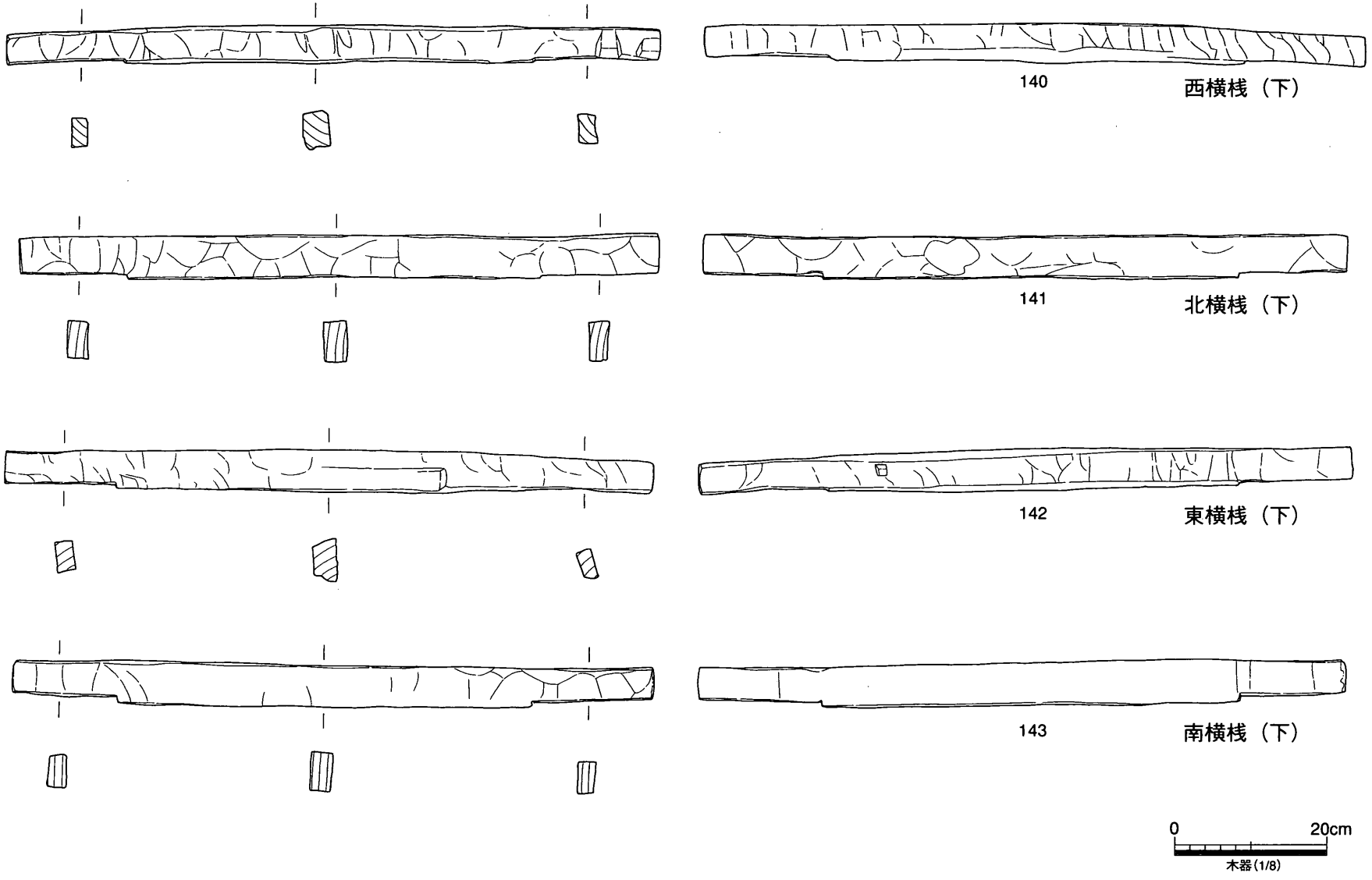
ＳＲ01

調査区を西南から東北へ抜ける旧河道跡である。幅７ｍ、深さ0.6ｍの規模で、断面形は浅い皿状を呈し、ほぼ直線に流れている。埋土は巨視的に２層で、下層は暗灰黄色砂を主体とし、黒褐色粘質土が葉理となって堆積している。流水によって埋没していることがわかる。

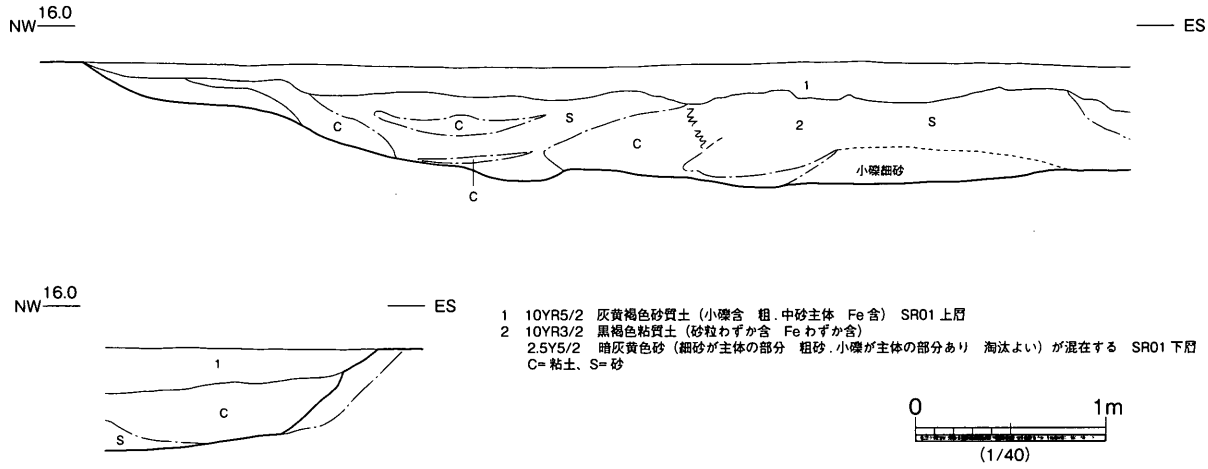
第46図144～156は、ＳＲ01の上層から出土した遺物である。144～146は須恵器の杯蓋である。144は身である可能性もある。145は蓋、つまみは扁平で上面の中央はわずかに突出している。146も平らな頂部と屈曲する口縁からなる蓋である。147、148は須恵器杯とした。148の高台は、外に張り断面形が角張るもので、内端部が上がっている。149は須恵器高杯の脚部である。屈曲部の稜線は全体的に甘い印象である。150、151は土師質土器甕の口縁部片で、いずれも外反する。152は外反し、頂部が平坦になる須恵器甕の口縁部片である。

153は土師器甕の口縁、端部を上方に摘み上げている。154は土師質土器羽釜の鍔部である。混入品と考えられる。155は須恵器壺の底部、外面に自然釉が掛る。156は土師質の飯蛸壺である。

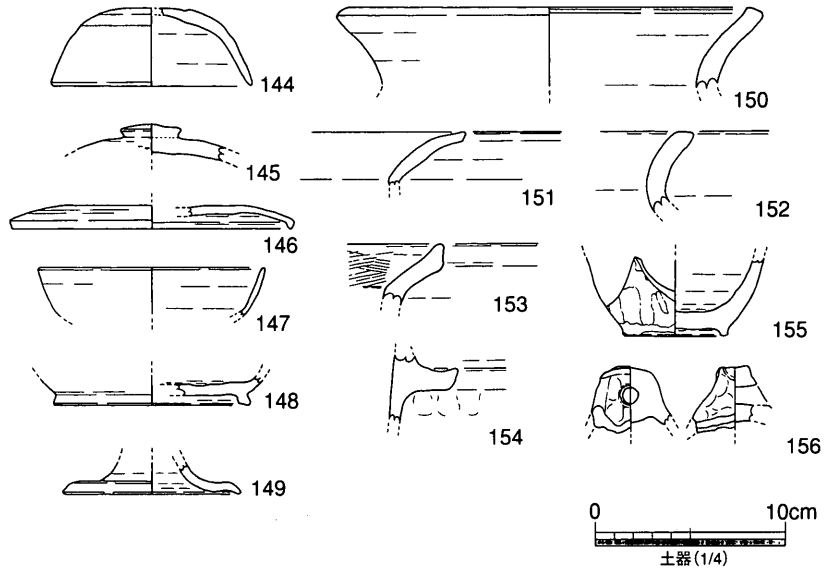
第47図157～174はＳＲ01下層から出土した遺物である。164と167は川底に接する位置から出土したものである。157、158は土師質の高杯脚部片であるが、157は残りが悪く、細部の観察に耐えない。159～164は、須恵器杯である。159、160は立ち上がりをもつ杯身、161、163は口縁部を垂直に立ち上げている。162は椀とすべきかも知れないと考えている。164の底部は肉厚であり、高杯とすべきかも知れないと考えている。165は須恵器高杯、166は須恵器皿である。167、168は弥生土器と思われる破片で、167は壺の口縁、168は壺か甕の底部片である。169は土師質の把手である。端部を折り曲げて三角形にしたものを上方に折り曲げている。外面にハケ目が認められることから甕と思われる。170は須恵器壺の底部小片、171は管状土錘である。この他３点の石鏃が出土している。



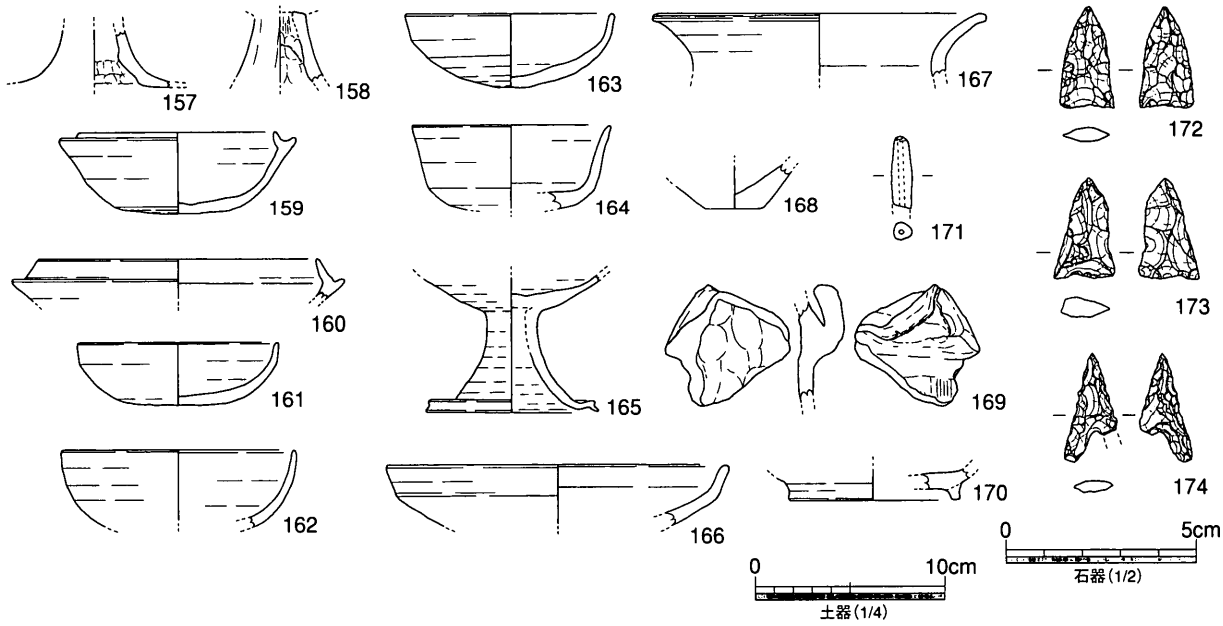
第 44 図　SE02 井戸部材実測図（10）



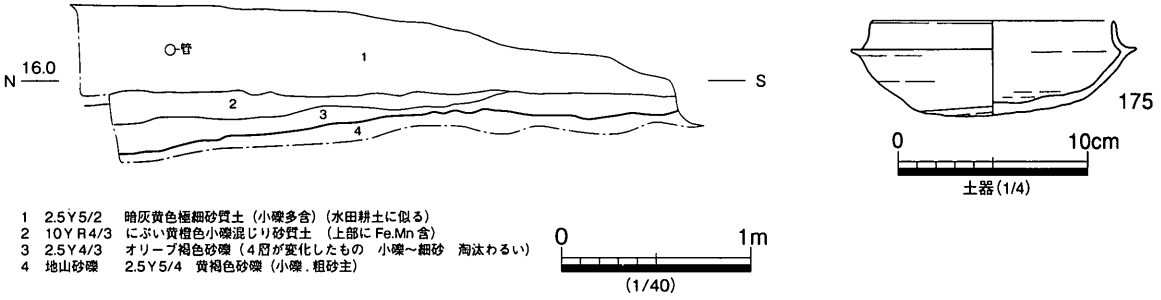
第 45 図　SR01 断面図



第 46 図　SR01 上層　出土遺物実測図



第 47 図　SR01 下層　出土遺物実測図



第48図　Ⅲ区　拡張区断面図，出土遺物実測図

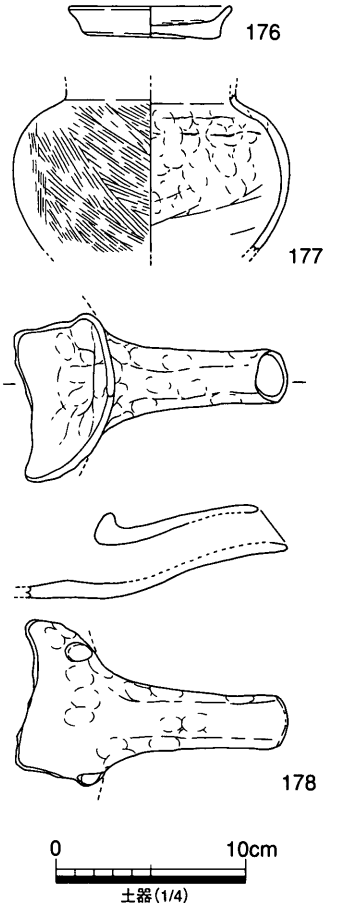
ＳＲ01出土の土器は時期幅があるが、須恵器の様相がＴＫ48併行期を中心とすると考えられ、７世紀後半期から８世紀初期頃の年代と考えられる。なお、ＳＲ01は延長約40ｍにわたり検出したが、砂からなる河岸であるにもかかわらず直線に流れ、川底も局所的な深掘れ等のない平坦面をなしていた。このことからＳＲ01は人工的な溝である可能性も考えられるが、結論付ける根拠は得られなかった。

Ⅲ区拡張区

Ⅱ区とⅢ区の境界にある里道は、条里型地割の坪界線に当ることから、関連遺構の有無を確認するために南北方向にトレンチを掘削した。里道に井戸水の配管があったため、トレンチは３ｍほどの長さに留まったが、この部分では関連遺構は検出されなかった。なお、Ⅲ区の遺構検出面である４層上面に突き刺さるように第48図175を検出した。砂層であるために遺構に伴うものかどうか判断できなかった。175は、立ち上がりをもつ須恵器杯身である。口縁端部も受部先端も丸く収めている。ＴＫ10併行と思われる。

Ⅲ区その他の遺物

第49図176～178は、包含層等から出土した遺物である。176は機械掘削中に検出した底部を回転ヘラ切りした土師器小皿、ほぼ完形である。177は調査区西際に掘削した排水溝の断面で検出したもので、遺構検出面である砂層中から検出したものである。体部外面はハケ、内面の下半は板ナデ、上半は指オサエが認められる。弥生土器もしくは古墳時代の土師器と考えられる。177も遺構に伴うものなのか、遺構検出面下の砂層に包含されるものか判断できなかった。しかし、摩滅せず細部調整が観察できる程度の遺存状況から、遺構に伴うものであった可能性がある。178は注口鉢としたが類例に乏しい。斜め上方に向かう中空の注ぎ口の下面両側に窪みがある。胎土中に砂粒が多量に含まれている。

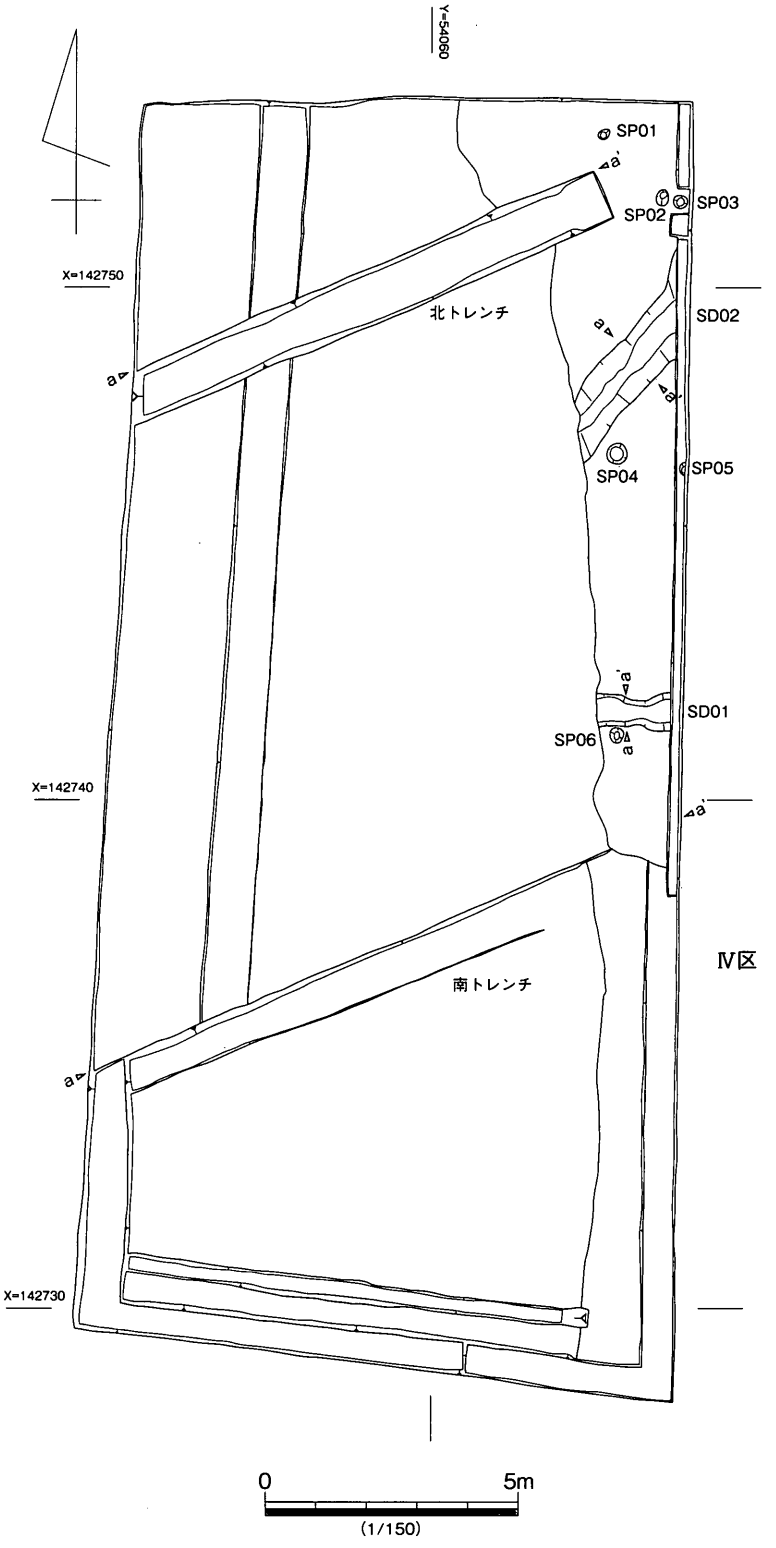


第49図　Ⅲ区　その他の出土遺物実測図

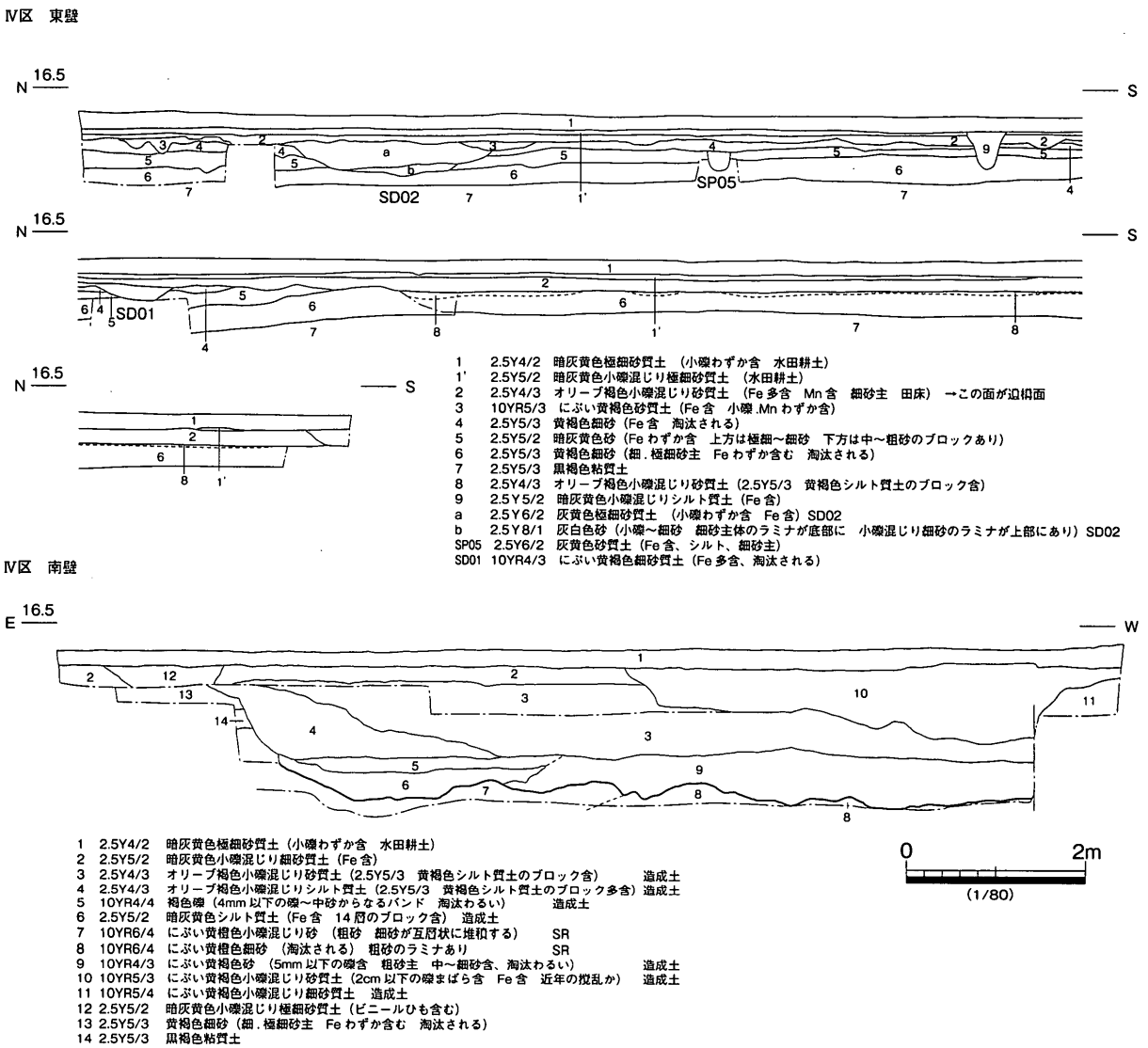
第５節　Ⅳ区の調査

１．概要

Ⅳ区は、大灘遺跡南端の約 340㎡の調査区である。調査区の大半は近世以降に埋め立てて造成された部分に当り、東側で柱穴跡６、溝状遺構２を検出した。



第 50 図　Ⅳ区　遺構配置図



第51図　Ⅳ区　土層断面図

2．遺構

柱穴跡

6基の柱穴跡を検出した。埋土はＳＰ01がオリーブ褐色細砂質土（2.5Y4/3）、02、03、05、06が暗灰黄色小礫混り細砂質土（2.5Y5/2）、04が水田耕土に似る黄灰色シルト質土（2.5Y5/1）である。いずれも土器細片が含まれていたが、時期不明である。

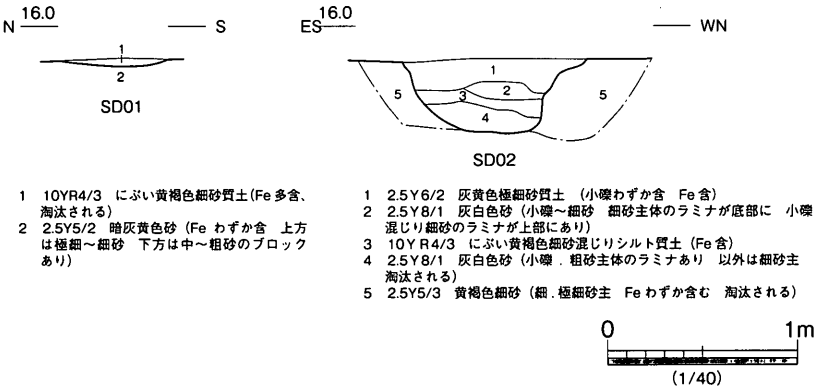
溝状遺構

ＳＤ01

Ⅳ区中央東寄りで検出した。幅約54cm、深さ約4cmを測る。周辺の条里型地割の方向と合致するが、検出延長が短いので確定できない。遺物は出土しなかった。ＳＤ02とともに完新世段丘に切られているため、少なくとも古代末よりは古い遺構と考えられる。

ＳＤ02

Ⅳ区北側の東寄りで検出した。幅約94cm、深さ約38cm、流路方向はＮ－41°－Ｅを測る。土器細片が含まれていたが、時期不明である。

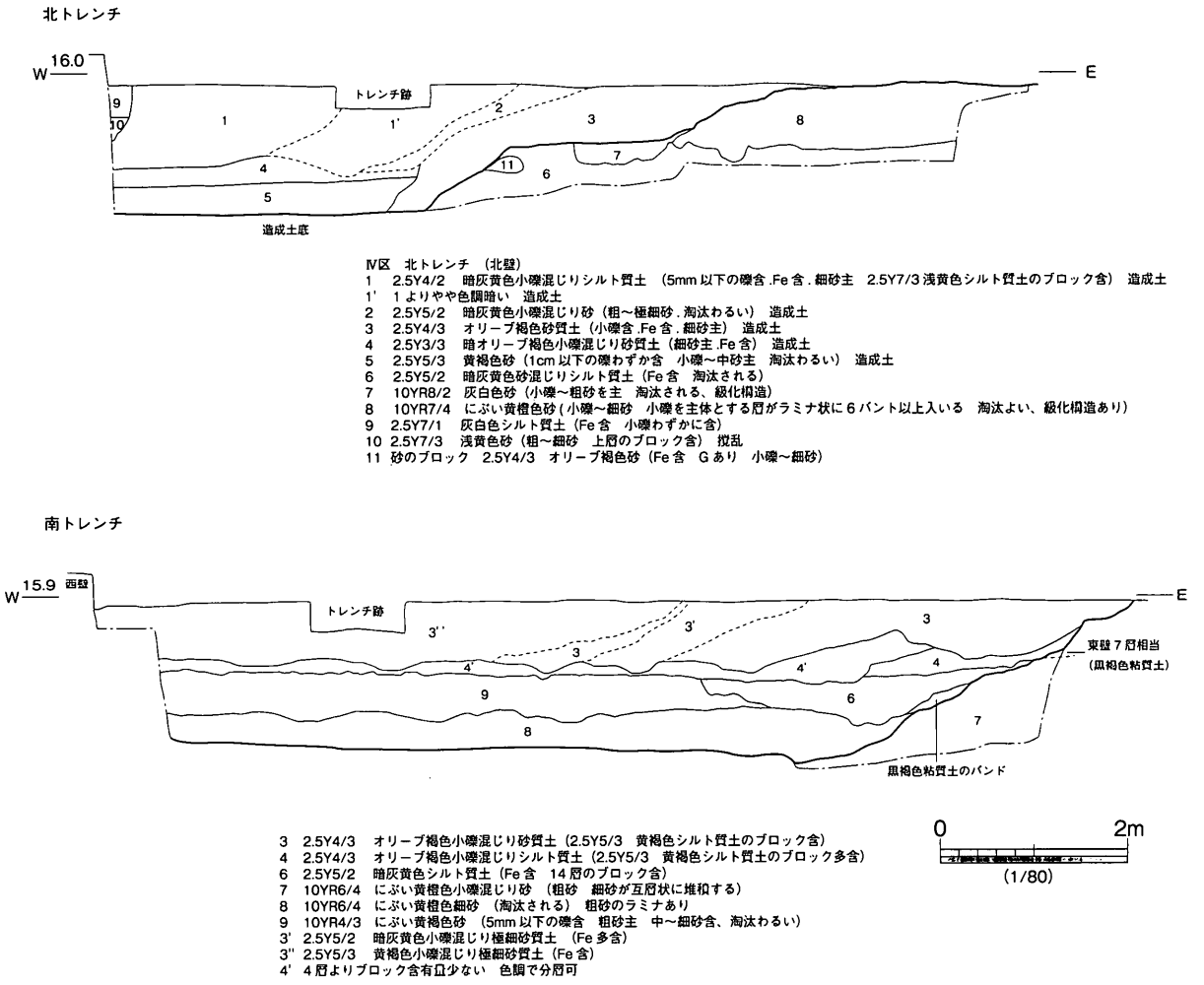


第52図 Ⅳ区 SD01、02断面図

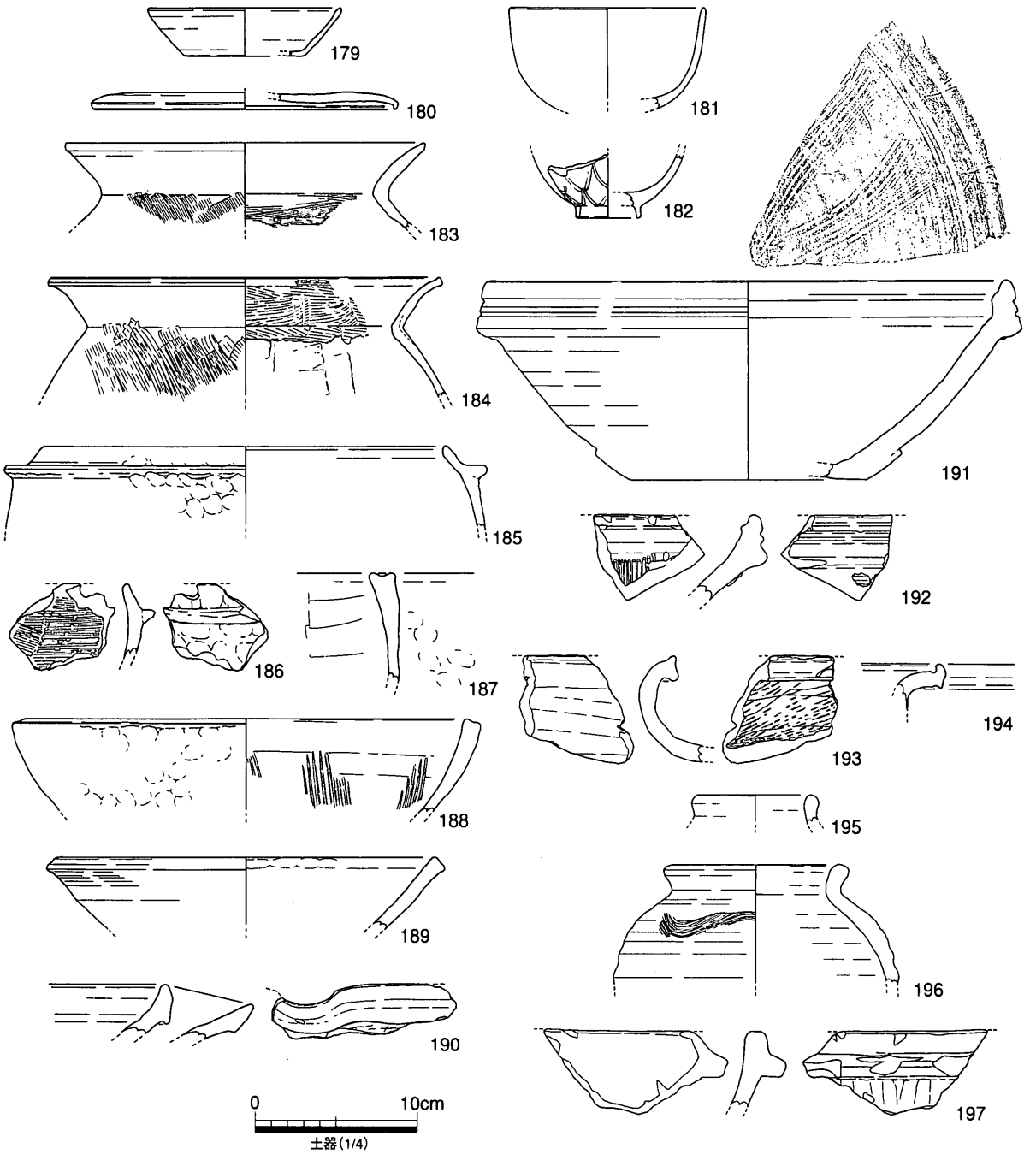
造成土

Ⅳ区の大半は、近世以降に埋め立てられている。それ以前は、高さ1.6 m程の小崖によって2段の地形に分けられており、近世以降に低い方を高い面と同じ高さまで造成している。埋め立てられた土は、高い方から順次土が入れられた様子で、西方に向かって下る斜め方向の縞模様が多く認められた。また、堆積物が淘汰不良であることも人為的な埋め戻し土であることを示している。

調査は、Ⅳ区南端と2本のトレンチを掘削して、堆積状況と遺物の包含状況を観察し、南半について



第53図 Ⅳ区 造成土断面図



第54図　Ⅳ区　出土遺物実測図

全体の３分の１程を掘削した。なお、造成した土の下には春日川の河川堆積物があるが、これについては十分な調査を行うことはできなかった。

埋め立てられた堆積物中には、一定量の遺物が包含されており、28㍑入りコンテナ４箱分の遺物が出土した。

第54図179～197は、造成土中から出土した遺物実測図である。179は土師質土器杯の破片、180は須恵器杯蓋である。181、182は近世陶磁器、182は伊万里の二重網目文が施されている。183、184は「く」の字状に外反する口縁をもつ甕である。183は体部内外面にハケ、184は体部外面と口縁部内面にハケが施されている。185～187は、土師質土器釜の口縁部片である。187は鍔が退化し、痕跡的に付けら

れている。188は土師質土器すり鉢、189は瓦質土器鉢、190は東播系須恵器の片口鉢である。190は、口縁端部を上下に拡張する新しい様相を見せている。191は備前焼すり鉢である。口縁部外面に2条の沈線、内面には凹面をもつ。卸目は左上がりに施されている。間壁編年V期後半期のものと判断される。192も備前系陶器すり鉢、193は瓦質土器甕の口縁部である。大きく外湾させ、端部を上下に拡張している。194は常滑甕の口縁部と思われる。大きく外湾させた口縁の端部を上下に拡張する独特の形態を呈している。195、196は備前焼壺である。196は肩部に粗い波状文を施している。197は滑石製の石鍋である。口縁部直下に鍔が削り出されている。鍔の断面形は台形でやや下方に下がっている。木戸雅寿編年Ⅲ期のもので、13世紀代のものと思われる。

以上のように、造成土中には時期幅のある遺物細片が包含されている。新しいものでは伊万里の二重網目文が施されたものがあり、概ね18世紀代より新しい堆積物であることがわかる。

第４章　自然科学的分析

第１節　香川県大灘遺跡における樹種同定

株式会社古環境研究所

１．はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

２．試料

試料は、大灘遺跡で出土した中世の木組井戸の部材（支柱、側板、桟、目張り板）６点である。

３．方法

カミソリを用いて試料の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

４．結果

表１に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

モミ属　*Abies*　マツ科　第55図

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的緩やかである。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で１分野に１～４個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、じゅず状末端壁を有する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりモミ属に同定される。モミ属は日本に５種が自生し、そのうちウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソの４種は亜寒帯に分布し、モミは温帯を中心に分布する。常緑高木で高さ45ｍ、径1.5ｍに達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

ツガ属　*Tsuga*　マツ科　第55図

仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞及び放射仮道管から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急である。わずかではあるが、樹脂細胞が存在する。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、スギ型でややヒノキ型の傾向を示し、１分野に２～４個存在する。放射仮道管が存在し、その壁には小型の有縁壁孔が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりツガ属に同定される。ツガ属には、ツガ、コメツガがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で通常高さ 20 ～ 25 m、径 50 ～ 80cm である。材は耐朽性、保存性ともに中庸で、建築、器具、土木、薪炭などに用いられる。

コウヤマキ　*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.　コウヤマキ科　第 55 図

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。

放射断面：放射柔細胞の、分野壁孔は窓状である。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10 細胞高以下のものが多い。

以上の形質よりコウヤマキに同定される。コウヤマキは福島県以南の本州、四国、九州に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ 30 m、径 80cm に達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭であり、耐朽性、耐湿性ともに高い。とくに耐水湿材として用いられる。

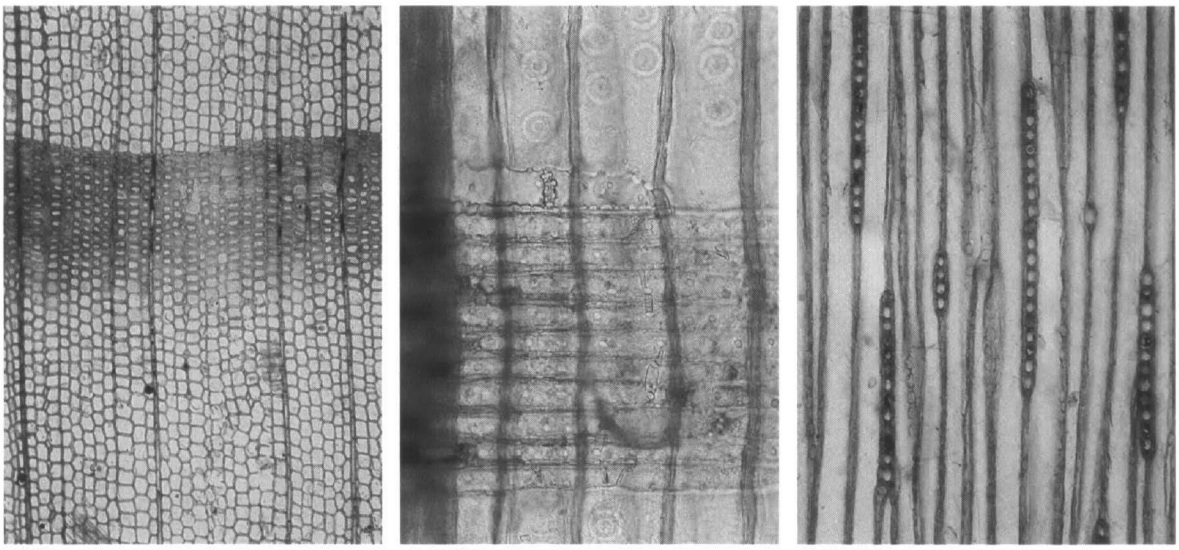
5．所見

同定の結果、大灘遺跡の木組井戸部材は、コウヤマキ４点、ツガ属１点、モミ属１点であった。コウヤマキは、南西支柱、北西支柱、横桟（上）、横桟（下）に使用されている。コウヤマキは耐湿性にとくに優れ、針葉樹の中では最も加工のしやすい材である。ツガ属は西側板（北）に使用されており、木材は、耐朽性、保存性ともに中庸で、切削、加工はあまり容易でない。モミ属は温帯性のモミと考えられ、目張り板に使用されている。木材は耐久性、保存性は低いが、軽軟な事から加工が容易である。いずれの樹種も温帯を中心に広くに分布する常緑針葉樹であり、遺跡周辺に生育していたか近隣地域よりもたらされたと推定される。

参考文献
佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296
山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第１号，植生史研究会，p.242

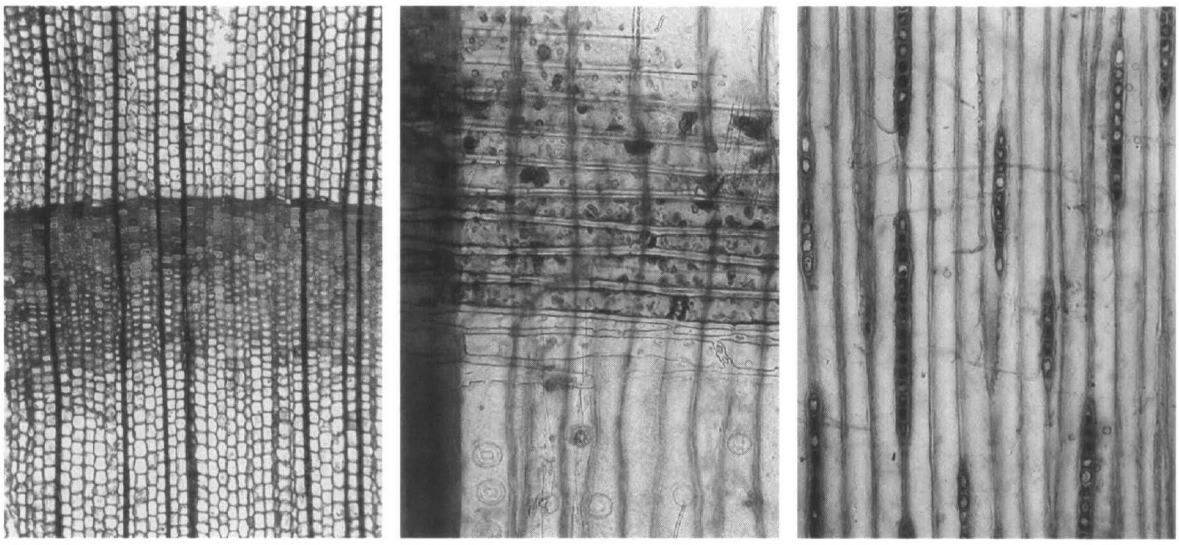
No.	試料	結果（学名／和名）	
1	南西支柱	*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.	コウヤマキ
2	北西支柱	*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.	コウヤマキ
3	西側板（北）	*Tsuga*	ツガ属
4	横桟（上）	*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.	コウヤマキ
5	横桟（下）	*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.	コウヤマキ
6	目張り板	*Abies*	モミ属

第１表　大灘遺跡における樹種同定結果



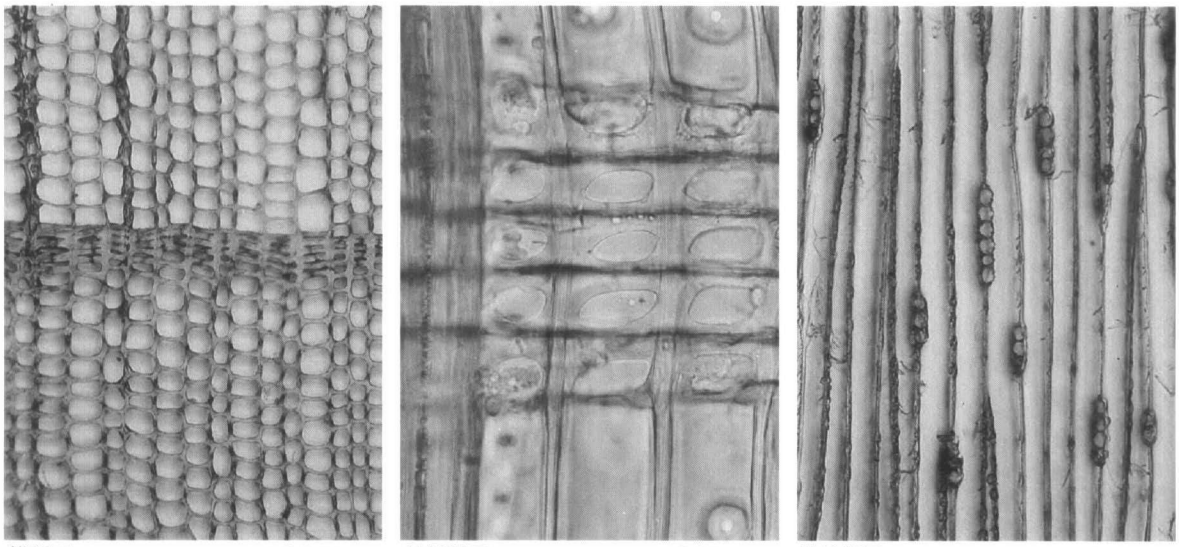
横断面 ：0.5mm　放射断面 ：0.1mm　接線断面 ：0.2mm

1．6　目張り板　モミ属



横断面 ：0.5mm　放射断面 ：0.1mm　接線断面 ：0.2mm

2．3　西側板（北）　ツガ属



横断面 ：0.2mm　放射断面 ：0.05mm　接線断面 ：0.2mm

3．2　北西支柱　コウヤマキ

第 55 図　大灘遺跡の木材

第5章　まとめ

第３章では個々の遺構について報告したが、ここでは大灘遺跡の時期別の変遷と内容についてまとめたい。

１．弥生時代～古墳時代

当該期の遺構は確認できていないが、遺物細片が出土している。なかでも古墳時代までの土器片の中には、遺構検出面に当る砂層中より検出したものがある。砂層上面が汚れていることから遺構を検出できなかった可能性と、元来砂層中に遺物が含まれている２つの可能性があるが、どちらであるのか判断できなかった。この点は、春日川流域の堆積層に関する情報がもう少し得られれば判断できる可能性がある。

２．古代

７世紀代に機能していたと考えられる旧河道跡１条（Ⅲ区ＳＲ01）を検出した。なお、ＳＲ01が溝状遺構である可能性があることは先述した。また、遺構は確認できなかったが、８世紀代から10世紀代の遺物細片が出土している。

３．中世前半期

大灘遺跡で検出した遺構の大半がこの時期のものである。遺構の内容は、柵列跡、柱穴跡、土坑、溝状遺構、井戸跡である。これらの遺構は、密集するというよりは散在するという表現が妥当な検出状況であり、遺構の広がる範囲も確定できない。しかし、南方に所在する由良南原遺跡でも類似する時期の遺構が類似する状況で検出されていることから、大灘遺跡周辺において中世前半期に再開発や入植等の何らかの変化が生じた可能性がある。

当該期の遺構として特筆されるのが、Ⅲ区ＳＥ02である。Ⅲ区ＳＥ02は、四隅に立てた柱を桟で固定し、周囲に縦板をめぐらす型式の井戸である。このような型式の井戸は、弥生時代から存在するといわれ、古代から中世にかけて造られている。古代（奈良時代）の井戸は、格式や官位等と規模との間に相関関係があると指摘されているが、中世の段階ではそのような関係は認められないようである。ＳＥ02と同じ型式の井戸で同時期のものは、綾歌郡綾川町に所在する西末則遺跡でも検出されている。ここでは掘立柱建物跡が集中する地域に当るが、集落の性格は特別なものではなく、一般的な集落と判断される。大灘遺跡も周囲の遺構の様相からみて、一般的な集落に伴う井戸と理解するべきと考えている。

４．中世後半

Ⅱ（S）区で、明銭が検出された他、包含層から備前や常滑の破片が検出されている。

５．近世以降

Ⅳ区で氾濫原面を埋め立てて、段丘面と同じ標高の耕地に造成する工事を行っている。なお、両者を画する完新世段丘崖は、弥生時代前期末頃と古代末頃に形成されたことが知られているが、大灘遺跡の場合は、Ⅲ区ＳＲ01の河床高から考えて、古代末に該当する。しかし、このような地形変化が人々の生活に及ぼした影響については、遺構から確認することはできなかった。

第 56 図　遺構変遷図（1）

第57図　遺構変遷図（2）

観察表

凡例

1．残存率は、遺物の図化部分に占める実物の割合を示しており、完形品に対するそれではない。

2．色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖 2001 年版」を参照した。

3．胎土中の砂粒の「粗」は径 4mm 以上、「中」は 0.5mm 以上、「細」は 0.5mm 以下を基準とした。

第２表　大灘遺跡出土土器観察表

報文番号	遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量			調整		残存率	備考
				外面・釉	内面・胎土	長石・礫	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面・凸面	内面・凹面		
1	Ⅰ（N）区　包含層	須恵器	杯身	5PB5/1 青灰	5PB5/1 青灰					中・並	(11.0)			回転ナデ	回転ナデ	口縁部　1/8	
2	Ⅰ（N）区　包含層	土師質土器	土釜	5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙					中・多				横ナデ	ナデ	口縁部　破片	
3	Ⅰ（N）区　包含層	土師質土器	足釜	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙					中・多				指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	脚　破片	
4	Ⅰ（S）区　包含層	土師質土器	小皿	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙					細・少	(8.6)			回転ナデ	指押さえ・ナデ	口縁部　2/8	
5	Ⅰ（S）区　包含層	土師質土器	鉢	10YR8/3 浅黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙					中・少				横ナデ・指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	口縁部　破片	
6	Ⅰ（S）区　包含層	備前焼	甕	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR4/2 灰褐					中・少				回転ナデ	回転ナデ	口縁部　破片	
8	Ⅱ（S）区　ＳＫ01	土師質土器	土釜	10YR8/2 灰白	2.5YR8/2 灰白					中・多				指押さえ・ナデ	ナデ	口縁部　破片	
9	Ⅱ（N）区 包含（４層）	須恵器	椀	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y7/2 灰黄					細・少			4.6	回転ナデ・貼付高台	回転ナデ	底部　2/8	土師質焼成
10	Ⅱ（N）区 包含（４層）	須恵器	杯身	N5/ 灰	N5/ 灰					中・少				回転ナデ	回転ナデ	口縁部　破片	
11	Ⅱ（N）区 包含（４層）	須恵器	(供膳具)	N7/ 灰白	N7/ 灰白					中・多			8.0	ナデ・マメツ	マメツ	底部　2/8	
12	Ⅱ（N）区 包含（４層）	土師器	高杯	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	中・普	細・少		細・少					指押さえ後横ナデ		脚部　6/8	
13	Ⅱ（N）区 包含（４層）	弥生土器	壺か甕	2.5Y6/3 にぶい黄	10YR6/4 にぶい黄橙	中・少			細・少				5.0	ナデ	板ナデ	底部　4/8	
14	Ⅱ（N）区 包含（４層）	弥生土器	壺か甕	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/6 橙	中・少	細・少						3.5	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	底部　8/8	
15	Ⅱ（N）区 包含（４層）	土師質土器	足釜	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙					中・少				ナデ	ナデ	脚部　破片	
16	Ⅱ（N）区 包含（４層）	備前焼	擂鉢	5YR5/2 灰褐	5YR5/1 褐灰					中・多				指押さえ・横ナデ	指押さえ・オロシ目	口縁部　破片	
17	Ⅱ（N）区 包含（４層）	土師質土器	甕	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙					中・少				ナデ・板ナデ	板ナデ	口縁部　破片	
18	Ⅱ（N）区 包含（４層）	須恵器	壺	2.5GY6/1 オリーブ灰	2.5GY6/1 オリーブ灰					細・少			8.3	回転ナデ・削り出し高台	回転ナデ	底部　1/8	
19	Ⅱ（N）区 包含（３層）	土師質土器	小皿	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙					細・少	8.1	(1.2)	6.6	回転ナデ・回転ヘラ切り	回転ナデ	2/8	
20	Ⅱ（N）区 包含（３層）	瓦器	椀	N6/ 灰	N6/ 灰					中・少			2.6	回転ナデマメツ	マメツ	底部　2/8	
21	Ⅱ（N）区 包含（３層）	土師質土器	土鍋	7.5YR7/6 橙	10YR7/4 にぶい黄橙					中・多				横ナデ・指押さえ後ナデ	板ナデ	口縁部　破片	
22	Ⅱ（N）区 包含（３層）	土師質土器	足釜	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR6/4 にぶい黄橙					中・多				ナデ	ナデ	脚部　破片	
23	Ⅱ（N）区 包含（３層）	陶器	鉢	5YR5/2 灰褐	5YR4/1 褐灰					中・少			10.6	回転ナデ・露胎回転ヘラ切り	回転ナデ	底部　1/8	
24	Ⅱ（N）区 撹乱１	土師質土器	小皿	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙					細・多	9.0	(1.3)	7.6	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	1/8	
25	Ⅱ（N）区 撹乱１	土師質土器	杯	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙					細・少			6.4	回転ナデ・回転ヘラ切り	回転ナデ	底部　2/8	
28	Ⅱ（N）区 撹乱２	土師質土器	井側	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい橙					粗・多				ナデ・板ナデ・ナデ後板状圧痕・斜格子文	板ナデ	口縁部　破片	
29	Ⅲ区　ＳＰ11	土師質土器	小皿	10YR5/2 灰黄褐	5YR6/6 橙					細・少	9.0	(1.6)	5.2	マメツ・回転ヘラ切り	マメツ	1/8	

報文番号	遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量			調整		残存率	備考
				外面・釉	内面・胎土	長石・礫	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面・凸面	内面・凹面		
30	Ⅲ区　ＳＰ20	磁器	皿	10GY8/1 明緑灰	N7/ 灰白					精緻			4.4	施釉	施釉	底部　2/8	肥前系
31	Ⅲ区　ＳＰ22	土師質土器	杯	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y8/2 灰白					中・多			6.4	回転ナデ・回転ヘラ切り	回転ナデ	底部　2/8	
32	Ⅲ区　ＳＰ22	土師質土器	土鍋	10YR4/2 灰黄褐	10YR4/3 にぶい黄褐					粗・多				指押さえ後横ナデ	指押さえ後横ナデ	口縁部　破片	
33	Ⅲ区　ＳＰ23	土師質土器	土釜	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙					中・並				指押さえ後ナデ	横ナデ	口縁部　破片	
34	Ⅲ区　ＳＰ24	土師質土器	甕か鉢	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙					中・並				横ナデ	指押さえ後ナデ	口縁部　破片	
35	Ⅲ区　ＳＰ33	土師質土器	杯か椀	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/6 明黄褐					中・少				横ナデ	横ナデ	口縁部　破片	
36	Ⅲ区　ＳＰ43	黒色土器	椀	10YR8/4 浅黄橙	N3/ 暗灰					細・少				マメツ・横ナデ	マメツ	底部　破片	内面黒色
37	Ⅲ区　ＳＰ47	土師質土器	杯	7.5YR5/6 明褐	7.5YR5/4 にぶい褐					中・少			(5.6)	回転ナデ・マメツ	回転ナデ	底部　2/8	
38	Ⅲ区　ＳＰ47	土師質土器	杯	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙					細・少			(6.7)	マメツ	マメツ	底部　1/8	
39	Ⅲ区　ＳＰ47	黒色土器	椀	2.5Y8/2 灰白	2.5Y3/1 黒褐					細・並				マメツ	マメツ	底部　破片	内面黒色
40	Ⅲ区　ＳＰ58	土師質土器	杯	7.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙					細・少				回転ナデ	回転ナデ	口縁部　破片	
41	Ⅲ区　ＳＫ05	土師質土器	小皿	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙					細・少	(8.8)	1.1	(7.2)	横ナデ・ヘラ切り	横ナデ	口縁部　破片	
42	Ⅲ区　ＳＫ05	土師質土器	杯	7.5YR7/6 橙	7.5YR8/4 浅黄橙					細・少	(11.8)			横ナデ	横ナデ	口縁部　1/8	
43	Ⅲ区　ＳＫ05	土師質土器	杯	2.5Y8/4 淡黄	7.5YR6/4 にぶい橙					細・少	(11.8)			回転ナデ	回転ナデ	口縁部　1/8	
44	Ⅲ区　ＳＫ05	土師質土器	杯	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙					中・少			8.1	回転ナデ・回転ヘラ削り	回転ナデ	底部　2/8	
45	Ⅲ区　ＳＫ05	白磁	椀	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y8/2 灰白					精緻	13.4			施釉	施釉	口縁部　破片	玉縁状口縁
46	Ⅲ区　ＳＫ06	土師質土器	杯	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐					中・少	(15.4)	2.7	(10.0)	回転ナデ・マメツ	回転ナデ	1/8	
47	Ⅲ区　ＳＫ06	土師質土器	杯か椀	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙					細・少				マメツ	マメツ	口縁部　破片	
48	Ⅲ区　ＳＫ06	土師器	杯	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白					中・少			9.7	マメツ	マメツ	底部　1/8	
49	Ⅲ区　ＳＫ06	黒色土器	椀	5YR6/4 にぶい橙	10YR2/1 黒					中・少			5.7	マメツ・回転ヘラ削り・指押さえ後ナデ	マメツ	底部　8/8	内面黒色
50	Ⅲ区　ＳＫ06	瓦器	椀	N5/ 灰	N5/ 灰					中・少	14.0			ナデ後ヘラ磨き	ナデ後ヘラ磨き	口縁部　1/8	
51	Ⅲ区　ＳＫ06	須恵器	椀	5Y7/1 灰白	N5/ 灰					中・少	14.8			回転ナデ後ヘラ磨き	ヘラ磨き	口縁部　1/8	
52	Ⅲ区　ＳＫ06	須恵器	壺	5PB5/1 青灰	5PB6/1 青灰					中・並			9.8	タタキ目・ナデ	板ナデ・指押さえ後ナデ	底部　3/8	
53	Ⅲ区　ＳＫ07	土師質土器	椀	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄					中・少			6.2	ヘラ削り後回転ナデ	マメツ	底部　1/8	
54	Ⅲ区　ＳＫ07	須恵器	杯蓋	2.5Y6/1 黄灰	N7/ 灰白					細・少				回転ナデ	回転ナデ	口縁部　破片	
55	Ⅲ区　ＳＫ08	須恵器	(供膳具)	N4/ 灰	N4/ 灰					中・少	11.4			回転ナデ	回転ナデ	口縁部　1/8	

報文番号	遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量			調整		残存率	備考
				外面・釉	内面・胎土	長石・礫	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面・凸面	内面・凹面		
56	Ⅲ区　ＳＫ11	瓦器	椀	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y8/1 灰白					中・並	15.4	5.6	6.5	指押さえ後ヘラ磨き・指押さえ・回転ナデ	マメツ	8/8	楠葉型
57	Ⅲ区　ＳＫ11	土師質土器	杯	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR8/3 浅黄橙					中・少				マメツ	回転ナデ・指押さえ後ナデ	脚頸部 7/8	
58	Ⅲ区　ＳＤ01	土師質土器	杯	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙					中・少				マメツ	マメツ	口縁部 破片	
59	Ⅲ区　ＳＤ01	土師質土器	不明	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙					粗・多			6.7	ナデ・マメツ指押さえ・マメツ	指押さえ・マメツ	底部 3/8	
60	Ⅲ区　ＳＤ01	黒色土器	椀	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y5/1 黄灰					中・少			6.8	指押さえ・ナデ回転ナデ	マメツ	底部 1/8	内面黒色
61	Ⅲ区　ＳＤ01	須恵器	蓋	N4/ 灰	N4/ 灰					中・少	(15.0)			回転ナデ	回転ナデ	口縁部 1/8	
63	Ⅲ区　ＳＤ04	瓦器	椀	2.5Y7/3 浅黄	N4/ 灰					中・並			4.8	指押さえ・回転ナデ	マメツ	底部 3/8	
64	Ⅲ区　ＳＥ01	土師質土器	小皿	5YR6/8 橙	2.5YR6/8 橙					中・少	6.1	(0.9)	4.9	回転ナデ・回転ヘラ切り	回転ナデ	1/8	赤塗り
65	Ⅲ区　ＳＥ01	土師質土器	小皿	7.5YR6/6 橙	7.5YR8/6 浅黄橙					細・少	7.2	1.2	5.6	回転ナデ・回転ヘラ切り	回転ナデ	8/8	
66	Ⅲ区　ＳＥ01	土師質土器	小皿	2.5YR5/6 明赤褐	7.5YR7/4 にぶい橙					中・並	7.4	1.6	5.7	回転ナデ・回転ヘラ切り・板状圧痕	回転ナデ	8/8	
67	Ⅲ区　ＳＥ01	土師質土器	小皿	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR6/6 橙					細・少	(7.4)	(1.1)	(6.3)	回転ナデ・マメツ	回転ナデ・マメツ	1/8	
68	Ⅲ区　ＳＥ01	土師質土器	小皿	10YR6/2 灰黄褐	10YR7/3 にぶい黄橙					中・並	8.5	1.7	7.3	回転ナデ・回転ヘラ削り	回転ナデ	4/8	
69	Ⅲ区　ＳＥ01	土師質土器	杯	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙					中・並	11.1	3.0	7.7	回転ナデ・回転ヘラ切り	回転ナデ	6/8	
70	Ⅲ区　ＳＥ01	土師質土器	杯	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5Y7/3 浅黄					中・少	14.4			回転ナデ	回転ナデ	口縁部 破片	
71	Ⅲ区　ＳＥ01	土師質土器	杯	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙					細・少				回転ナデ	回転ナデ	口縁部 破片	
72	Ⅲ区　ＳＥ01	土師質土器	杯	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR8/4 浅黄橙					細・少				回転ナデ	回転ナデ	口縁部 破片	
73	Ⅲ区　ＳＥ01	須恵器	椀	2.5Y7/1 灰白	2.5Y8/1 灰白					中・少				回転ナデ	ヘラ磨き・マメツ	口縁部 破片	瓦質焼成
74	Ⅲ区　ＳＥ01	土師質土器	椀	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR6/2 灰黄褐					中・並			5.7	回転ナデ・回転ヘラ切り	指押さえ・ナデ	底部 2/8	
75	Ⅲ区　ＳＥ01	土師質土器	椀	10YR8/2 灰白	10YR8/3 浅黄橙					中・少			5.3	回転ナデ・貼付高台	回転ナデ	底部 8/8	吉備系土師質土器
76	Ⅲ区　ＳＥ01	土師質土器	椀	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙					中・並			8.0	回転ナデ・マメツ	回転ナデ・マメツ	底部 4/8	
77	Ⅲ区　ＳＥ01	土師質土器	不明	7.5YR6/6 橙	7.5YR7/6 橙					中・並			6.5	回転ナデ	回転ナデ	底部 2/8	
78	Ⅲ区　ＳＥ01	須恵器	杯	5Y6/1 灰	5Y5/1 灰					細・並	12.1			回転ナデ	回転ナデ	口縁部 1/8	
79	Ⅲ区　ＳＥ01	須恵器	皿	N5/ 灰	N6/ 灰					細・少			12.0	回転ナデ・削出高台	回転ナデ	底部 1/8	
80	Ⅲ区　ＳＥ01	瓦器	椀	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y5/1 黄灰					細・少				マメツ	マメツ	口縁部 破片	
81	Ⅲ区　ＳＥ01	瓦器	椀	N6/ 灰	N4/ 灰					中・少			4.6	回転ナデ	ヘラミガキ	底部 1/8	

報文番号	遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量			調整		残存率	備考
				外面・釉	内面・胎土	長石・礫	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面・凸面	内面・凹面		
82	Ⅲ区　ＳＥ01	土師質土器	足釜	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR8/2 灰白					中・並				指押さえ後ナデ	指押さえ後ハケ目	脚部　破片	
83	Ⅲ区　ＳＥ01	瓦質土器	鉢	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白					中・少	22.1			指押さえ後板ナデ	板ナデ	口縁部　1/8	
84	Ⅲ区　ＳＥ01	土師質土器	甕	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/2 灰白					中・並				指押さえ後ナデ・指押さえ後ハケ目	ハケ目・マメツ	口縁部　破片	
85	Ⅲ区　ＳＥ01	須恵器	耳皿	N7/ 灰白	N7/ 灰白					中・少			5.2	回転ナデ・削出高台	回転ナデ	底部　3/8	
86	Ⅲ区　ＳＥ01	瓦質土器	壺	N4/ 灰	N4/ 灰					細・並			3.7	回転ナデ	回転ナデ	底部　4/8	
87	Ⅲ区　ＳＥ02（1層）	土師質土器	小皿	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙					中・少	(6.5)	(1.3)	(5.4)	回転ナデ・回転ヘラ削り	回転ナデ	1/8	
88	Ⅲ区　ＳＥ02	土師質土器	小皿	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白					細・少	7.2	(1.1)	5.4	回転ナデ・回転ヘラ切り	回転ナデ	口縁部　1/8	
89	Ⅲ区　ＳＥ02（1層）	土師器	小皿	5YR6/6 橙	5YR6/8 橙					細・並	7.7	(1.4)	6.0	回転ナデ・回転ヘラ切り	回転ナデ	1/8	
90	Ⅲ区　ＳＥ02	土師質土器	小皿	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙					中・少	7.9	1.7	5.6	回転ナデ・回転ヘラ切り	回転ナデ	5/8	
91	Ⅲ区　ＳＥ02	土師質土器	小皿	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙					中・並	8.3	1.3	6.0	マメツ	マメツ	1/8	
92	Ⅲ区　ＳＥ02（1層）	土師質土器	小皿	10YR5/4 にぶい黄褐	7.5YR5/4 にぶい褐					中・少	(8.6)	(1.4)	(7.4)	回転ナデ	回転ナデ	破片	
93	Ⅲ区　ＳＥ02（1層）	瓦質土器	小皿	5Y7/1 灰白	5Y8/1 灰白					中・少	(7.4)	(1.4)	(3.8)	回転ナデ	回転ナデ	1/8	
94	Ⅲ区　ＳＥ02	土師質土器	杯	5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙					中・少	11.9			回転ナデ	回転ナデ	口縁部　1/8	
95	Ⅲ区　ＳＥ02	須恵器	椀	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白					細・少			5.3	回転ナデ後ヘラミガキ・貼付高台	板ナデ	底部　3/8	瓦質焼成
96	Ⅲ区　ＳＥ02（3層）	須恵器	椀	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白					中・少			5.5	指押さえ・回転ナデ	回転ナデ	底部　3/8	瓦質焼成
97	Ⅲ区　ＳＥ02（1層）	土師質土器	足釜	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙					中・並				指押さえ後ナデ	ナデ	脚部　破片	
98	Ⅲ区　ＳＥ02（1層）	須恵器	壺	N5/ 灰	N7/ 灰白					細・少			(10.0)	板ナデ・削出後回転ナデ	板ナデ	底部　1/8	
101	Ⅲ区　ＳＥ02 井戸側内部	土師質土器	小皿	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙					細・少	(7.6)		(5.6)	回転ナデ・マメツ	回転ナデ	口縁部　破片	
102	Ⅲ区　ＳＥ02 井戸側内部	土師質土器	小皿	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/3 浅黄					中・少	7.6	(1.2)	4.2	回転ナデ・回転ヘラ切り	回転ナデ	1/8	
103	Ⅲ区　ＳＥ02 井戸側内部	土師質土器	杯	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y4/1 黄灰					細・少	11.2			回転ナデ	回転ナデ	口縁部　破片	
104	Ⅲ区　ＳＥ02 井戸側内部	土師質土器	椀	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白					細・並			5.5	回転ナデ	板ナデ	底部　2/8	西村型瓦器椀
105	Ⅲ区　ＳＥ02 井戸側内部	須恵器	杯	2.5Y8/1 灰白	2.5Y7/1 灰白					中・多			5.0	回転ナデ	ナデ	底部　6/8	
106	Ⅲ区　ＳＥ02 裏込め	土師質土器	小皿	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄					細・並	(7.3)	(1.2)	(5.3)	回転ナデ・回転ヘラ切り	回転ナデ	1/8	
107	Ⅲ区　ＳＥ02 裏込め	土師質土器	小皿	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR6/3 にぶい褐					細・少	7.7	(1.2)	6.5	回転ナデ・回転ヘラ切り	回転ナデ	2/8	
108	Ⅲ区　ＳＥ02 裏込め	土師質土器	小皿	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白					細・並	(7.7)	(1.4)	(5.6)	回転ナデ・回転ヘラ削り	回転ナデ	1/8	

報文番号	遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量			調整		残存率	備考
				外面・釉	内面・胎土	長石・石英	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面・凸面	内面・凹面		
109	Ⅲ区　ＳＥ02裏込め	土師質土器	小皿	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙					細・並	7.9	1.4	6.1	回転ナデ・回転ヘラ切り	回転ナデ	5/8	
110	Ⅲ区　ＳＥ02裏込め	土師質土器	小皿	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙					細・少	8.6	(1.2)	6.6	回転ナデ・回転ナデヘラ切り	回転ナデ	1/8	
111	Ⅲ区　ＳＥ02裏込め	土師質土器	杯	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白					細・並	12.2			回転ナデ	回転ナデ	口縁部 1/8	
112	Ⅲ区　ＳＥ02裏込め	土師質土器	杯	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙					中・並			8.4	回転ナデ・回転糸切り	回転ナデ後仕上げナデ	底部 8/8	
113	Ⅲ区　ＳＥ02裏込め	土師質土器	椀	7.5Y8/1 灰白	7.5Y8/1 灰白					中・並			(4.4)	回転ナデ	回転ナデ	底部 2/8	
114	Ⅲ区　ＳＥ02裏込め	土師質土器	椀	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白					細・少			5.0	回転ナデ	板ナデ	底部 2/8	吉備系土師質土器椀
115	Ⅲ区　ＳＥ02裏込め	土師質土器	椀	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白					細・並				回転ナデ・ナデ	回転ナデ	底部 3/8	吉備系土師質土器椀
116	Ⅲ区　ＳＥ02裏込め	黒色土器	椀	2.5Y8/3 淡黄	N3/ 暗灰					中・多			6.8	マメツ	マメツ	底部 8/8	内面黒色
117	Ⅲ区　ＳＥ02裏込め	須恵器	椀	5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白					細・並			5.0	回転ナデ	板ナデ	底部 1/8	瓦質焼成
118	Ⅲ区　ＳＥ02裏込め	須恵器	椀	2.5Y7/1 灰白	N8/ 灰白					細・並	(13.1)			回転ナデ	回転ナデ	口縁部 破片	瓦質焼成
119	Ⅲ区　ＳＥ02裏込め	青磁	椀	7.5Y6/2 灰オリーブ	N7/ 灰白					精緻			6.3	施釉・回転ヘラ切り（露胎）	施釉	底部 8/8	龍泉窯系青磁椀Ⅰ類
120	Ⅲ区　ＳＥ02裏込め	瓦質土器	鉢	N4/ 灰	N4/ 灰					中・少				横ナデ・ヘラ削り後ナデ	横ナデ	口縁部 破片	
121	Ⅲ区　ＳＥ02裏込め	土師質土器	土鍋	7.5YR4/1 褐灰	2.5Y5/1 黄灰					中・並				横ナデ・ハケ目	ハケ目・ナデ	口縁部 破片	
122	Ⅲ区　ＳＥ02裏込め	瓦質土器	甕	N6/ 灰	N6/ 灰					中・並				回転ナデ	回転ナデ・マメツ	口縁部 破片	
144	Ⅲ区　ＳＲ01上層	須恵器	杯蓋	N4/ 灰	N4/ 灰					中・並	10.4	3.9	7.6	回転ナデ・ヘラ削り	回転ナデ	2/8	
145	Ⅲ区　ＳＲ01上層	須恵器	杯蓋	5Y7/1 灰白	N6/ 灰					細・少				回転ナデ・ヘラ削り後回転ナデ	回転ナデ・ナデ	ツマミ部 8/8	
146	Ⅲ区　ＳＲ01上層	須恵器	杯蓋	N7/ 灰白	N7/ 灰白					細・並	14.6			回転ヘラ削り・回転ナデ	回転ナデ	口縁部 1/8	
147	Ⅲ区　ＳＲ01上層	須恵器	杯	N5/ 灰	N6/ 灰					細・並	11.8			回転ナデ	回転ナデ	口縁部 破片	
148	Ⅲ区　ＳＲ01上層	須恵器	杯	N7/ 灰白	N7/ 灰白					中・少			10.4	回転ヘラ削り後回転ナデ	回転ナデ	底部 1/8	
149	Ⅲ区　ＳＲ01上層	須恵器	高杯	N7/ 灰白	N7/ 灰白					細・並			9.2	回転ナデ	回転ナデ	脚部 3/8	
150	Ⅲ区　ＳＲ01上層	土師質土器	甕	2.5Y7/1 灰白	2.5Y8/2 灰白					中・少	21.0			回転ナデ	回転ナデ・沈線１条	口縁部 1/8	
151	Ⅲ区　ＳＲ01上層	土師質土器	甕	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙					中・並				マメツ	マメツ	口縁部 破片	
152	Ⅲ区　ＳＲ01上層	須恵器	甕	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白					中・並				横ナデ	横ナデ	口縁部 破片	
153	Ⅲ区　ＳＲ01上層	土師質土器	甕	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/2 灰黄褐					粗・並				横ナデ	ハケ目	口縁部 破片	
154	Ⅲ区　ＳＲ01上層	土師質土器	土釜	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR5/3 にぶい黄褐					粗・並				横ナデ・指押さえ後ナデ	マメツ	体部 破片	
155	Ⅲ区　ＳＲ01上層	須恵器	壺	N4/ 灰	N7/ 灰白					細・少			5.6	回転ナデ・回転ヘラ削り後回転ナデ	回転ナデ	底部 1/8	自然釉付着

報文番号	遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量			調整		残存率	備考
				外面・釉	内面・胎土	長石・礫	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面・凸面	内面・凹面		
156	Ⅲ区　ＳＲ01上層		飯蛸壺	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙					細・多				指押さえ・ナデ	指押さえ後ナデ	破片	
157	Ⅲ区　ＳＲ01上層	土師器	高杯	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙					中・少				マメツ	マメツ・ナデ	脚部　破片	
158	Ⅲ区　ＳＲ01上層	土師器	高杯	10YR7/3 にぶい黄橙	7.5YR6/4 にぶい橙					中・少				板ナデ	指押さえ後ナデ	脚部　破片	
159	Ⅲ区　ＳＲ01下層	須恵器	杯	5Y7/1 灰白	N7/ 灰白					細・少	10.2	4.3	6.6	回転ナデ・ヘラ削り	回転ナデ	3/8	
160	Ⅲ区　ＳＲ01下層	須恵器	杯	N6/ 灰	N6/ 灰					中・少	(14.6)			回転ナデ	回転ナデ	口縁部　1/8	
161	Ⅲ区　ＳＲ01下層	須恵器	杯	N7/ 灰白	N7/ 灰白					細・少	10.5	3.3	6.6	回転ナデ・回転ナデヘラ切り	回転ナデ	3/8	
162	Ⅲ区　ＳＲ01下層	須恵器	椀	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白					中・少	(12.1)			回転ナデ	回転ナデ	口縁部 破片	
163	Ⅲ区　ＳＲ01下層	須恵器	杯	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白					中・少	10.9	3.8		回転ナデ・回転ヘラ削り	回転ナデ	5/8	
164	Ⅲ区　ＳＲ01下層	須恵器	杯	5YR5/2 灰褐	N5/ 灰					中・多	10.3		8.7	回転ナデ・回転ヘラ削り	回転ナデ	1/8	
165	Ⅲ区　ＳＲ01下層	須恵器	高杯	N5/ 灰	N5/ 灰					細・並			8.9	回転ナデ	回転ナデ	1/8	
166	Ⅲ区　ＳＲ01下層	須恵器	皿	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰					中・少	(17.8)			回転ナデ・回転ヘラ削り・ナデ	回転ナデ	口縁部　1/8	
167	Ⅲ区　ＳＲ01下層	弥生土器	壺	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	中・並					16.8			沈線１条・横ナデ	横ナデ・マメツ	口縁部 破片	
168	Ⅲ区　ＳＲ01下層	弥生土器	壺か甕	10YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR6/6 橙	中・並	細・少						3.0	マメツ	マメツ	底部　8/8	
169	Ⅲ区　ＳＲ01下層	土師器	甕(把手)	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙					細・少				ナデ・ハケ目	指押さえ後ナデ	把手部 破片	
170	Ⅲ区　ＳＲ01下層	須恵器	壺	N4/ 灰	N5/ 灰					細・少			(9.0)	回転ナデ・貼付高台	回転ナデ	底部　1/8	
171	Ⅲ区　ＳＲ01下層		管状土錘	N3/ 暗灰	N3/ 暗灰					細・少				マメツ	マメツ	5/8	
175	Ⅲ区　拡張区	須恵器	杯	N6/ 灰	N6/ 灰					中・少	12.6	4.9	8.8	回転ナデ・回転ヘラ削り	回転ナデ	5/8	
176	Ⅲ区　機械掘削	土師質土器	小皿	10YR8/3 浅黄橙	5YR7/6 橙					中・少	8.3	1.6	7.4	回転ナデ・回転ヘラ切り	回転ナデ	口縁部　6/8	
177	Ⅲ区　砂層（遺構面下）	弥生土器	壺	5YR6/8 橙	5YR6/8 橙	中・並	細・少		細・少					マメツ・ハケ目	マメツ・指押さえ後ナデ・板ナデ	体部　2/8	
178	Ⅲ区　トレンチ	弥生土器	注口鉢	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	中・多								指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	破片	
179	Ⅳ区　造成土	土師質土器	杯	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙					細・並	11.9	2.9	7.4	回転ナデ・回転ヘラ削り	回転ナデ	口縁部　1/8	
180	Ⅳ区　造成土	須恵器	蓋	N5/ 灰	N6/ 灰					細・少	18.6			回転ナデ	回転ナデ	口縁部 破片	
181	Ⅳ区　造成土	陶器	椀	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/2 灰白					精緻	11.8			施釉	施釉	口縁部　1/8	京焼風陶器椀
182	Ⅳ区　造成土	磁器	椀	2.5GY7/1 明オリーブ灰 5B3/1 暗青灰	N8/ 灰白					精緻			4.0	施釉 二重網目文	施釉	底部　1/8	伊万里
183	Ⅳ区　造成土	土師器	甕	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR8/3 浅黄橙					中・並	22.1			横ナデ・ハケ目	横ナデ・ハケ目	口縁部　1/8	
184	Ⅳ区　造成土	土師器	甕	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙					細・少	23.9			横ナデ・ハケ目	ハケ目・板ナデ	口縁部　1/8	

報文番号	遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量			調整		残存率	備考
				外面・釉	内面・胎土	長石・石英	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面・凸面	内面・凹面		
185	Ⅳ区　造成土	土師質土器	土釜	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR5/3 にぶい褐					細・少	(24.6)			指押さえ後 横ナデ	横ナデ	口縁部 破片	
186	Ⅳ区　造成土	土師質土器	土釜	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙					中・並				指押さえ後ナデ	ハケ目	口縁部 破片	
187	Ⅳ区　造成土	土師質土器	土釜	10YR6/3 にぶい黄橙	2.5Y8/4 淡黄					粗・少				ナデ・指押さえ後ナデ	ナデ・板ナデ	口縁部 破片	
188	Ⅳ区　造成土	土師質土器	擂鉢	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙					中・並	27.3			指押さえ後ナデ	指押さえ後 オロシ目	口縁部 1/8	
189	Ⅳ区　造成土	瓦質土器	鉢	N6/ 灰	N6/ 灰					細・並	(23.2)			指押さえ後 横ナデ	指押さえ後 横ナデ	口縁部 破片	
190	Ⅳ区　造成土	須恵器	片口鉢	N7/ 灰白	N7/ 灰白					中・少				横ナデ ・自然釉付着 ・板ナデ	横ナデ	口縁部 破片	
191	Ⅳ区　造成土	備前焼	擂鉢	5YR5/2 灰褐	2.5YR5/3 にぶい赤褐					中・少	31.6	12.1	14.5	横ナデ・ヘラ削り	横ナデ後オロシ目	1/8	
192	Ⅳ区　造成土	備前焼	擂鉢	10R5/4 赤褐	10R5/4 赤褐					細・少				横ナデ	横ナデ後オロシ目	口縁部 破片	
193	Ⅳ区　造成土	瓦質土器	甕	N4/ 灰	2.5Y7/2 灰黄					中・並				タタキ目後 横ナデ	横ナデ	口縁部 破片	
194	Ⅳ区　造成土	常滑焼	甕	10YR3/2 黒褐	5YR5/3 にぶい赤褐					細・並				ナデ	回転ナデ	口縁部 破片	
195	Ⅳ区　造成土	備前焼	壺	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y5/1 黄灰					細・少	7.0			回転ナデ	回転ナデ	口縁部 3/8	
196	Ⅳ区　造成土	備前焼	壺	N6/ 灰	N5/ 灰					細・並	10.2			回転ナデ ・波状文４条	回転ナデ	口縁部 2/8	

第３表　大灘遺跡出土瓦観察表

報文番号	遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量			調整		備考
				外面・釉	内面・胎土	長石・石英	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面・凸面	内面・凹面	
123	Ⅲ区　ＳＥ02 裏込め	瓦	平瓦	2.5Y6/3 にぶい黄						中・少	現存長 11.7		現存厚 2.2	タタキ目	布目	

第４表　大灘遺跡出土木器観察表

報文番号	遺構名	部位	法量			樹種	木取り	備考
			現存長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）			
124	Ⅲ区　ＳＥ02	南西支柱	158.5	13.6	12.7	コウヤマキ	芯持ち	
125	Ⅲ区　ＳＥ02	北西支柱	161.2	10.7	10.4	コウヤマキ	芯持ち	
126	Ⅲ区　ＳＥ02	北東支柱	149.4	10.7	7.6		芯持ち	
127	Ⅲ区　ＳＥ02	東南支柱	142.9	9.7	9.2		芯持ち	
128	Ⅲ区　ＳＥ02	西側板（南）	104.1	10.5	2.6		本柾目材	
129	Ⅲ区　ＳＥ02	西側板（北）	122.2	47.3	4.0	ツガ属	板目材Ⅱ	
130	Ⅲ区　ＳＥ02	北側板（西）	117.9	11.7	3.7		本柾目材	
131	Ⅲ区　ＳＥ02	北側板（東）	123.3	43.5	2.2		板目材Ⅱ	
132	Ⅲ区　ＳＥ02	東側板（北）	114.4	28.7	3.5		板目材Ⅰ	
133	Ⅲ区　ＳＥ02	東側板（南）	120.2	27.2	4.8		板目材Ⅱ	
134	Ⅲ区　ＳＥ02	南側板（東）	69.8	8.0	2.6		板目材	
135	Ⅲ区　ＳＥ02	南側板（西）	115.4	45.3	4.0		板目材Ⅱ	「田」線刻
136	Ⅲ区　ＳＥ02	西横桟（上）	60.7	4.4	1.2	コウヤマキ	辺材	
137	Ⅲ区　ＳＥ02	北横桟（上）	58.2	4.6	2.7		辺材	
138	Ⅲ区　ＳＥ02	東横桟（上）	57.8	4.5	1.8		辺材	
139	Ⅲ区　ＳＥ02	南横桟（上）		3.3	1.3		辺材	
140	Ⅲ区　ＳＥ02	西横桟（下）	81.8	5.3	3.4	コウヤマキ	辺材	
141	Ⅲ区　ＳＥ02	北横桟（下）	84.9	5.7	3.1		辺材	
142	Ⅲ区　ＳＥ02	東横桟（下）	86.2	5.8	3.1		辺材	
143	Ⅲ区　ＳＥ02	南横桟（下）	84.9	6.0	2.8		辺材	

第５表　大灘遺跡出土石器観察表

報告番号	遺構名	器種	法量				材質	残存率	備考
			現存長（cm）	現存幅（cm）	現存厚（cm）	重量（g）			
26	Ⅱ（N）区 撹乱１	石鏃	1.8	1.4	0.3	0.6	サヌカイト		凹基式
27	Ⅱ（N）区 撹乱２	石鏃	2.8	1.9	0.4	1.4	サヌカイト		凹基式
62	Ⅲ区　ＳＤ01	凹石	14.3	12.5	4.8	1.250	砂岩	8/8	
100	Ⅲ区　ＳＥ02	凹石	21.1	19.6	9.2	5.290	砂岩		
172	Ⅲ区　ＳＲ01 下層	石鏃	2.7	1.4	3.5	1.5	サヌカイト	8/8	平基式
173	Ⅲ区　ＳＲ01 下層	石鏃	2.7	1.6	0.5	1.8	サヌカイト	8/8	凹基式
174	Ⅲ区　ＳＲ01 下層	石鏃	2.9	1.2	0.3	0.8	サヌカイト		凹基式
197	Ⅳ区造成土	石鍋					滑石	1/8	

第６表　大灘遺跡出土金属器観察表

報文番号	遺構名	器種	法量				備考
			現存長（cm）	現存幅（cm）	現存厚（cm）	重量（g）	
7	Ⅱ（S）区　ＳＤ02	銅銭	2.4	2.3	0.2	2.3	「洪武通宝」
99	Ⅲ区　ＳＥ02	鉄釘	3.7	2.1	0.8	4.9	

第７表　大灘遺跡柱穴観察表

遺構名	形態	直径（cm）	深さ（cm）
01	円形	51	28
02	楕円形	56	8
03	不定形	68	14
04	楕円形	36	24
05	円形	21	18
06	円形	26	19
07	不定形	31	11
09	不定形	24	13
10	不定形	40	43
11	円形	21	26
12	不定形	45	14
13	不定形	31	34
14	円形	29	11
15	不定形	43	6
16	円形	21	10
17	不定形	28	10
18	不定形	19	8
19	不定形	30	6
20	円形	24	7
21	円形	17	10
22	円形	64	25
23	不定形	19	7
24	不定形	62	60
25	円形	27	29
26	円形	31	5
27	円形	27	16
28	楕円形	43	14
29	円形	22	6
30	不定形	27	13
31	不定形	21	35
32	不定形	46	36
33	円形	34	49
34	楕円形	38	11
35	不定形	23	36
36	円形	32	26
38	円形	36	16
39	不定形	20	12
40	円形	25	14
41	円形	15	11
42	円形	22	11
43	不定形	49	40
44	楕円形	31	32
45	円形	28	20
46	円形	37	18
47	楕円形	65	50
48	円形	20	15
49	不定形	19	28
50	円形	28	6
51	不定形	43	29
52	円形	30	24
53	楕円形	39	9
54	円形	37	23
56	円形	33	11
57	円形	31	8
58	不定形	41	56
60	円形	35	16
61	円形	17	7
63	円形	49	22
65	円形	51	13
66	不定形	50	36
67	不定形	65	2

写真図版

遺跡付近空中写真（1）（1948 年アメリカ空軍撮影　M746　50 部分）

図版 2

遺跡付近空中写真（2）（1962 年国土地理院撮影　S1-62-4　C8-31 部分）

調査前遠景（北から）

Ⅰ（N）区　完掘状況（西南から）

図版 4

Ⅰ（S）区　完掘状況（南から）

Ⅰ（S）区　調査区北壁（南東から）

Ⅱ（N）区　完掘状況（南から）

Ⅱ（N）区　調査区東壁（西から）

図版 6

Ⅱ（S）区　完掘状況（東から）

Ⅱ（S）区　SD01・02 掘削状況（北から）

Ⅲ区　掘削状況（南から）

Ⅲ区　完掘状況（西から）

図版 8

Ⅲ区　SE02 掘削状況（東から）

Ⅲ区　SE02 掘削状況（東から）

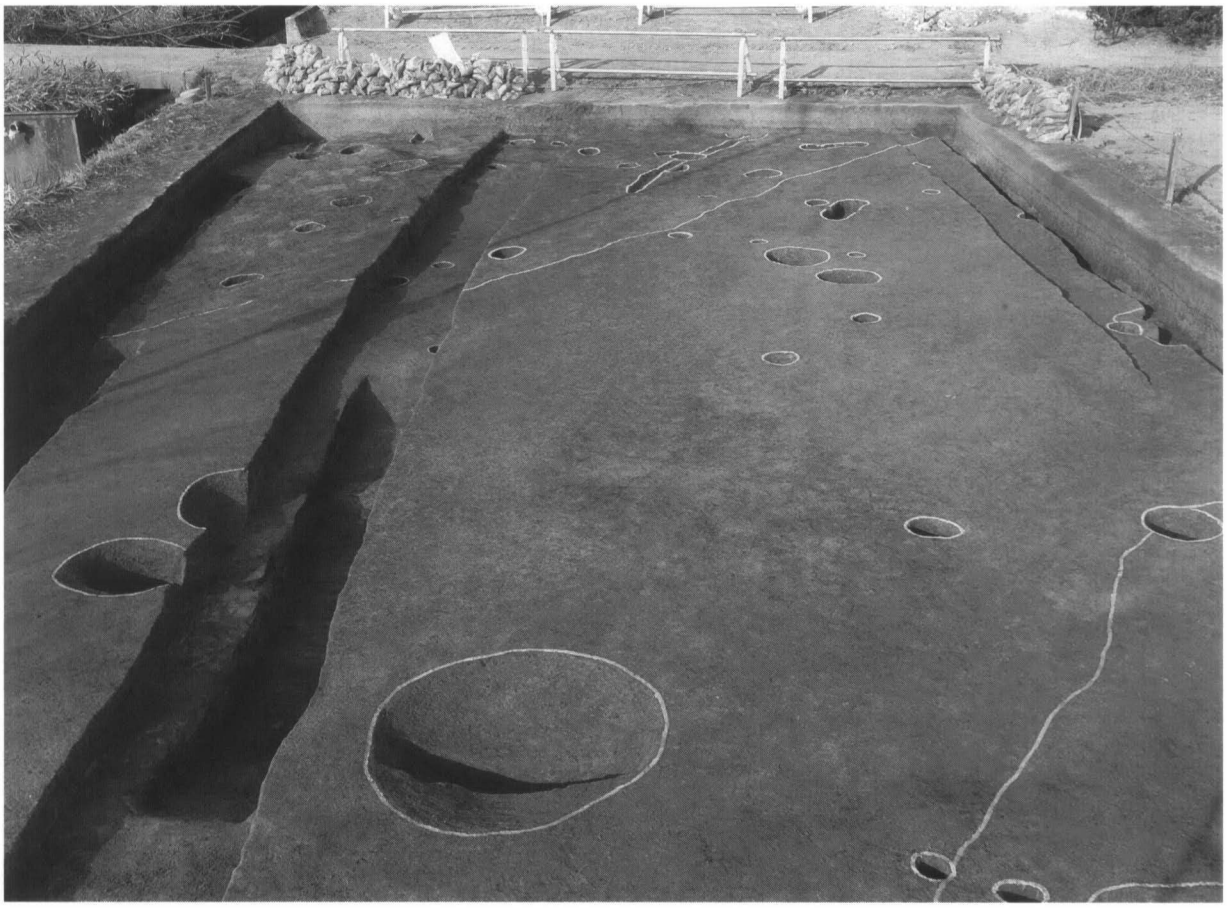
Ⅲ区　SE02 掘削状況（東から）

Ⅲ区　SR01 断面（西南から）

図版 10

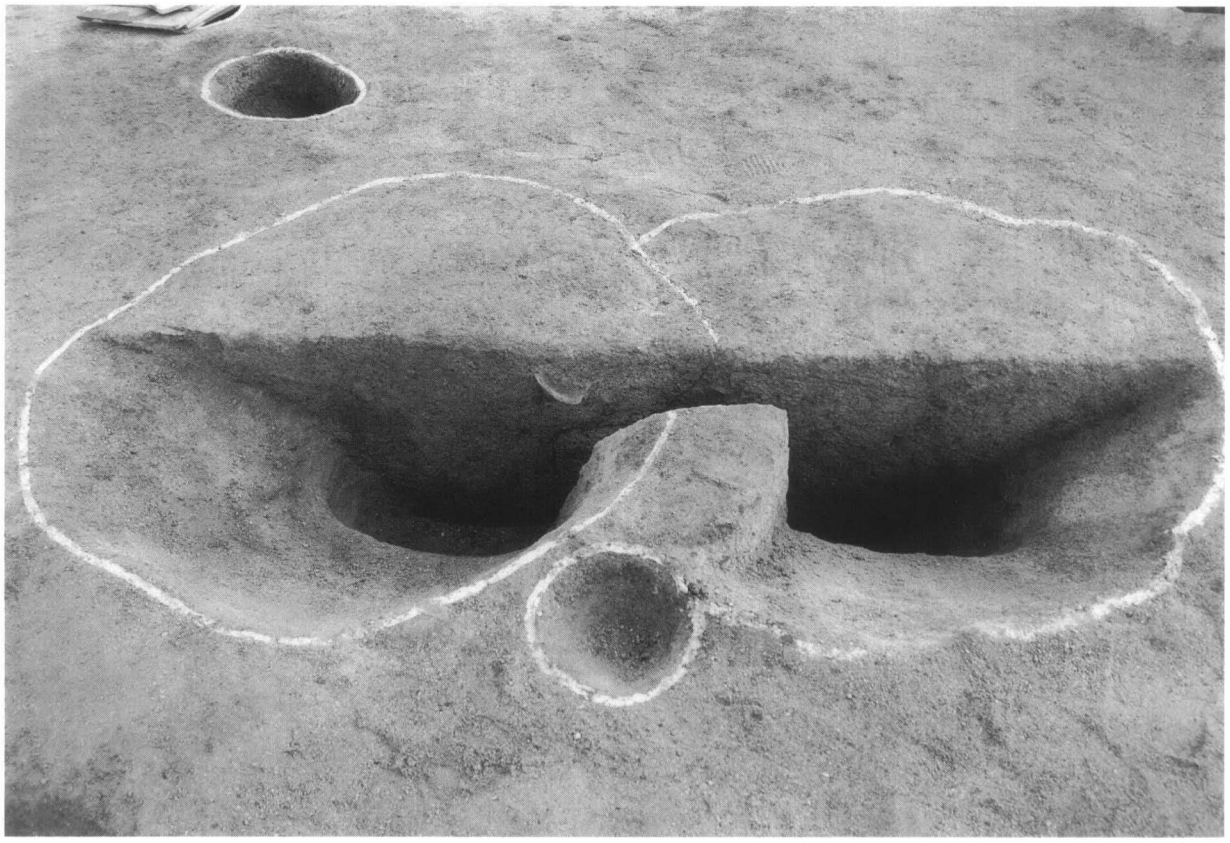
Ⅳ区　造成土　南断面（東南から）

Ⅳ区　調査区南壁（北から）

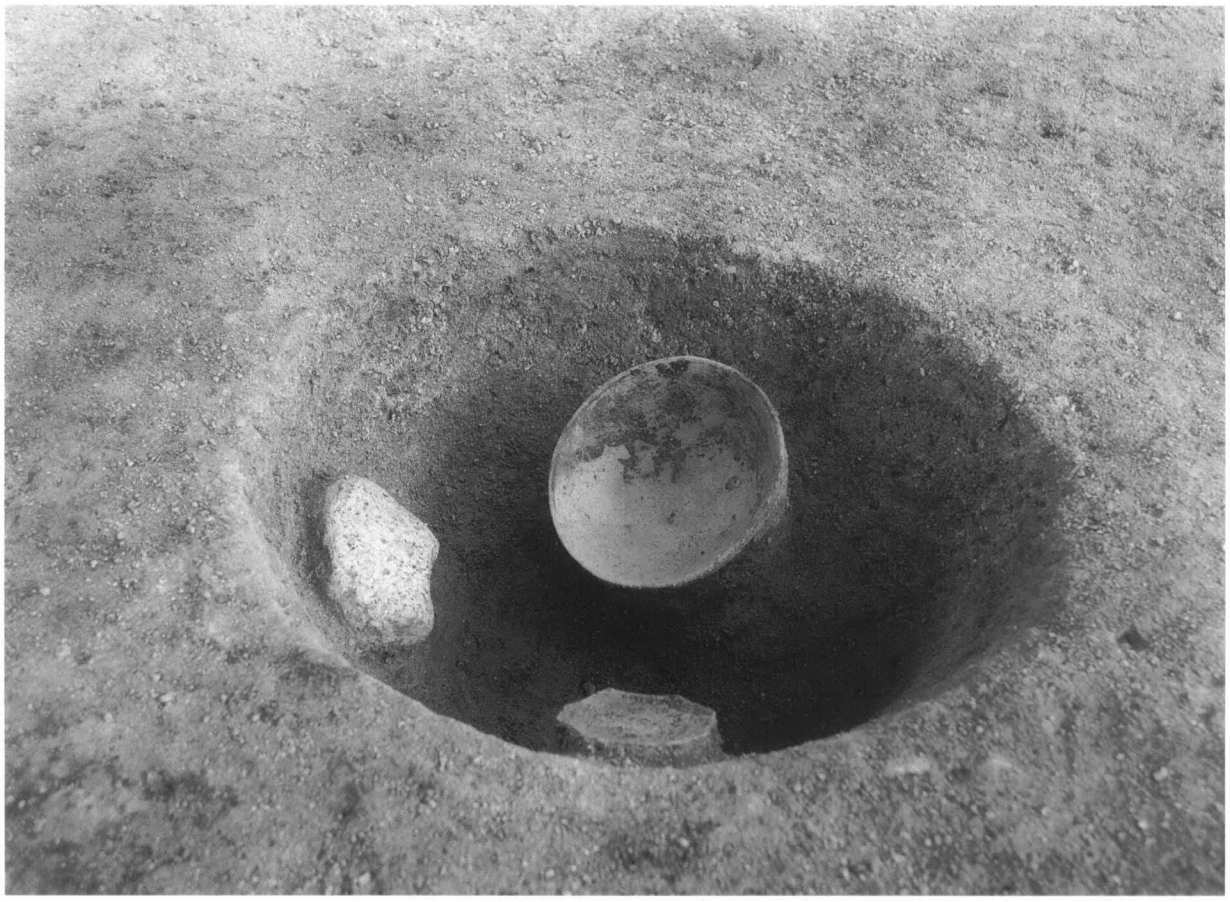


Ⅲ区　上層遺構掘削状況（南から）

Ⅲ区　遠景（南から）



Ⅲ区　SK06・07 断面（西から）



Ⅲ区　SK11 掘削状況（西から）

Ⅲ区　SD01 断面（東から）

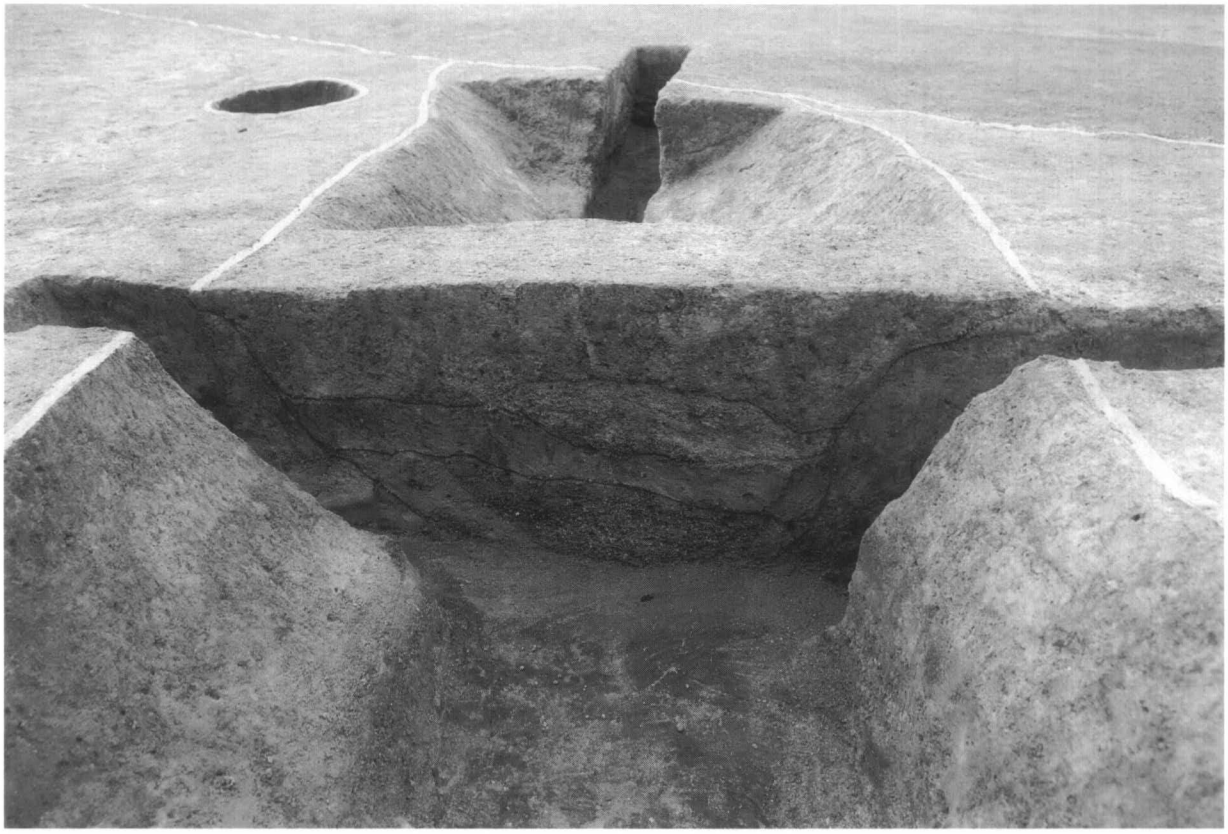
Ⅲ区　SE01 断面（西から）

Ⅲ区　SE01 掘削状況（西から）

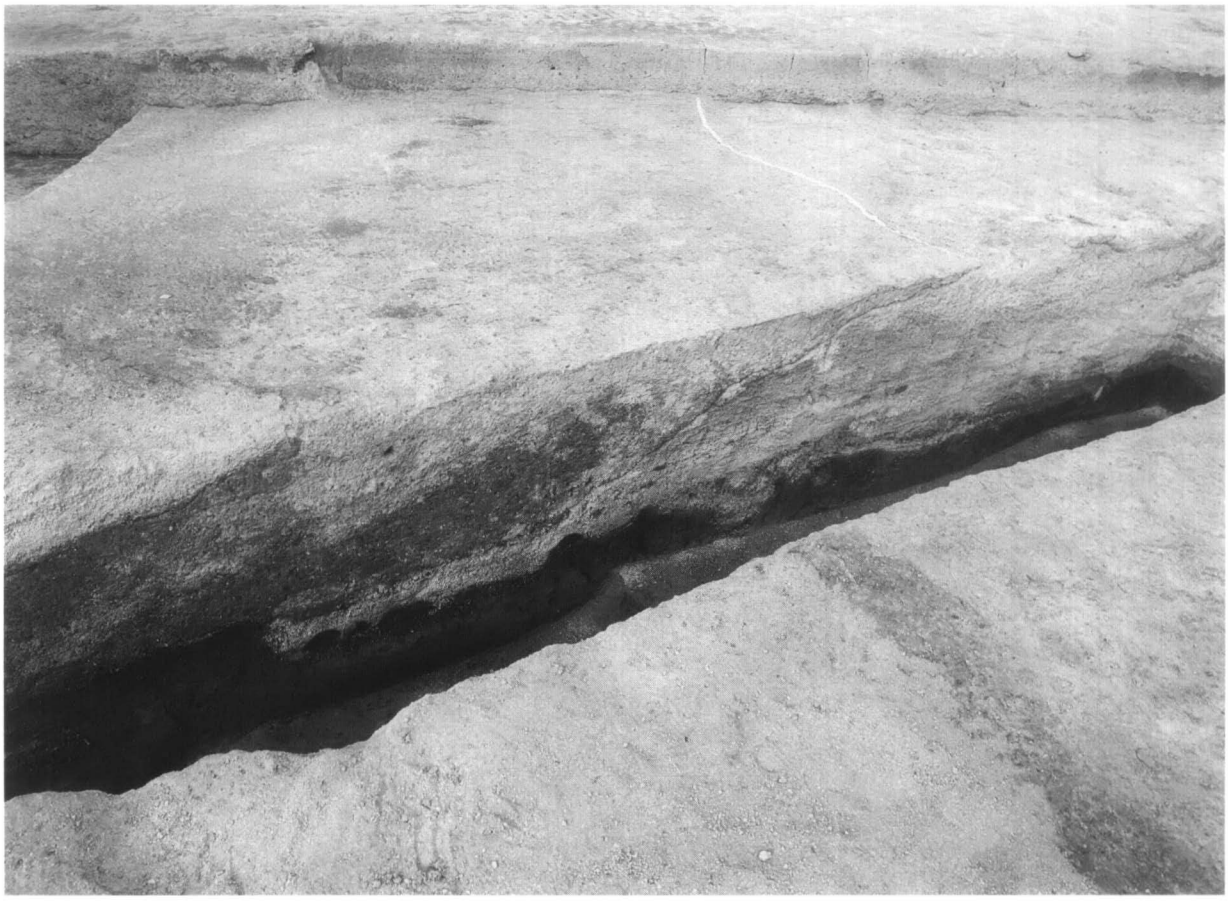
Ⅲ区　SE01 掘削状況（南から）

Ⅲ区　SR01 遺物出土状況（西南から）

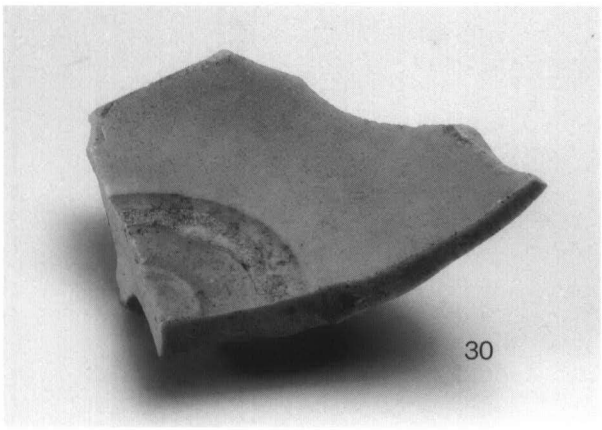
Ⅳ区　掘削状況（北から）

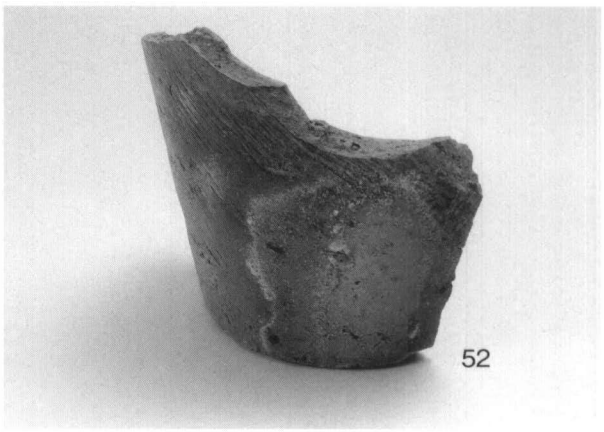


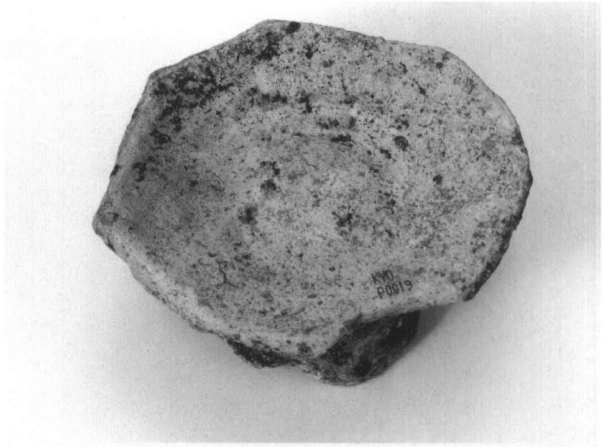
Ⅳ区　SD02 断面（北東から）

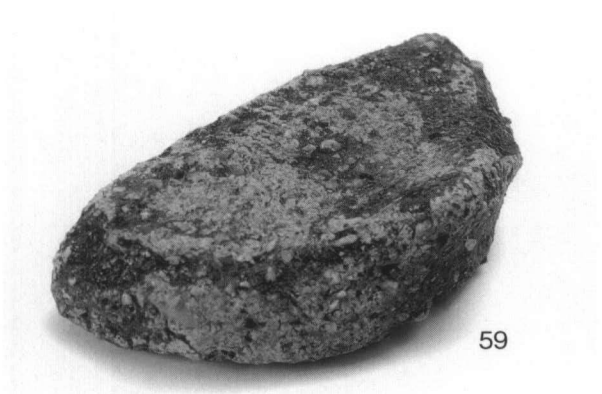


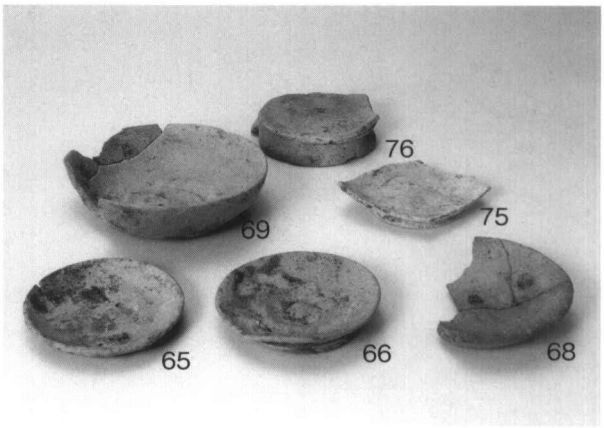
Ⅳ区　造成土　北断面（南から）





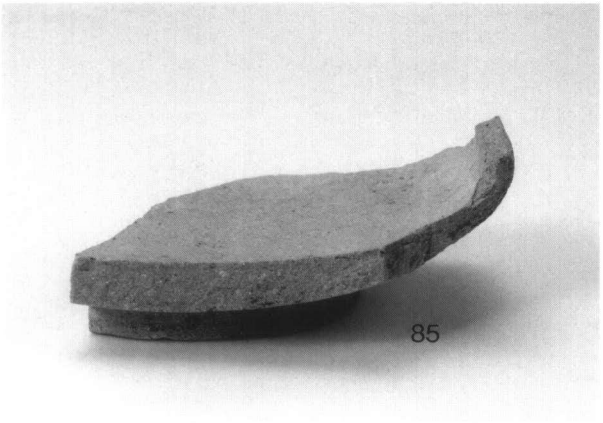


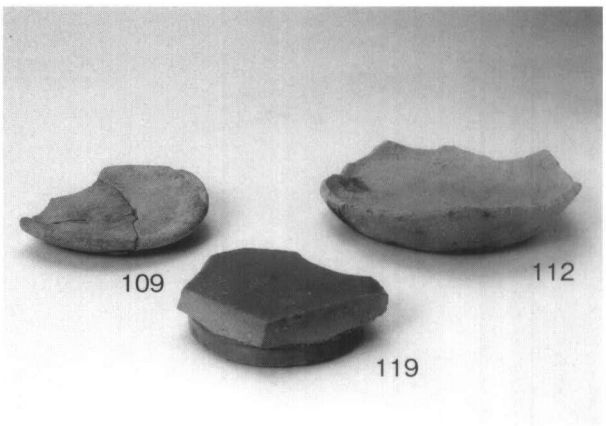




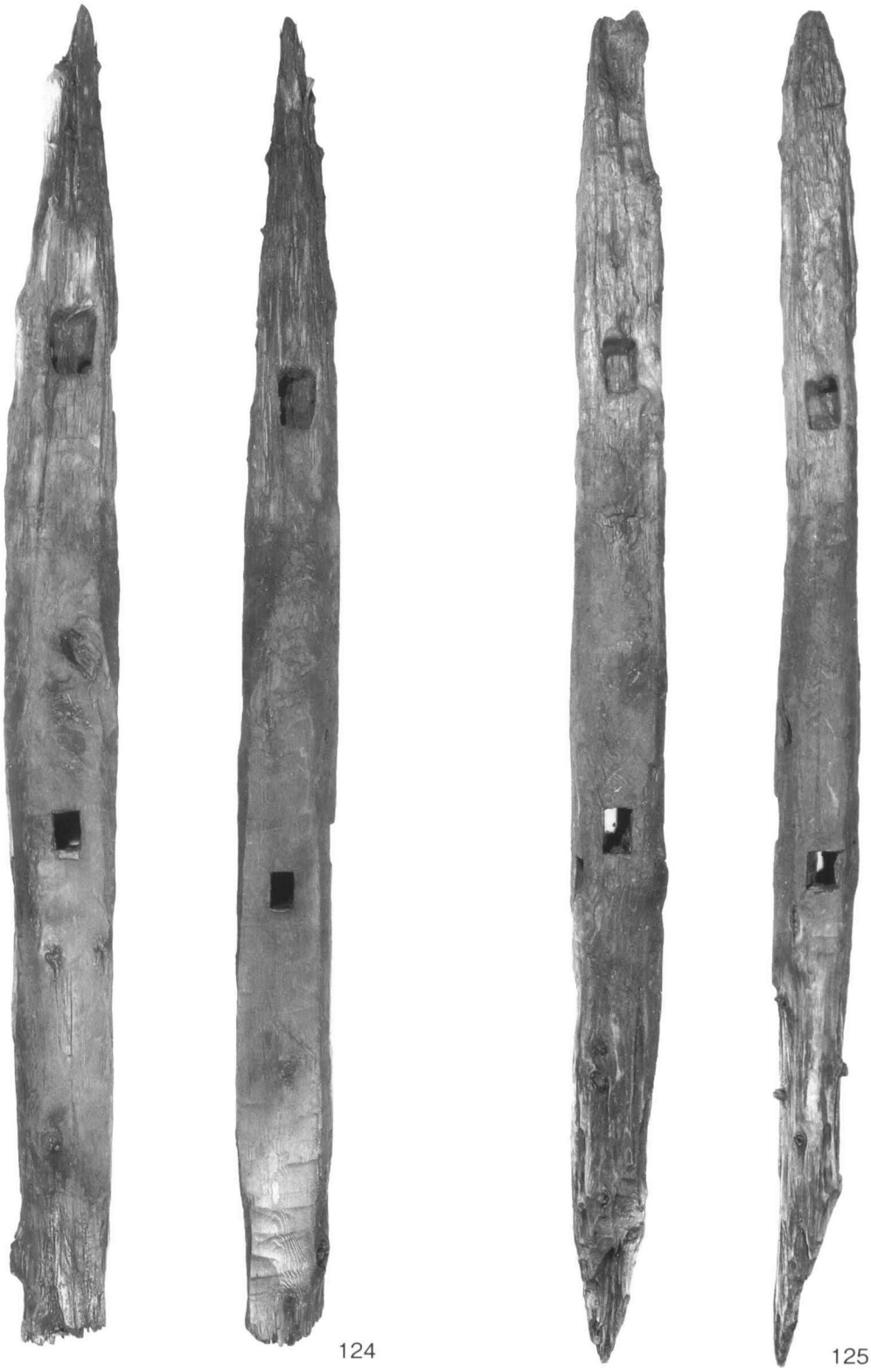
出土遺物

図版 18

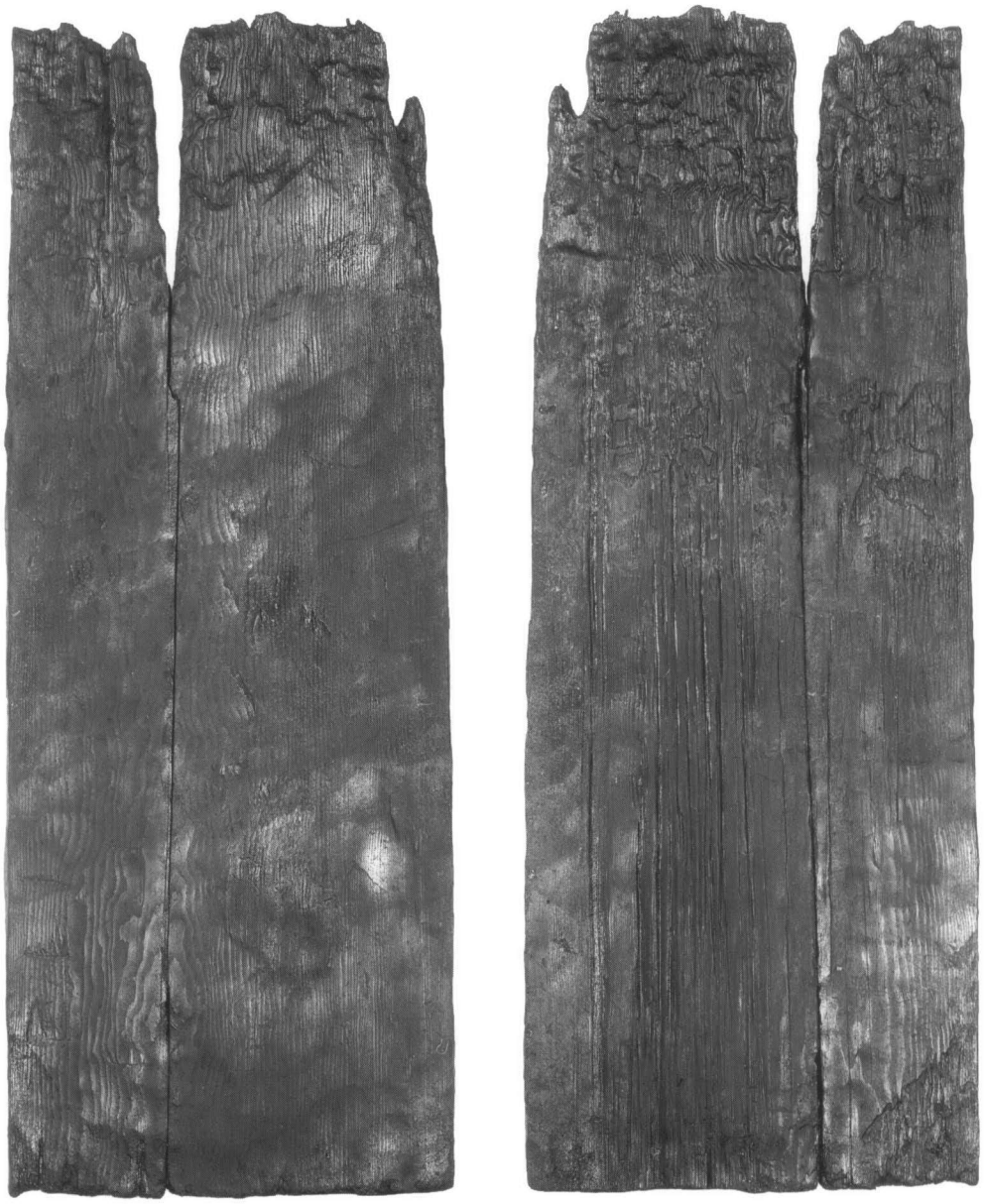




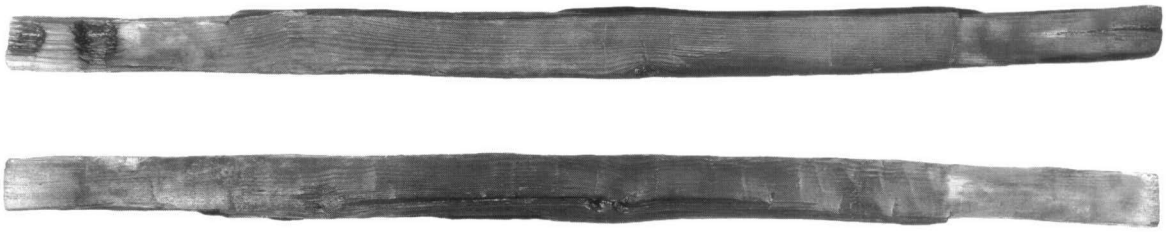
出土遺物



出土遺物

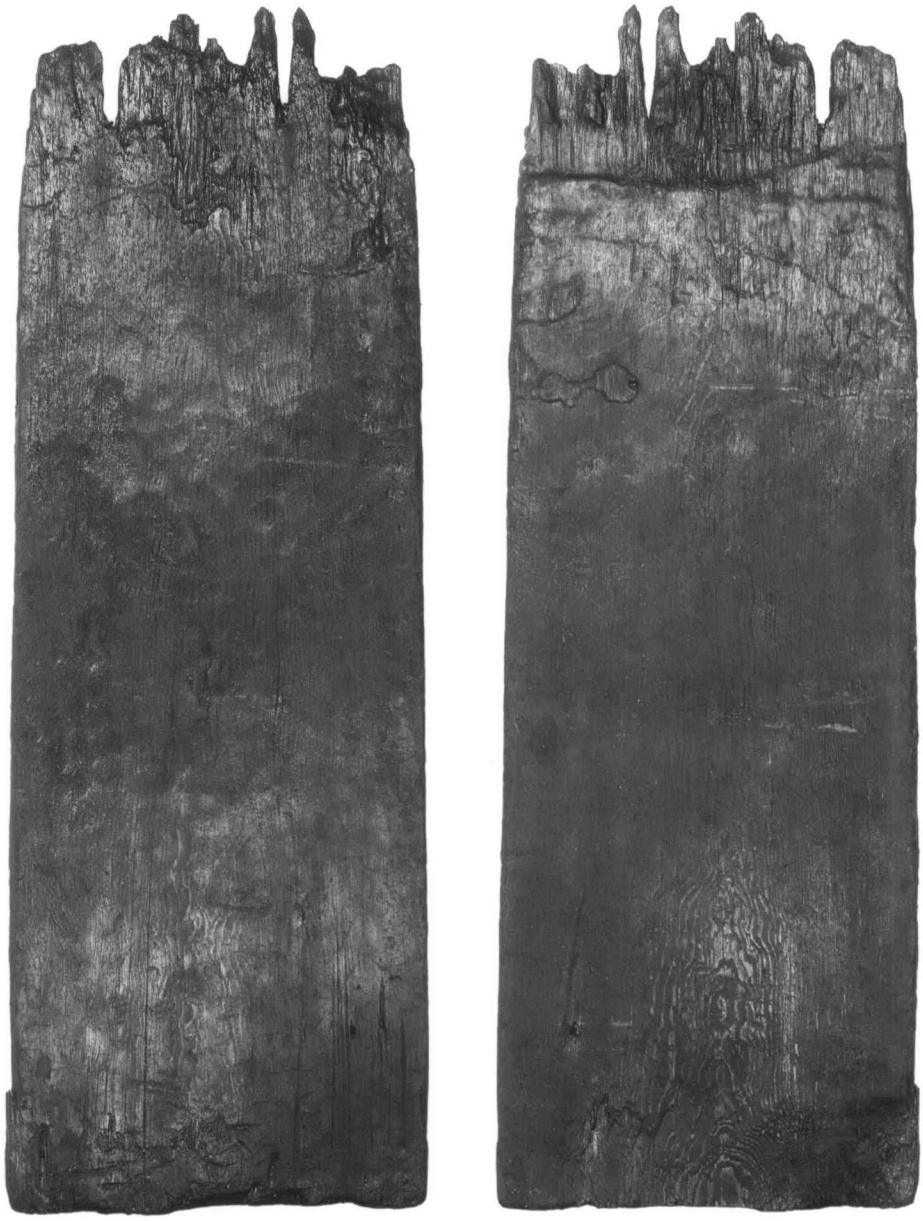


129

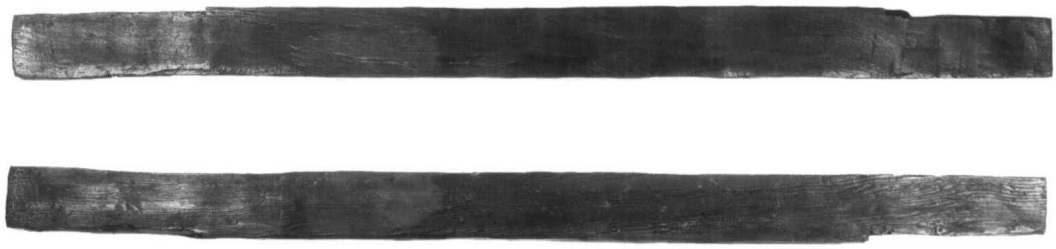


140

出土遺物



131

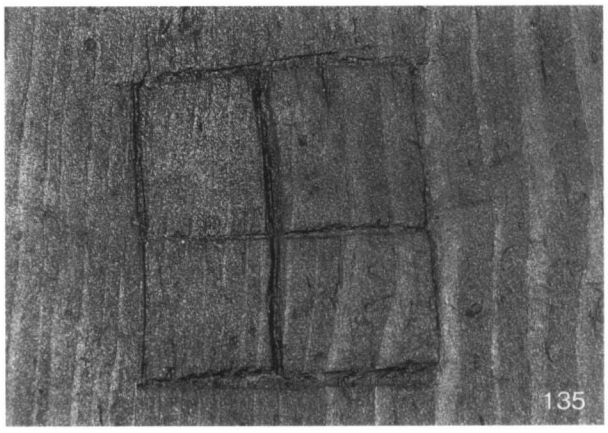


141

出土遺物

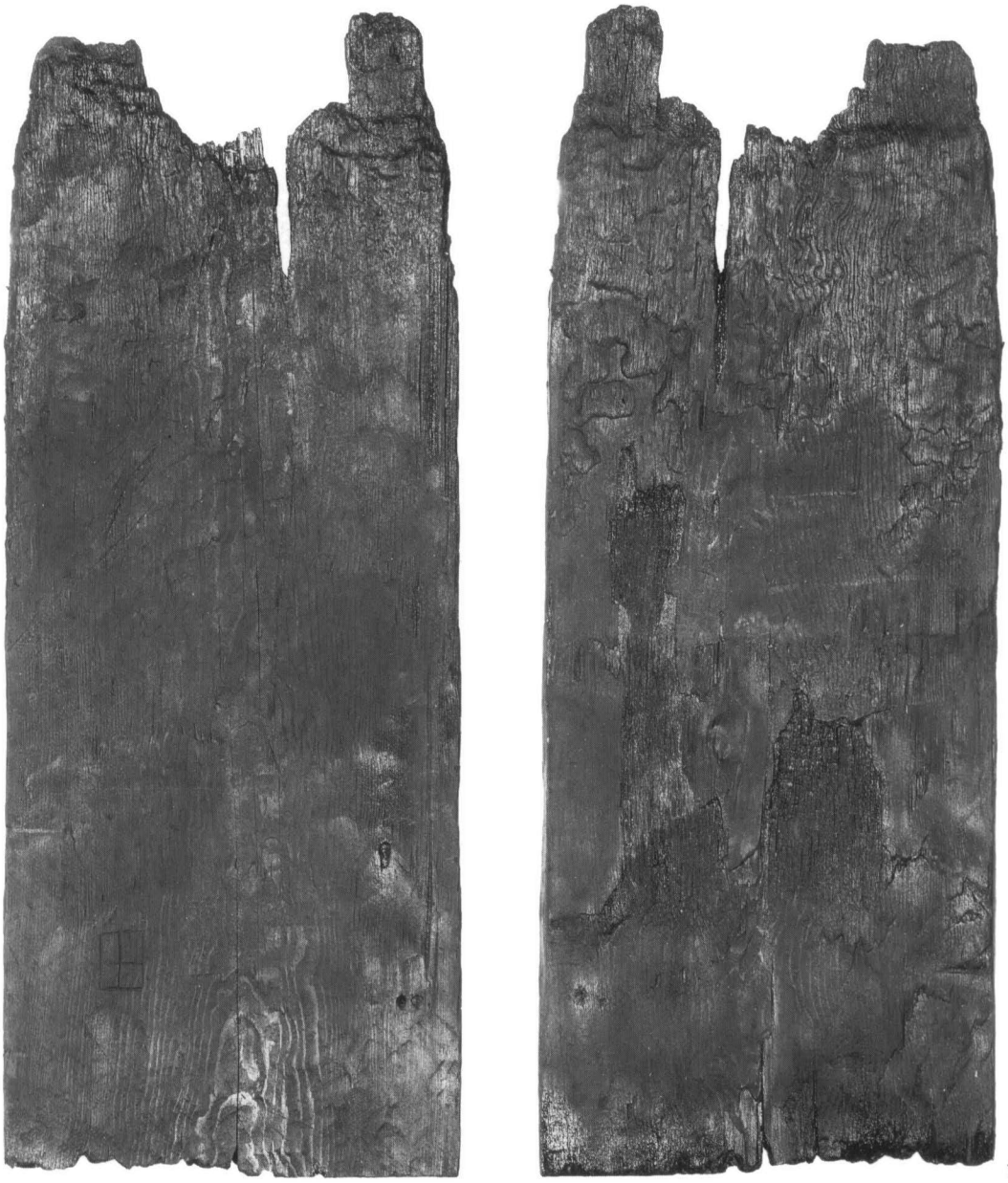
132

133



135

出土遺物



135

143

出土遺物

130

134

報告書抄録

ふりがな	おおなだいせき
書名	大灘遺跡
副書名	春日川河川激甚災害対策特別緊急工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	木下晴一
編集機関	香川県埋蔵文化財センター
所在地	〒762-0024　香川県坂出市府中町字南谷5001-4　TEL.0877-48-2191　Fax.0877-48-3249
発行機関	香川県教育委員会
発行年月日	西暦2008年12月26日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおなだいせき 大灘遺跡	かがわけん 香川県 たかまつし 高松市 ゆらちょう 由良町	37201		34° 17′ 08″	134° 05′ 13″	2007.11.1 ～ 2008.1.31	1,171㎡	春日川 河川改修

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大灘遺跡	集落跡	古代、 中世前半	柵列跡、柱穴跡、土坑、 溝状遺構、井戸跡、旧河道跡	土師器、土師質土器、須恵器、石器	

要約	大灘遺跡は、春日川右岸に接する遺跡で、春日川による浸食、堆積の影響を受けている。遺構検出面は、洪水堆積層と考えられる砂層であるが、調査地の半分程は浸食されていた。調査地の南半において、古代の旧河道跡と中世前半の集落跡を検出した。遺構の遺存度はあまりよくないが、柵列跡・柱穴跡・土坑・溝状遺構・井戸跡等を検出している。このうち1基の井戸跡は、四隅に柱を立て、桟で固定し、外側を縦板で囲う伝統的な構造のものである。

春日川河川激甚災害対策特別緊急工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

大灘遺跡

平成20年12月26日発行
編集　香川県埋蔵文化財センター
〒762-0024 香川県坂出市府中字南谷5001-4
Tel 0877-48-2191　Fax 0877-48-3249
発行　香川県教育委員会
印刷　（有）若葉プリント